

The cover features a large, vibrant green oval shape on the left side, which serves as a background for the text. To the right of this oval, there is a colorful, abstract illustration of a plant or flower with various colored petals (red, orange, yellow, green, blue, and black) and white outlines. The overall design is modern and artistic.

函館短期大学

食物栄養学科

講義要項 2015

食物栄養学科 函館短期大学（平成 27 年度入学生）授業科目一覧

1 年次開講科目

系列	授業科目	期間	形態	単位数	必修区分	掲載ページ
基礎教育科目	教養ゼミナール (S L) I	通年	演習	1	卒	1
	情報機器の操作 I	前期	演習	1	卒 栄教・家庭	2
	情報機器の操作 II	後期	演習	1	卒 栄教・家庭	3
	社会人基礎論 I	後期	講義	1	卒	4
	基礎科学	前期	講義	1		5
	生活数理	前期	講義	1		6~7
	体育実技 (フィットネス・球技)	前期	実技	1	栄教・家庭	8~9
	外国語コミュニケーション 英語・仏語・中国語	後期	講義	2	卒 栄教・家庭	10~13
	ボランティア実習 I	その他	実験実習	1		14
	コンソーシアム基礎教養 I	その他	その他	2		15
コンソーシアム基礎教養 II	その他	その他	2		15	
コンソーシアム基礎教養 III	その他	その他	2		15	
コンソーシアム基礎教養 IV	その他	その他	2		15	
コンソーシアム基礎教養 V	その他	その他	1		15	

2 年次開講科目

系列	授業科目	期間	形態	単位数	必修区分	掲載ページ
基礎教育科目	教養ゼミナール (S L) II	通年	演習	1	卒	16
	社会人基礎論 II	前期	講義	1	卒	17
	日本国憲法	後期	講義	2	栄教・家庭	18
	国際交流	後期	演習	1		19
	保健体育	後期	講義	1	栄教・家庭	20
	コンピュータリテラシー I	前期	演習	1		21~22
	コンピュータリテラシー II	後期	演習	1		23
	ボランティア実習 II	その他	実験実習	1		24
	コンソーシアム基礎教養 VI	その他	その他	2		15
	コンソーシアム基礎教養 VII	その他	その他	2		15
コンソーシアム基礎教養 VIII	その他	その他	1		15	
コンソーシアム基礎教養 IX	その他	その他	1		15	

専門教育科目	社会福祉概論	前期	講義	2	栄 主	25
	健康運動実習 I	前期	実験実習	1	栄	26
	解剖生理学 I	前期	講義	2	栄 健	27
	解剖生理学 II	後期	講義	2	栄 健	28
	運動生理学	後期	講義	2	栄 健	29
	生化学	後期	講義	2	栄	30
	食品学	後期	講義	2	卒 栄フ 家庭 (*)	31
	食品衛生学	前期	講義	2	栄フ (*)	32
	食品学実験	前期	実験実習	1	栄フ	33
	食品衛生学実験	後期	実験実習	1	栄フ (*)	34
	栄養学総論	前期	講義	2	卒 栄フ 家庭 主 (*)	35
	栄養学各論	前期	講義	2	栄フ	36
	健康食生活論	前期	講義	2	栄	37
	栄養指導論 I	前期	講義	2	栄フ 健	38
	栄養指導論 II	後期	講義	2	栄	39
	栄養指導実習 I	後期	実験実習	1	栄フ	40
	給食管理論	前期	講義	2	栄	41
	調理学	後期	講義	2	卒 栄フ	42
	給食管理実習 I	後期	実験実習	1	栄	43
	調理実習 I	前期	実験実習	1	栄フ 家庭	44
調理実習 II	後期	実験実習	1	栄フ	45	
レクリエーション現場実習	その他	実験実習	1	レ	46	
スポーツボランティア実習	その他	実験実習	1		47	
被服学	前期	講義	1	家庭	48	
被服製作実習	後期	実験実習	1	家庭	49	

専門教育科目	公衆衛生学	前期	講義	2	栄 主 (*)	50
	解剖生理学実験	前期	実験実習	1	栄	51
	食品加工学	後期	講義	2	栄フ	52
	臨床栄養学概論	前期	講義	2	栄	53
	栄養生化学実験	後期	実験実習	1	栄フ	54
	臨床栄養学実習	後期	実験実習	1	栄	55
	公衆栄養学概論	後期	講義	2	栄	56
	栄養指導実習 II	前期	実験実習	1	栄	57
	給食管理実習 II	前期	実験実習	1	栄	58
	給食管理実習 III	通年	実験実習	1	栄	59
	調理実習 III	前期	実験実習	1	栄	60
	フードスペシャリスト論	前期	講義	2	フ	61
	フードコーディネイト論	前期	講義	2	フ	62
	食品官能評価	前期	講義	3	フ	63
	食品流通	前期	講義	2	フ	64
	レクリエーション理論	後期	講義	2	レ	65
	レクリエーション実技	後期	実技	1	レ	66
	生涯スポーツ演習	後期	演習	1	レ	67
	健康管理概論 I	後期	講義	1	健	68
	健康管理概論 II	後期	講義	1	健	69
健康運動概論	後期	講義	1	健	70	
有酸素運動の実技	通年	実技	2	健	71	
水泳・水中運動演習	前期	実技	1	健	72	
トレーニングの理論と演習	後期	実技	1	健	73	
健康・体力測定演習	後期	演習	1	健	74	
スポーツ心理学 (発育・発達と老化を含む)	後期	講義	1	健	75	
運動障害と救急処置	後期	演習	1	健	76	
家庭経営学	後期	講義	1	家庭	77	
住居学	後期	講義	1	家庭	78	
保育学	前期	講義	1	家庭 主	79	
公衆栄養実習	その他	実験実習	1		80	
特別研究	その他	演習	2		81	

栄養にかかわる教育に関する科目	学校栄養教育法	後期	講義	2	栄教	82
-----------------	---------	----	----	---	----	----

教科又は教職に関する科目	障害のある生徒の理解と指導	前期	講義	2	家庭	83
--------------	---------------	----	----	---	----	----

教職に関する科目	教職の意義と職務	前期	講義	2	栄教・家庭	84
	教育原理	前期	講義	2	栄教・家庭 主	85
	教育心理学	前期	講義	1	栄教・家庭	86
	教育経営論	後期	講義	1	栄教・家庭	87
	家庭科教育法	後期	講義	1	家庭	88
	道德教育の研究	後期	講義	1	栄教・家庭	89
	生徒指導の研究	前期	講義	1	栄教・家庭	90
	特別活動の研究	後期	講義	1	栄教・家庭	91

教科又は教職に関する科目	地域福祉と教育	後期	講義	2	家庭	92
--------------	---------	----	----	---	----	----

教職に関する科目	進路指導の研究	後期	講義	1	家庭	93
	教育方法論	前期	講義	1	栄教・家庭主	94
	教育相談の研究	後期	講義	2	栄教・家庭	95
	栄養教育実習	前期	実験実習	2	栄教	96
	中学校教育実習	前期	実験実習	5	家庭	97
	教職実践演習 (中学校・家庭)	後期	演習	2	家庭	98
	教職実践演習 (栄養教諭)	後期	演習	2	栄教	99

【注】： (1) 履修登録を申告する授業科目に関しては自身で印を記入し、単位数の合計を確認すること。

(2) 必修区分欄の「卒」「栄」「フ」「健」「レ」「栄教」「家庭」は次のとおりである。

「卒」… 本学における卒業必修科目

「栄」… 栄養士必修科目

「健」… 健康運動実践指導者資格必修科目

「レ」… レクリエーション・インストラクター必修科目

「フ」… フードスペシャリスト資格必修科目

「栄教」… 栄養教諭二種免許必修科目

「家庭」… 中学校教諭二種免許 (家庭) 必修科目

「主」… 社会福祉主事任用資格取得にかかわる科目

これらの科目のうち 3 科目を修得することが資格取得の条件となる (教育原理と教育方法論はいずれか 1 つ)

(3) 上記の授業科目の中で、「給食管理実習 III」(1 単位)、「公衆栄養実習」(1 単位)、「中学校教育実習」(5 単位の内 4 単位)、「栄養教育実習」(2 単位の内 1 単位) は校外実習とし、通常の授業時間割には組み入れないものとする。

(*) W スクール [調理師科・夜間部] の必修科目 (みなし履修科目) に該当します。

基礎教育科目

1 年次配当科目

教養ゼミナール (SL) I	1
情報機器の操作I	2
情報機器の操作II	3
社会人基礎論I	4
基礎科学	5
生活数理	6
生活数理	7
体育実技 (フィットネス)	8
体育実技 (球技)	9
外国語コミュニケーション 英語	10
外国語コミュニケーション 英語	11
外国語コミュニケーション 仏語	12
外国語コミュニケーション 中国語	13
ボランティア実習I	14
コンソーシアム基礎教養I	15
コンソーシアム基礎教養II	15
コンソーシアム基礎教養III	15
コンソーシアム基礎教養IV	15
コンソーシアム基礎教養V	15

2 年次配当科目

教養ゼミナール (SL) II	16
社会人基礎論II	17
日本国憲法	18
国際交流	19
保健体育	20
コンピュータリテラシーI	21
コンピュータリテラシーI	22
コンピュータリテラシーII	23
ボランティア実習II	24
コンソーシアム基礎教養VI	15
コンソーシアム基礎教養VII	15
コンソーシアム基礎教養VIII	15
コンソーシアム基礎教養IX	15

科目名		教員名	配当年次	期間	形態	単位数
教養ゼミナール(SL) I	00110	食物栄養学科教員	1	通年	演習	1
授業目標・到達目標 《授業目標》 短期大学で学ぶことで、卒業後に社会という組織の中で(社会参加)、自分の役割を果たし(役割)、自分なりの価値観を見出せる(価値創造)ような積極的姿勢を身に付ける。 本学のアドミッションポリシーを学園の建学の精神である学園訓3か条(「報恩感謝」・「常識涵養」・「実践躬行」)に基づいて、日常的に行動で表現できる教養を身に付けることが目的である。 《到達目標》 1. 学生として必要な知識と能力を吸収して、自律した健康的な実生活を送ることができる。 2. 集団社会に必要な常識と道徳的良心を身につけ、社会通念に反しない行動ができる。 3. 多くの友人と一緒に学ぶ中で、他人を思いやる気持ちを身につけ、それを態度で示すことができる。 4. 学んだ専門的知識を活かして、将来、自分が社会において果たすべき役割を考えて発表することができる。 5. 「生涯学べ」の習慣を身につけ、自ら学び、自ら伸びることで働くことの価値観を他人に伝えることができる。						
講義計画・準備内容 《講義計画》 1～15回の授業は、担当の教員または自分達で毎回テーマを決めて、自分達で討論を重ねる。学年全体で必要な事項は、合同SLとして実施する。 事例： 1. 自然現象の観察 2. 人間行動の観察 3. 履歴書の具体的な書き方 4. レポートのまとめ方 5. 正しい敬語の使い方 6. 身だしなみが必要なわけ 7. 時事ニュースから社会参加を考える 8. インターネット・ケータイの功罪 9. 自分達学生の職業観 10. 若者の食、車内での化粧 11. 大人と子どもの行動 など 《授業外に行うべき学習(予習・復習、準備学習等)》 新しい友達とコミュニケーションが円滑に行えることを心がける。世の中の出来事にも気づけるようにする。自分の考えを文章として整理できるように心がける。 《標準学修時間の目安》 1回の講義あたり、予習・復習を含めて2時間の学修が必要となる。						
使用教科書 なし						
参考書 なし						
評価方法 毎回の学習姿勢(20%) およびプレゼンテーション(80%)に基づいて総合評価する。						
その他 教科書は使用しないが、毎回必要なプリントに基づいて演習を実施する。 学年全体で必要な事項は、合同SLとして実施する。						

科目名		教員名	配当年次	期間	形態	単位数
情報機器の操作 I	00130	山崎 幸路	1	前期	演習	1
授業目標・到達目標 《授業目標》 パソコンをはじめとする情報機器は、文書・資料を作成し、情報を発信するための道具となっています。パソコン操作を通じて、文書作成を中心に学習します。総合的な操作の考え方と何が実務で要求されているかを理解し、実社会で役立つ技術を学ぶことが授業の目標です。 《到達目標》 1. マイクロソフト社Windows® の基本操作を理解し、実務的な操作画面のレイアウトができる 2. インターネットを活用し、情報検索、メールの送受信ができる 3. キーボード操作のタッチタイプの基本を理解し、正しい操作で入力ができる 4. 言語バーと文字変換システムを理解し、文書入力支援のカスタマイズができる 5. ワード編集機能を使って文書作成、地図作成、図形描画と編集ができる 6. 外部データを利用してグラフ挿入し、データ編集ができる 7. DTP機能を理解し、高度なレイアウトと効果的な配色となる文書編集ができる						
講義計画・準備内容 《講義計画》 第1回 ログインとファイル管理。タッチタイプの基本と習得方法 第2回 インターネット検索。文字変換と記号入力。辞書の利用 第3回 文書入力。書式設定。印刷プレビューと実行。ショートカットキーの活用 第4回 オートコレクト、均等割り付け、網掛けなどを使った文書編集 第5回 表の作成と編集を使った文書編集 第6回 クリップアート、ワードアートを使った文書編集 第7回 図形描画、テキストボックスを使った文書編集 第8回 段組み、ドロップキャップ、ページ罫線を使った文書編集 第9回 はがき作成、アドレス帳の作成、フォーム入力、宛名印刷 第10回 エクセルデータ等の外部データの差し込み印刷 第11回 グラフ挿入とデータ編集 第12回 DTP機能活用、フォント知識、テンプレート、グリッドの設定 第13回 DTP技術の基本操作、写真挿入とトリミング 第14回 高度なDTP技術、テキストボックスのリンク、配色とレイアウト 第15回 実務的複合文書作成練習 《授業外に行うべき学習（予習・復習、準備学習等）》 【予習】 別途プリント配布する〈授業ノート〉とテキストとを併読し、テキストに必要事項を書き込みます。どのようなスキルの学習がなされるのかおおまかに把握しておきます。 【復習】 テキストを読み、実際にパソコンの画面を見ながら操作して、授業内容と同じ操作ができるかを確認します。また授業で指定された課題を授業ノートやテキストを参考にして操作演習して課題を完成させます。 《標準学修時間の目安》 1回の講義あたり予習・復習を含めて2時間の学修が必要である。						
使用教科書 30時間でマスター Word2010, 実教出版, ISBN879-4-407-32092-3 実践ドリルで学ぶ Office活用術2010対応, NOA出版						
参考書 知りたい操作がすぐわかる Word2010全機能Bible, 西上原 裕明, 技術評論社, ISBN-13: 978-4774144283						
評価方法 実務的成果物の課題作成能力を評価する。授業態度・課題取り組み姿勢も評価対象として重視する。						
その他 まだパソコンに慣れていない学生から十分に操作知識とスキルのある学生まで、現在のスキルの幅を考えて、ゆっくりな速度で高度な内容を含めて学習していく。適宜ノートを取る。連続性のある授業であるため、極力遅刻と欠席をしないように。また遅刻、欠席をした場合はシラバスを見たり、友人に聞いたりして進んだページを自学学習しておくこと。						

科目名		教員名	配当年次	期間	形態	単位数
情報機器の操作Ⅱ	00230	山崎幸路	1	後期	演習	1
授業目標・到達目標 《授業目標》 パソコンをはじめとする情報機器は、資料を作成し、情報を発信するための道具となっています。パソコン操作を通じて、資料作成、分析、加工を中心に学習します。総合的な操作の考え方と何が実務で要求されているかを理解し、実社会で役立つ技術を学ぶことが授業の目標です。 《到達目標》 1. マイクロソフト社Windows® の操作を理解し、実務的な操作ができる。 2. インターネットの危険性を理解し、安全に活用し、情報の送受信ができる。 3. データの編集、表示形式と罫線のレイアウトができる。 4. 絶対参照を使った式の作成と論理関数の条件複合を理解し、関数の作成ができる。 5. 適切なグラフを選択し、効果的で訴求効果のあるグラフを作成することができる。 6. データ抽出と集計の方法を学習し、データベースの基本を理解し、簡単な集計ができる。 7. VLOOKUP関数、データベース関数を学習し、データ管理の基本を理解し、実際に簡単な関数を使える。						
講義計画・準備内容 《講義計画》 第1回 データ入力、SUM関数、エラーチェック、ファイル管理、印刷設定 第2回 グラフ作成とレイアウトおよび印刷、グラフの変更、連続データ 第3回 行列の編集、表示形式変更、文字位置指定、リストオートフィル、インデント 第4回 日付と時刻の入力形式、形式を選択して貼り付け、罫線、オートカルク 第5回 セル番地の絶対参照、文字の属性、最大値の検出、データカウント、セルの保護 第6回 ROUND関数、端数処理の問題点、IF関数、論理関数の条件複合、ネストの作成 第7回 条件付き書式、データバー、カラースケール、アイコンセット・ルール設定方法 第8回 スパークライン、グラフ作成、軸ラベル設定、対比線、凡例設定 第9回 折れ線グラフ、円グラフ、データ範囲の変更、3Dグラフ、グラフの回転、 第10回 複合グラフ、ドーナツグラフ、レーダーチャート、XYグラフ、絵グラフ 第11回 データベース、オートコンプリート、日付・ふりがな表示、キーとソート 第12回 データ抽出、フィルタオプション、条件比較演算子、データクロス集計 第13回 RANK.EQ関数、LARGE関数、VLOOKUP関数、INDEX関数、LEN関数、LEFT関数 第14回 データベース関数、条件付き集計、COUNTIF関数、3D集計、データリンク埋め込み 第15回 実務的複合資料作成練習 《授業外に行うべき学習（予習・復習、準備学習等）》 【予習】 別途プリント配布する〈授業ノート〉とテキストとを併読し、テキストに必要な事項を書き込みます。どのようなスキルの学習がなされるのかおおまかに把握しておきます。 【復習】 テキストを読み、実際にパソコンの画面を見ながら操作して、授業内容と同じ操作ができるかを確認します。また授業で指定された課題を授業ノートやテキストを参考にして操作演習して課題を完成させます。 《標準学修時間の目安》 1回の講義あたり予習・復習を含めて2時間の学修が必要である。						
使用教科書 30時間でマスター Excel2010, 実教出版, ISBN879-4-407-32093-0 実践ドリルで学ぶ Office活用術2010対応, NOA出版						
参考書 知りたい操作がすぐわかる Excel2010全機能Bible, 高橋 慈子 八木 重和, 技術評論社, ISBN-13: 978-4774145532						
評価方法 実務的成果物の課題作成能力を評価する。授業態度・課題取り組み姿勢も評価対象として重視する。						
その他 まだパソコンに慣れていない学生から十分に操作知識とスキルのある学生まで、現在のスキルの幅を考えて、ゆっくりな速度で高度な内容を含めて学習していく。適宜ノートを取る。連続性のある授業であるため、極力遅刻と欠席をしないように。また遅刻、欠席をした場合はシラバスを見たり、友人に聞いたりして進んだページを自学学習しておくこと。						

科目名		教員名	配当年次	期間	形態	単位数
社会人基礎論 I	00120	加納洋人・村木永親 黒澤香織・林原和哉	1	後期	講義	1
授業目標・到達目標 《授業目標》 社会で実際に仕事をする際に必要となる基礎的知識・能力を学ぶ。 1. 実社会に出て必要となるコミュニケーション能力やマナーを身につける。 2. 現代社会の動きを自分で捉える能力と、職業人として将来を見通すことができる社会的常識を身につける。 3. 就職活動で必要となる基礎的知識を身につける。 《到達目標》 1. 対人、電話応対など社会に出て必要となるコミュニケーション能力を養う。 2. 敬語、立ち居振る舞いなどのマナーを身につける。 3. 新聞、テレビのニュース、報道番組に関心を持ち、情報を自分で集めることができるようにする。就職試験の時事問題を解くことができるようにする。 4. 就職活動で必要となるエントリーシート、小論文を書くことができるようにする。面接試験、グループディスカッションの場で自分の意見を言うことができるようにする。						
講義計画・準備内容 《講義計画》 第1回 社会人とは何か。なぜ働くのか。社会人と学生の違い。キャリアをどう形成してゆくか。仕事の取り組み方と進め方の基本。 第2回 ビジスマナーの基本。会話の基本、敬語の使い方、接遇の仕方の基本を学ぶ。 第3回 電話応対の基本、さまざまな場面での接遇の基本について学ぶ。 第4回 企業と社会、企業の種類、会社の仕組み、組織、ルール、時間管理について学ぶ。 第5回 仕事の取り組み方と進め方、「ホウレンソウ」（報告・連絡・相談）PDCAサイクルについて学ぶ。 第6回 現代社会とは何か、新聞記事を読んで理解する。新聞の読み方、政治面、経済面、国際面、社会面、文化面、社説、解説・特集記事とは何か。 第7回 ニュースの読み方の基本。社会面の記事、ニュースの読み方。カレントトピックスと基礎的時事用語の解説。 第8回 政治、国際、経済記事の読み方。現代の政治課題、国際問題の基礎と用語の解説。 第9回 報告書、レポート、小論文の書き方の基本。資料の収集はどう行うのか。論理的な思考能力を身につけよう。 第10回 ディスカッションの仕方、会議の仕方の基本。 第11回 就職活動の基本。正規・非正規雇用の違いって何。エントリーシート、履歴書の書き方。企業の人事担当者はどこをみているのか。 第12回 面接の基本。面接者はどこをみているのか。身だしなみ、あいさつ、言葉遣いの基本。 第13回 集団面接、グループディスカッションの基本。 第14回 採用試験の理解。筆記試験、SPI試験の対応の仕方。 第15回 キャリアをどう磨くか。5年後の自分、10年後の自分を考える。 《授業外に行うべき学修（予習・復習、準備学習等）》 普段から新聞等で情報を得て整理する。配布プリントを読んで復習をする。 《標準学修時間の目安》 1回の講義あたり0.5時間の予習と1.5時間の復習を行うこと。						
使用教科書 ビジネス能力検定ジョブパス3級公式テキスト，一般財団法人職業教育・キャリア教育財団監修， 日本能率協会マネジメントセンター，ISBN-13: 978-4-8207-4916-5 C3034						
参考書 なし						
評価方法 授業ごとに実施する小テスト（40%）、授業中の発言、対応能力の審査（30%）、課題・レポート審査（30%）を数値化して、総合評価する。						
その他 外部講師による特別講義を行う場合がある。						

科目名		教員名	配当年次	期間	形態	単位数
基礎科学	00060	藤井壽夫・沼田卓也 澤辺桃子	1	前期	講義	1
<p>授業目標・到達目標</p> <p>栄養学や食品学及びこれらに関連する科目の修得に、化学や生物学（ことに生化学）の知識が不可欠である。本講義は、高校で化学を履修しなかった学生、あるいは化学が苦手な学生を対象とする。したがって、化学が得意な学生は本講義を選択する必要はない。</p> <p>《授業目標》</p> <p>本学で学ぶ専門科目を理解するために必要とする「基礎化学」の基本的な知識を学ぶことである。</p> <p>《到達目標》</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 物質の成り立ちを説明できる。 2. 基本的な元素名を元素記号で書くことができる。 3. 中和反応の式を書いて説明できる。 4. pHを水素イオンの濃度との関係で説明できる。 5. 一定のモル濃度や規定度の溶液を作成するための計算ができる。 6. 有機化合物の主な官能基を書いて、説明することができる。 						
<p>講義計画・準備内容</p> <p>《講義計画》</p> <p>第1回 物質の成り立ち（原子・分子・原子の結合）</p> <p>第2回 物質の成り立ち（モルとは何か）</p> <p>第3回 化学反応（化学反応式）</p> <p>第4回 化学反応（中和反応と酸化還元反応）</p> <p>第5回 溶体の化学1（電離・イオン）</p> <p>第6回 溶体の化学1（酸と塩基、pH）</p> <p>第7回 溶体の化学2（溶解度）</p> <p>第8回 溶体の化学2（重量%濃度）</p> <p>第9回 溶体の化学2（モル濃度、規定度）</p> <p>第10回 有機化合物1（炭化水素）</p> <p>第11回 有機化合物1（構造式）</p> <p>第12回 有機化合物2（官能基）</p> <p>第13回 有機化合物2（生体物質1）</p> <p>第14回 有機化合物2（生体物質2）</p> <p>第15回 まとめ、復習問題</p> <p>《授業外に行うべき学習（予習・復習、準備学習等）》</p> <p>授業で学んだことがしっかりと覚えられるまで、復習に力をいれること。</p> <p>《標準学修時間の目安》</p> <p>次回の講義までに予習・復習を含めて2時間の学修が望ましい。</p>						
<p>使用教科書</p> <p>なし</p>						
<p>参考書</p> <ul style="list-style-type: none"> ・食を中心とした化学,第2版,北原 重登他,東京教学社 ・化学基要（全改版）,林 太郎,裳華房 ・化学（基本の考え方を中心に）,A.Sherman他（石倉訳）,東京化学同人 						
<p>評価方法</p> <p>筆記試験および内容理解の達成度により総合的に評価する。</p>						
<p>その他</p> <p>函館短期大学の学生は函館大学の図書館を利用できます。こちらにも沢山の参考書類があるので積極的に利用すること。</p> <p>教科書は使用せず、講義毎にプリントを配布する。</p>						

科目名		教員名	配当年次	期間	形態	単位数
生活数理	00061	沼田卓也	1	前期	講義	1
授業目標・到達目標 《授業目標》 これから様々な授業を受けるにあたり、必要とされる数学の能力を身につける。また、様々な文章題を解くことを通じて、物事を論理的に考える力を養う。 《到達目標》 1. 数量と代金の関係を理解し、数式に表すことができる。 2. 速度、時間、距離の関係を理解し、数式に表すことができる。 3. 歩合、%、小数、分数の関係を理解し、数式に表すことができる。 4. 個数、合計、平均の関係を理解し、数式に表すことができる。 5. 問題文から必要な情報を読み取り、方程式を立て、答えを導き出すことができる。						
講義計画・準備内容 《講義計画》 第1回 計算の規則・方法 第2回 過不足に関する基本問題 第3回 過不足に関する応用問題 第4回 代金に関する基本問題 第5回 代金に関する応用問題 第6回 速度・時間・距離に関する基本問題 第7回 速度・時間・距離に関する応用問題 第8回 割合に関する基本問題 第9回 割合に関する応用問題 第10回 原価・定価・売値に関する基本問題 第11回 原価・定価・売値に関する応用問題 第12回 溶液の濃度に関する基本問題 第13回 溶液の濃度に関する応用問題 第14回 平均に関する基本問題 第15回 平均に関する応用問題 《授業外に行うべき学習（予習・復習・準備学習等）》 配布したプリントの練習問題を繰り返し解く。 《標準学修時間の目安》 1回の講義あたり予習・復習を含めて2時間の学修が必要である。						
使用教科書						
参考書 なし						
評価方法 定期試験(50%)、学習姿勢(50%)により総合評価する。						
その他 教科書は使用せず、講義毎にプリントを配布する。						

科目名		教員名	配当年次	期間	形態	単位数
生活数理	00061	吉田訓	1	前期	講義	1
授業目標・到達目標 《授業目標》 今後ますます各方面において、必要な場面で生きて働き、進んで活用できる数学的な表現や処理の仕方が求められる。 本講義では、その基になる基礎的な知識や技能を確実に身につけさせるとともに、進んで生活に生かせるようにすることを目的とする。 《到達目標》 1. 数学的な知識や技能を実生活に用いることができる。 2. 事象を数理的に考察し、効率的に処理することができる。 3. 割合の表現方法を理解し、活用することができる。 4. 方程式の意味を理解し、方程式を用いることができる。 5. 不等式の意味を理解し、不等式を用いることができる。 6. データを統計的に処理することができる。						
講義計画・準備内容 《講義計画》 第1回 数のしくみと文字(数のしくみ・整式・文字式) 第2回 一次方程式の解法 第3回 一次方程式の応用 第4回 連立方程式の解法 第5回 連立方程式の応用 第6回 不等式の解法 第7回 不等式の応用 第8回 比と比例式(1) 比と割合 第9回 比と比例式(2) 比例式の応用 第10回 百分率と歩合(1) 百分率の応用 第11回 百分率と歩合(2) 歩合の応用 第12回 データ分析(1) データと度数分布表 第13回 データ分析(2) 代表値 第14回 確率(1) 確率論 第15回 確率(2) 確率の数値化 《授業外に行うべき学習(予習・復習、準備学習等)》 ・高校までの基礎、基本的な内容をよく復習しておくこと。 ・日常生活や社会の事象との関わりをよく考え復習する。 ・講義内容について、各人の理解する状況に応じて直接アドバイスするので、積極的に質問して欲しい。 《標準学修時間の目安》 1回の講義あたり、0.5時間の予習と1.5時間の復習が必要となる						
使用教科書						
参考書 なし						
評価方法 受講態度、出席状況、定期試験を基に総合的に評価する。						
その他 講義毎にプリント等を作成・配布し、活用する。						

科目名		教員名	配当年次	期間	形態	単位数
体育実技(フィットネス)	00072	原 崎 千鶴子	1	前期	実技	1
授業目標・到達目標 《授業目標》 健康、体力づくりに必要な安全で効果的な有酸素運動、筋力トレーニング、ストレッチの基本動作を習得し、生涯にわたり楽しく実践できる運動方法を身に付けることを目的とする。 具体的には、有酸素運動で心臓や肺の働きを改善し運動不足を解消させ、筋力トレーニングで骨や筋の働きを改善し障害予防、関節、靭帯に負担をかけない正しいストレッチ方法で柔軟性を回復させる動きを習得することを目的とする。 《到達目標》 <ul style="list-style-type: none"> ・日常生活でも活用できる立位、座位、仰臥位などでの正しい姿勢を身に付けられる。 ・楽しく安全で効果的な有酸素運動(エアロビクダンスなど)を体験できる。 ・目的に合った筋力トレーニングを安全で効果的に実践でき、障害予防に役立てられる。 ・正しい姿勢でのストレッチの方法を学び柔軟性を高められる。 						
講義計画・準備内容 《講義計画》 第1回 フィットネスの効用についての解説とトレーニングマシンの使い方の説明 第2回 障害予防の筋力トレーニングと柔軟性の向上のストレッチの実践 第3回 有酸素運動(低強度)、筋力トレーニング、ストレッチ(1) 第4回 有酸素運動(低強度)、筋力トレーニング、ストレッチ(2) 第5回 有酸素運動(低強度)、筋力トレーニング、ストレッチ(3) 第6回 有酸素運動(低強度)、筋力トレーニング、ストレッチ(4) 第7回 有酸素運動(中等度)、筋力トレーニング、ストレッチ(5) 第8回 有酸素運動(中等度)、筋力トレーニング、ストレッチ(6) 第9回 有酸素運動(中等度)、筋力トレーニング、ストレッチ(7) 第10回 有酸素運動(中等度)、筋力トレーニング、ストレッチ(8) 第11回 有酸素運動(中等度)、筋力トレーニング、ストレッチ(9) 第12回 有酸素運動(中等度)、筋力トレーニング、ストレッチ(10) 第13回 グループ分けと練習 第14回 グループ練習 第15回 グループ別実演発表 《授業外に行うべき学習(予習・復習、準備学習等)》 復習:運動習慣を身に付けるために、授業で体験した運動を各自のライフスタイルにあわせて適時取り入れること。 予習:習得したい自身に合ったエクササイズをあらかじめ決めて提出すること。 《標準学修時間の目安》 1回の講義あたり1~2時間程度の自主学修が望ましい。						
使用教科書						
参考書 フィットネス基礎理論						
評価方法 授業態度及び実技テストによる総合点						
その他 第1回目から軽く運動します。 身だしなみを整えて運動するのに相応しい服装で(基本的にジャージを着用)、シューズを履き受講すること。						

科 目 名		教 員 名	配当年次	期 間	形 態	単 位 数
体 育 実 技 (球 技)	00072	小 越 康 雄	1	前 期	実 技	1
授業目標・到達目標 《授業目標》 3 種目の室内球技 (バドミントン・バスケットボール・バレーボール) を通して、それぞれの技術の向上と体力の維持増進を図り、さらに、他者とのコミュニケーション能力を養うことを目指す。 《到達目標》 1. 各種目特有の動きを身につけることができる。 2. 各種目のルールを説明することができる。 3. 積極的に参加することにより運動量を増やすことができる。 4. コミュニケーション能力を高めることができる。						
講義計画・準備内容 《講義計画》 第 1 回 オリエンテーション (体育実技における留意点の説明) ・からだ慣らし 第 2 回 バドミントン① (ラケットの握り方、シャトルの打ち方、ルール説明) 第 3 回 バドミントン② (ストローク、クリアー、ドライブ、ミニゲーム) 第 4 回 バドミントン③ (ストローク、サービス、ハーフコートシングルスゲーム) 第 5 回 バドミントン④ (シングルスゲーム、ダブルスゲーム) 第 6 回 バスケットボール① (ボール慣れ、パス、ドリブル、シュート、ルール説明) 第 7 回 バスケットボール② (ランニングパス、ドリブルシュート、ハーフコートの 3 対 3) 第 8 回 バスケットボール③ (各種パス・ドリブル・シュート、ハーフコートのゲーム) 第 9 回 バスケットボール④ (オールコートのゲーム) 第 10 回 バスケットボール⑤ (オールコートのゲーム) 第 11 回 バレーボール① (ボール慣れ、パス、レシーブ、サーブ、ルール説明) 第 12 回 バレーボール② (パス、レシーブ、サーブ、アタック) 第 13 回 バレーボール③ (パス、レシーブ、サーブ、アタック) 第 14 回 バレーボール④ (ゲーム) 第 15 回 バレーボール⑤ (ゲーム) 《授業外に行うべき学習 (予習・復習、学習準備等) 》 バドミントン・バスケットボール・バレーボールについて普段から関心を持ち、インターネットや新聞・テレビ等、様々なものに目を通すこと。 《標準学修時間の目安》 1 回の講義あたり 1 ～ 2 時間程度の自主学修が望ましい。						
使用教科書 なし						
参考書 なし						
評価方法 授業内において、バドミントン・バスケットボール・バレーボールの実技試験を行う (得点配分 80 %)、授業参加態度 (20 %) を考慮し、総合的に評価する。						
その他 運動靴、ジャージ着用						

科目名		教員名	配当年次	期間	形態	単位数
外国語コミュニケーション (英語)	00071	高月 晋	1	後期	講義	2
授業目標・到達目標 《授業目標》 グローバル言語である英語を出来るだけ身につけるよう教授する英語の問題を使って、それぞれがどのレベルにあるかを自覚し、そのように力を構築していくよう指導する。 文科省の「力のつく英語」に沿って教授を展開していく予定。 《到達目標》 1. 英語の面白さを体験する。 2. 口語英語を実際に話すことができる。 3. 英語の簡単なドリルを解くことができる。 4. 簡単な英語で友達と会話ができる。 5. 英語でことわざを表現できる。 6. 自分の英語力を体験できる。						
講義計画・準備内容 《講義計画》 第1回 英語の重要性、面白さ 第2回 学生の潜在能力を顕在化されるための自覚を惹起 第3回 英語過去問題のレベルを把握 第4回 話し言葉の面白さ 第5回 口語英語 第6回 3級、準2級レベルを解く復習ドリル 第7回 2級、準1級レベルのドリル 第8回 力試し、口頭または筆記 必ずしもテストではなく、自分の力がどれだけついたか 第9回 英語を使つてのプレイスメント 第10回 口語英語の面白さと基礎英語の実カアップ (楽しい旅行の英語を織り交ぜる) その1 第11回 口語英語の面白さと基礎英語の実カアップ (楽しい旅行の英語を織り交ぜる) その2 第12回 口語英語の面白さと基礎英語の実カアップ (楽しい旅行の英語を織り交ぜる) その3 第13回 口語英語の面白さと基礎英語の実カアップ (楽しい旅行の英語を織り交ぜる) その4 第14回 口語英語の面白さと基礎英語の実カアップ 第15回 力試し (簡単なレベル) 《授業外に行うべき学習 (予習・復習、準備学習等)》 事前に教科書・プリントを日本語に訳し予習、復習をすること。 《標準学修時間の目安》 1回の講義あたり2時間の予習と2時間の復習が必要となる						
使用教科書 なし						
参考書 英検辞典,高月 晋,丸善,ISBN978-4-621-07293-6						
評価方法 授業中のparticipation (参加)、熱意、筆記試験などを総合して評価する。						
その他 なし						

科目名		教員名	配当年次	期間	形態	単位数
外国語コミュニケーション(英語)	00071	シマダ・レナーテ	1	後期	講義	2
授業目標・到達目標 《授業目標》 This course focuses on the four main skill areas: reading, writing, hearing and speaking with a special emphasis on hearing and speaking with a correct intonation. (この講義では、4つの主要スキルである、リーディング、ライティング、ヒアリング、スピーキングに重点をおく。さらに、ヒアリングとスピーキングを正しいイントネーションで行えるようにすることに力点を置く。) Technics of simple daily conversation and stressed, new patterns introduced and practiced in the form of short dialogs, substitution and transformation drills or the students are challenged to come up with their own original ideas. Sometimes the students might be asked to say something on their own before seeing the correct words in the book, or practice the material with a classmate to multiply the amount of time they can spend actually speaking English. (単純な日常会話、短いダイアログ形式の練習、穴埋めや変形練習を行い、学生が自分でアイデアを考えることにも努力してもらおう。学生には、正確な単語を確認する前に、自分自身の言葉で説明させたりします。また、実際に英語を話す時間を多くもてるように、学生同士で練習できる教材を用いる。) 《到達目標》 1. テキストの英文を正しく読むことができ、内容を把握できる。 2. 先生が話す英語の内容を正しく聞き取ることができる。 3. テキストの文章を正しいイントネーションで発音することができる。 4. 学生同士で簡単な日常会話ができる。						
講義計画・準備内容 《講義計画》 第1回 Orientation (オリエンテーション): Written assignment(筆記課題), Introduce yourself(自己紹介) 第2回 Lesson 1: Getting Acquainted (クラスで親密になる), Interview a classmate (クラスメートにインタビュー) 第3回 Getting Acquainted - 2 (クラスで親密になる-2) : Report to the class last week's interview, etc. (先週のインタビューを報告、等), Dictation (ディクテーション) 第4回 Lesson 2: Adjectives (形容詞), Negative Forms (否定形) 第5回 Yes/No Answers (はい・いいえを答える) : Positive Questions (肯定形の質問), Negative Questions (否定形の質問) 第6回 Singular & Plural (単数形,複数形) : Contrary Adjectives (反意語), Quiz : Find natural A/B pairs (自然な組合せ) 第7回 Lesson3:'Here on business' (仕事で) : Focus on meaning (教材の意味を読み取る), 'a'or 'an'? (a, anの違い) 第8回 Lesson3: continue: Dictation (ディクテーション), more contrary adjectives (反意語) 第9回 Hand-out Quiz (ハンドアウト クイズ) : find natural pairs (自然な組合せ), Family relationships (家族関係) 第10回 Bring a photo of your family and Introduce a family member to the class (あなたの家族の写真をもってきて、クラスに紹介してください) 第11回 Lesson4: Geography in English (英語での地理) : country names (国の名前), citizens (国民の名前) 第12回 Lesson4: continue: City names (市の名前), languages spoken (話される言語) 第13回 Workbook L4 ex.1 Z2: Dictation / languages (ディクテーション), talking about the weather (気候について話す) 第14回 Text L4: continue: occupations (職業), Negative answers (否定の回答) 第15回 LL4: Naomi meets Bill (ナオミはビルと会う) : Focus on the meaning (教材の意味を読み取る), Writing it out LL4 (教材の内容を書き取る) 《授業外に行うべき学習 (予習・復習、準備学習等)》 授業で学習した内容について、確認し、考えて、次の授業に出席する事。 《標準学修時間の目安》 次回の講義までに予習・復習を含めて4時間の学修が望ましい。						
使用教科書						
参考書 An English dictionary						
評価方法 筆記試験、宿題提出、授業態度を総合して評価する。						
その他 テキストは、プリントで対応する。						

科目名		教員名	配当年次	期間	形態	単位数
外国語コミュニケーション(仏語)	00071	竹花和晴	1	後期	講義	2
授業目標・到達目標 《授業目標》 フランス語はヨーロッパ諸語の中で最も重要な言語の一つであります。また、全世界的な学術と外交用語でもあります。文化や経済等の国際交流が発展するなかで、フランス語は益々その重要性を増しつつあります。 本授業は食物栄養学科の学生を対象としており、フランス、カナダ、スイス、ベルギー、アフリカ等のフランス語圏諸国で現在話されている生きた会話を学習すると共に、調理レシピ (recipe) や文献の読解への道筋を開くことの契機にしたいと考えております。 《到達目標》 1. フランス語独特の発音を習い、実際に発音できる。 2. フランス語独特の表記を習い、書く事ができる。 3. フランス語で簡単な会話ができる。 4. フランス料理のレシピを読むことができる。						
講義計画・準備内容 《講義計画》 第1回 フランス語の歴史、現在のフランス語、日本におけるフランス語等について 第2回 フランス語独特の発音や表記等について 第3回 フランス語独特の発音や表記、数字の発音 第4回 教科書第1課の規則動詞と助動詞を伴う会話 第5回 教科書第2課の「旅先の宿泊施設での会話」(上) 第6回 教科書第2課の「旅先の宿泊施設での会話」(下) 第7回 教科書第3課の「フランスの生活」と不規則動詞等について 第8回 教科書第3課の「フランスの生活」と数と伴う会話 第9回 教科書第4課の「観光と乗り物」(上) に伴う会話 第10回 教科書第4課の「観光と乗り物」(下) と否定文等について 第11回 「フランス料理のレシピ」1 (原文) の読解 第12回 「フランス料理のレシピ」2 (原文) の読解 第13回 「フランス料理のレシピ」3 (原文) の読解 第14回 全授業の「まとめ」1 第15回 全授業の「まとめ」2 《授業外に行うべき学習 (予習・復習、準備学習等)》 授業で学習した内容について、繰り返し声をだして復習する。次の授業に出席する前に次の単元の分からない単語を調べてくること。 《標準学修時間の目安》 1回の講義あたり2時間の予習と2時間の復習が必要となる。						
使用教科書 「LE FRANCAIS POUR LE VOYAGE」(やさしく学ぶ旅のフランス語), 中村敦子, 第三書房, ISBN4-8086-2147-9 C1085						
参考書 「仏和辞書」中または小辞典(出版社は随意)						
評価方法 講義への参加姿勢と学期末の試験を総合して評価する。						
その他 外国語習得の要諦は、第一にたゆまざる学習の継続であるとおもわれる。そして、学習したことを、理解し、応用できることであると考えられる。						

科 目 名	教 員 名	配当年次	期 間	形 態	単 位 数
外国語コミュニケーション (中国語)	東 出 隆 司	1	後期	講義	2
授業目標・到達目標 《授業目標》 わが国と中国との文化面での交流は長い歴史の上にあることはご存知の通りです。近年、隣国中国は近代化をの急速を速め、その経済的な結びつきますます強くなってきております。中国語は、両国が漢字を使用するという点において、また、文化の面での長い交流があるという点でも、私たちににとっては、比較的馴染みやすい言語と言えます。また、食文化の面においても多くの影響を受けています。そうした、特性を生かしながらも、日本語とは異なった、発音・文法や中国で新しく使われている簡略化された漢字、などを学び、「聞く、話す、読む、書く、訳す」の外国語学習の基本的習得をめざします。中国語との一番大きな違いは発音にあります。同じ漢字でも読まれている音が違います。ですので、先ず発音する為の「ピンイン」と呼ばれる記号を読みこなせるようになることが必要です。次に、中国で現在使用している簡略化された漢字「簡体字」の成り立ちを学びます。これは、日本の漢字が省略されているのが殆どですので左程難しくありません。中国語を使ってご自分の自己紹介ができるようになる程度の語彙と表現を身につけることを目標とし学びます。 《到達目標》 中国語を使って自分の自己紹介ができること。					
講義計画・準備内容 《講義計画》 全体で15講の講義ですので大まかには以下のように授業を進めます。 第1回と2回 先ず中国語全体の特徴と構成を把握していただきます。中国語を発音する為のピンインを学び、中国で使われている簡体字の仕組みなどを学びます。ここでは、中国語全体の理解に努めて下さい。映像なども見て学習します。 第3回 発音のチェックと声調(四声)の確認をします。日本語にはない声の上がり下がりによる声調のつけ方と、幾つかの特徴ある発音の音の出し方を学びます。発音はこの後も適宜チェックを繰り返しながら進められます。中国語では“音”をどう捕まえるかが大事な要素となります。表現法や漢字を使っているなどの共通点も多いので学習自体は難しくないとはいえませんが、“音”が離れています。この点を少し時間をかけて学びます。 第4回 自分の名前の中国語での表記と発音を勉強します。同時に中国語での基本的な挨拶の言い方を学びます。こっから自己紹介は始まります。 第5回 数字を学習します。数字は月日や時間、年齢、買い物などの様々なシーンで必要となりますので、しっかり学習しましょう。 第6回 簡単な疑問文を学びます。相手に何かを尋ねる、逆に尋ねられて時の答え方などを学びます。主に前回に習った数字を使ってのやりとりとなります。 第7回 家族の紹介の仕方を学びます。親族の呼称や、人数、年齢の言い方などを同時に学びます。これで、自分や家族の紹介が出来るようになります。 第8回 この回は、語彙を少し増やす勉強をします。自分の趣味に関するもの、職業、好み、などの表現ができるようそうした語彙を使いながら学びます。自分が何が好きかを表現できるようになります。 第9回 時間の表現を学びます。自分の一日の行動について言えるようにし、また、年月日を定める表現、疑問詞を使つての疑問文の作り方を学び、いつ何をやるかと言えるようにします。 第10回 可能の表現を学び、自分は何かができるか、何が得意か、と言えるようにします。またその事を相手に尋ねられるようにもします。 第11回 二者択一疑問文や、方法、理由を尋ねる疑問文を学び、それらを使って相手に尋ねる、そうした疑問文に答える練習をします。 第12回 自分の意思を表す表現法と、禁止の表現を学びます。このことで、自分がして欲しいこと、自分がしたいこと、して欲しくないこと、などの表現ができるようになります。 第13回 比較の表現、動作の持続表現などを学びます。また、誰々に～にさせるという使役の表現を学びます。 第14回 様々な補語を取り入れた表現を使って、その程度や、可能性、結果などが表現できるようにします。 第15回 これまで習った語彙や表現方法を使って、自分のことを中国語で紹介できるように文を作り発表して貰います。これは、自分の中国語での発音が相手に正しく伝わっているかどうかの確認となります。どんなに素晴らしい文でも伝わらなければ意味がありません。さらに、その自己紹介に対しての中国語での簡単な質問に、中国語で答えることが出来るよう準備します。これができることで、この間の中国語の学習が総体的に理解できたと判断できることとなります。 《授業外に行うべき学習(予習・復習、準備学習等)》 始めて触れる外国語としての「中国語」は、「音」が大切になります。最初は復習することが重点となります。「音」をどう捕まえるかは、繰り返しその「音」を発音してみても相手に聴いてもらいチェックします。ピンインが読み取れるようになれば、準備学習が可能となります。教科書以外でも自分で表現したい単語をどう読むか、どう発音するかなど図書館の関係図書や辞書、或いはネットなどで探すこともできます。予習よりも復習のウェイトが大きい時間が続き、それらが理解できればあとは自分で予習し先に進むことが出来るようになります。外国語の習得・学習はそうした自分から話してみる、聴いてみる、といった積極性が求められそれが上達に繋がります。臆せずに積極的に話し、聴いてみましょう。 《標準学修時間の目安》 毎週1回の講義あたりその週のうちに2時間程度の予習と、2時間程度の復習を目指す。とりわけ最初の頃の中国語の“音”を取るには積極的に、NHKテレビまたはNHKラジオの中国語講座を視聴すること。放送時間に合わない場合、録画・録音または再放送を利用するなどし、出来るだけ“音”に多く触れるようにする。また、折に触れてテキスト付属のCDを聴くことに努め、これにより、週の間それぞれ予習・複数合わせて4時間の自主学習時間を持ち、授業時間と合わせて90時間の学修時間を目指すこととする。					
使用教科書 『中国語のToBIRa(トビラ)』 趙秀敏、富田昇 共著、朝日出版社、SBN978-4-255-45220-3					
参考書 「日中辞典」「中日辞典」小学館、NHKテレビテキスト「テレビで中国語」・NHKラジオテキスト「まいにち中国語」					
評価方法 授業終了後に口試(口頭試験)を行います。中国語での自己紹介が求められます。このテストは、筆記試験では試すことの出来ない、「音」や文の構成、表現力などが試されます。事前に準備が可能ですので積極的に習った中国語を使って表現して見ましょう。 筆記試験は、中国簡体字・ピンイン・中国語の数字・簡単な訳文などの試験があります。口試と、筆試の二つを合わせて評価いたします。口試では発音の正しさが、筆試では語彙数と簡体字が試されます。					
その他 テキスト付帯のCDは折に触れて何度も聞くようにして下さい。音をつかまえる助けとなります。また、函館大学の図書館の蔵書は、中国関係の図書が大変充実していますので、時間があつたら是非利用して下さい。コンピュータ上にも中国語に関するサイトは沢山あります。例えば中国のヤフー、中国雅虎(ヤフー)など中国のサイトなども簡体字・繁体字に慣れる意味でも時間があつたら覗いて見て下さい。					

科目名		教員名	配当年次	期間	形態	単位数
ボランティア実習Ⅰ	00240	沼田卓也	1	その他	実験・実習	1
授業目標・到達目標 《授業目標》 現代社会においては、複雑な土地柄や食文化を乗り越えて、協力共同の精神を培うことがますます重要となっている。ボランティア活動を通して、地域の構成員がお互いにコミュニケーションを図りながら協力し、助け合うことの大切さを学ぶ。 《到達目標》 社会福祉、食育及び各種イベントにおける食事衛生管理など多種多様の支援活動を実際に体験することにより、将来、社会の担い手となることの自覚を深めるとともに、コミュニケーションをとりながら、協力共同、地域連携などを実際に行い、その活動内容が報告できること。						
講義計画・準備内容 《講義計画》 <ul style="list-style-type: none"> ・ボランティア活動先の指示に従うこと。 ・ボランティア活動の内容、主催する団体の代表者、所在地などの情報を事前に集め、単位認定の対象となる活動内容であるか、事前に担当教員と相談する。 ・単位認定の対象となるボランティア活動は、本学に依頼のあった社会的地域活動（保健・医療・福祉・教育等）のほか、学生が自発的に参加する社会的地域活動（保健・医療・福祉・教育等）などとする。 ・学生が自発的に参加する活動に関しては、担当教員が活動内容を確認する。 ・活動内容などによっては、ボランティア保険などへの加入が必要となることもある。 《授業外に行うべき学習（予習・復習、準備学習等）》 実習先のパンフレットやホームページで予め必要な情報を収集して、予備知識を増やしておくこと。 《標準学修時間の目安》 1回の報告書作成に1～2時間程度の学修が必要となる。						
使用教科書 なし						
参考書 なし						
評価方法 <ul style="list-style-type: none"> ・担当教員から承認されたボランティア活動の累積の時間数が30時間以上となった場合に単位を認定する。 ・評価は、活動終了後に学生が提出する活動内容などを記した報告書により行う。 						
その他 <ul style="list-style-type: none"> ・活動時間などを記したボランティア報告書の記載をしっかりとすること（主催者などの確認印のないものは、単位の対象とならない）。 						

科 目 名		教 員 名	配当年次	期間	形態	単位数
コンソーシアム基礎教養I～IX	00081-00089	キャンパス・コンソーシアム函館	年次	その他	その他	1又は2
授業目標・到達目標 毎年度、前期・後期に発行される単位互換対象科目について、キャンパス・コンソーシアム函館のホームページで確認することができる。 キャンパス・コンソーシアム函館を構成している、高等教育機関は公立はこだて未来大学、函館大谷短期大学、函館工業高等専門学校、函館大学、函館短期大学、北海道教育大学函館校、北海道大学水産学部、ロシア極東連邦総合大学函館校の8高等教育機関である。 履修には単位互換システムによる履修手続きが必要となる。 どの科目を選択するかは、自分で決めること。 開講科目の内容レベルは、提供している大学・短大・高専と同じである（受講生のレベルに合わせてくれない。）。 コンソーシアム基礎教養I～V（1年次生対象） コンソーシアム基礎教養VI～IX（2年次生対象） コンソーシアム基礎教養V、Ⅷ、IXは1単位科目が対象となり、その他は2単位科目である。 単位互換科目を開講している高等教育機関まで受講のための、往復の時間を考慮すること（注意：函館短期大学で専門科目を受講している週日に、単位互換科目を受講するのは、難しい。）。						
講義計画・準備内容 単位互換科目の対象となる科目について、キャンパス・コンソーシアム函館のホームページで確認することができる。 《講義計画》 第1回～第15回 キャンパス・コンソーシアム函館のホームページ http://www.cc-hakodate.jp/ で確認してください。 《授業外に行うべき学習（予習・復習、準備学習等）》 開講科目のシラバスに沿って、担当教員の指示にしたがい、準備学習を行うこと。 《標準学修時間の目安》 開講科目のシラバスに沿って、担当教員の指示にしたがい、開講期間内に合計60時間の自主学習を行う必要がある。						
使用教科書 なし						
参考書 なし						
評価方法 単位互換科目であるので、提供大学の担当者による評価、開講時のシラバスで確認すること。						
その他 キャンパス・コンソーシアム函館の単位互換システムによる科目である。毎年度の前期・後期に案内パンフレットが発行される。募集パンフレットは玄関ロビーのラックに、募集ポスターはその都度（集中講義で実施するものもある）掲示されるので、注意して見落としのないようにすること。 受講には、対象科目を開講している高等教育機関まで出向く必要があるため、所属機関の授業時間割との関係を十分考慮すること。 夏・冬季休み中の開講は、実習等の期間を考慮すること。						

科 目 名		教 員 名	配当年次	期間	形態	単位数
教養ゼミナール(SL) II	00210	食物栄養学科教員	2	通年	演習	1
授業目標・到達目標 《授業目標》 短期大学で学ぶことで、卒業後に社会という組織の中で(社会参加)、自分の役割を果たし(役割)、自分なりの価値観を見出せる(価値創造)ような積極的姿勢を身に付ける。 本学のアドミッションポリシーを学園の建学の精神である学園訓3か条(「報恩感謝」・「常識涵養」・「実践躬行」)に基づいて、日常的に行動で表現できる教養を身に付けることが目的である。 《到達目標》 1. 学生として必要な知識と能力を吸収して、自律した健康的な実生活を送ることができる。 2. 集団社会で必要な常識と道徳的良心を身につけ、社会通念に反しない行動ができる。 3. 多くの友人と一緒に学ぶ中で、他人を思いやる気持ちを身につけ、それを態度で示すことができる。 4. 学んだ専門的知識を活かして、将来、自分が社会において果たすべき役割を考えて発表することができる。 5. 「生涯学べ」の習慣を身につけ、自ら学び、自ら伸びることで働くことの価値観を他人に伝えることができる。						
講義計画・準備内容 《講義計画》 1～15回の授業は、担当の教員または自分達で毎回テーマを決めて、自分達で討論を重ねる。学年全体に必要な事項は、合同SLとして実施する。 事例： 1. 自然現象の観察 2. 人間行動の観察 3. 履歴書の具体的な書き方 4. レポートのまとめ方 5. 正しい敬語の使い方 6. 身だしなみが必要なわけ 7. 時事ニュースから社会参加を考える 8. インターネット・ケータイの功罪 9. 自分達学生の職業観 10. 若者の食、車内での化粧 11. 大人と子どもの行動 など 《授業外に行うべき学習(予習・復習、準備学習等)》 日頃から学生としての身だしなみを考える。最新の報道にも目を通して、内容を理解し、自分の考えを整理してみる。自分の考えを他人に理解してもらえるような説明の仕方を自分で工夫する(面接に役立つため)。 《標準学修時間の目安》 1回の講義あたり、予習・復習を含めて2時間の学修が必要となる。						
使用教科書 なし						
参考書 なし						
評価方法 毎回の学習姿勢(20%) およびプレゼンテーション(80%)に基づいて総合評価する。						
その他 教科書は使用しないが、毎回必要なプリントに基づいて演習を実施する。 学年全体に必要な事項は、合同SLとして実施する。						

科目名		教員名	配当年次	期間	形態	単位数
社会人基礎論Ⅱ	00220	加納洋人・村木永親 黒澤香織・林原和哉	2	前期	講義	1
授業目標・到達目標 《授業目標》 学生生活と異なる社会人・職業人としての自覚を育て、社会に出て行くための準備を行う。実社会で生きてゆくためのマナーや社会常識を身につけるとともに、仕事に取り組む心構えや仕事を進めていく上で必要となる実践的能力を養う。さらに、組織の中で、いかに自己実現を図るか、良好な人間関係を築くためには、どう他者とコミュニケーションをとってゆけばよいかなど考える。 《到達目標》 1. 社会人としての基礎・基本である「読んで書く能力」を身につける。 2. 社会人としての基本的マナーを身につけ、良好な人間関係を築くことができるコミュニケーション能力を養う。 3. 新聞、テレビのニュース、報道番組に関心を持ち、社会人として自分で考える能力を身につける。就職試験の時事問題を解くことができるようにする。 4. 就職活動で必要となる企業研究、履歴書・エントリーシートの書き方、面接試験、グループディスカッションなどの力を身につける。自身のキャリアを将来、どう築いてゆくか選択できるようにする。						
講義計画・準備内容 《講義計画》 第1回 内定への道程（就職活動の流れを把握する） 第2回 企業研究（求人票の見方とネット情報の利用） 第3回 書類選考の突破（エントリーシートと履歴書の作成） 第4回 応募書類の送付と到着のフォロー（応募鑑の作成・発送方法選択・電話でのフォロー） 第5回 面接試験への備え（自己分析と時事問題の情報収集） 第6回 個人面接試験対策（基本と自己PR） 第7回 集団面接試験、グループディスカッション対策（基本とコミュニケーション力） 第8回 新聞を読んで考える。小論文の書き方、論の進め方。 第9回 現代社会の特徴は何か。トレンドをどう捉えるか。ファッション、音楽、映画など現代社会の特徴を、マスメディアからとらえてみよう。ヒット商品を考えてみよう。 第10回 政治、経済問題など現代日本が抱える諸問題を新聞、テレビなどを通じて考えてみよう。諸問題にどう対応するか、自分で考える能力を身につける。 第11回 時事問題でディスカッションをしてみよう。他者を説得するためにはどうすればよいか。自分の意見をどうまとめ、どう発表するか。 第12回 職場でのコミュニケーション（コミュニケーションのための留意点・円滑なコミュニケーションのために・工作中的態度行動・指示、受け方報告、連絡、相談（ホウレンソウのあり方）） 第13回 総合ビジネスマナー①（敬語の必要性・電話応答・来客対応・名刺交換） 第14回 総合ビジネスマナー②（身だしなみ・入社から退社までの基本ルール・工作中的態度行動・挨拶とおじぎ・言葉使い） 第15回 社会人と会社と仕事（職業観の確立・仕事の原点はお客様・接客及びクレーム対応の仕方・PDCAサイクルで仕事を管理） 《授業外に行うべき学修（予習・復習、準備学習等）》 普段から新聞等で情報を得て整理する。配布プリントを読んで復習をする。 《標準学修時間の目安》 1回の講義あたり0.5時間の予習と1.5時間の復習を行うこと。						
使用教科書 unicareerマガジン 短大生の就活編, 株式会社ディスコ						
参考書 なし						
評価方法 授業ごとに実施する小テスト(40%)、授業中の発言、対応能力の審査(30%)、課題・レポート審査(30%)を数値化して、総合評価する。						
その他 外部講師による特別講義を行う場合がある。						

科目名		教員名	配当年次	期間	形態	単位数
日本国憲法	00070	永盛恒男	2	後期	講義	2
授業目標・到達目標 《授業目標》 憲法は国家の基本を定める重要な法規範であります。過去には、イラクに自衛隊を派遣するなど、憲法論議は今日の問題でもあります。ところで憲法は、大きく基本的人権の部分と統治機構の部分とに分けることができます。 本講義では時間の関係上、自由や平等という基本的人権の部分を中心にしたと思います。皆さんは中学や高校である程度憲法を学んでいると思いますが、更に詳しくわかり易く講義したいと思います。必要に応じてプリントを配布し、できる限り授業に興味をもてる様工夫したいと思っております。学生諸君の積極的な受講を望みます。 《到達目標》 1. 憲法の内容を説明できる。 2. 生存権的基本権を説明できる。 3. 法の下での平等について大要を説明できる。 4. 教育を受ける権利を説明できる。						
講義計画・準備内容 《講義計画》 第1回 憲法とは何か（概念、歴史・基本原理） 第2回 人権の規定に比べて、義務の規定が少ないのはなぜか（憲法上の義務・授権規範と制限規範） 第3回 憲法遵守義務（法の支配） 第4回 国民主権（憲法制定権力） 第5回 外国人の参政権（国民とは何か・最高裁1995年2月28日判決） 第6回 人権規定の私人間効力（三菱樹脂事件） 第7回 人権規定のカタログ 第8回 法の下での平等（女性の再婚禁止期間規定・非嫡出子の相続分差別規定） 第9回 信教の自由（首相の靖国神社参拝・政教分離原則） 第10回 生存権的基本権 第11回 教育を受ける権利（義務教育・教科書検定） 第12回 国会（国会の地位、組織、権限及び両議院の権能、運営） 第13回 内閣（内閣の地位、組織、権限） 第14回 裁判所（司法権の意義と独立・裁判官の地位・裁判所の組織と権限、種類と原則・違憲審査権） 第15回 地方自治（地方自治の本旨・地方公共団体の構造、権限と財政・住民の権利） 《授業外に行うべき学習（予習・復習、準備学習等）》 <予習> 出来れば、次回の授業内容の指示に従って教科書を読んでおく事が望ましい。 <復習> 受けた授業でとったノートの内容を参照し、関連事項について図書館などで出来れば調べておく事が望ましい。 《標準学修時間の目安》 1回の講義あたり予習・復習を含めて4時間の学修が必要である。						
使用教科書 憲法への招待、渋谷 英樹、岩波書店、ISBN4-00-430758-9 ポケット六法（平成27年度版）、有斐閣（井上・山下）、ISBN978-4-641-00915-8						
参考書 なし						
評価方法 筆記試験、学習姿勢を主たる要素とする。 レポートは課さない。						
その他 なし						

科目名		教員名	配当年次	期間	形態	単位数
国際交流	00074	食物栄養学科教員	2	後期	演習	1
授業目標・到達目標 《授業目標》 本学科で学んだ講義や実習を通して修得した知識を基に、海外における食文化が土地柄や歴史とどのように関わっているかという実情を見聞・体験することで、自分の進むべき分野に対する一層の認識を深める。 また、そのときの感動および幅広い視野から判断できる新たな自分の基準を持つことも目的の一つである。						
《到達目標》 1. 見聞・体験を通して得たことをレポートに表現できる。 2. 集団での行動を通して、協調性を身につけ、今後の社会生活に役立てる。 3. 外国での体験に基づく価値観の違いを理解し、豊かな人間性を身につけ、それを行動で示すことができる。 4. 自分で作り上げる研修を通して、能動的な学習能力を身につけ、普段の学習に役立てる。						
講義計画・準備内容 《講義計画》 海外研修計画に沿って、実施される。 第1回 事前研修（オリエンテーション） 第2～7回 海外研修（現地研修） 研修日程に沿って、参加者各自の目的を明確しにて、それを実行できるよう計画を立てる。 第8回 事後研修（研修報告書の作成）						
研修内容の例： 1. 移動に伴う往復の機中泊で、時差を考え、地球の大きさを実感する。 2. 日本の常識が世界の常識としてそのまま通用するかどうかを知る。 3. 書物で知っている建造物、芸術や美術の本物に接してみる。 4. 自分達の知っている料理を本場で味わってみる。 5. 食文化の違いを肌で感じる。 6. 普段の習慣にどのような違いがあるかを知る。 7. 集団行動のなかで、自分の役割を果たす。						
《授業外に行うべき学習（予習・復習、準備学習等）》 出発前に個人或いはグループ毎のテーマを決め、それに沿った準備学習を行う。						
《標準学修時間の目安》 事前の各種手続き、渡航準備および帰国後の報告書作成等を合わせて、合計30時間の自主学習が必要となる。						
使用教科書 なし						
参考書 なし						
評価方法 事前研修態度(10%)、現地研修態度(40%) および研修報告書(50%)などを総合的に評価する。						
その他 <ul style="list-style-type: none"> ・現地研修に際しては、特に体調管理に努める。 ・予備知識は、各自旅行パンフレットなどで事前に調べる。 ・選択科目である。別途費用がかかる。 ・1年次に履修することも可能である。 ・履修者数によっては、旅行会社が提供するパッケージツアーに研修内容を組み入れる場合がある。 						

科目名		教員名	配当年次	期間	形態	単位数
保健体育	00073	鈴木英悟	2	後期	講義	1
授業目標・到達目標 《授業目標》 運動生理学および解剖生理学的視点から、現代社会に生きる我々人間が健康に生活していくために必要となる事柄を学ぶことを目的とする。また、自身の健康維持・増進は勿論のこと栄養士として、ライフステージ毎、必要とされる運動量や食習慣について整理し指導できるよう学んでいく。 さらに現代社会が抱える健康阻害要因に着目し、回避するための具体策をグループ毎まとめプレゼンテーションを行う。 《到達目標》 ・健康について理解し、説明することができる。 ・ライフステージごとに必要とされる運動量等について説明することができる。						
講義計画・準備内容 《講義計画》 第1回 保健体育の意義 第2回 現代社会と健康 第3回 健康の考え方、健康の定義 第4回 生活習慣病について 喫煙、飲酒、嗜好品 第5回 生活行動（運動習慣）と健康 第6回 生活行動（食習慣）と健康、グループワーク② 第7回 生活行動（睡眠習慣）と健康グループワーク①プレゼンテーション① 第8回 人体の構造とその役割 第9回 骨と健康 第10回 筋肉と健康 第11回 神経について（自律神経） 第12回 運動不足病について 第13回 運動処方 第14回 障害の処置 第15回 応急手当 《授業外に行うべき学習（予習・復習、準備学習等）》 復習：1年次で学んだ運動生理学、解剖生理学等の内容をテキストをもとに復習しておくこと。 予習：次回行う授業内容を配布資料等を活用し、その中からキーワードを抽出しまとめておくこと。 《標準学修時間の目安》 次回の講義までに予習・復習を含めて2時間の学修が必要である。						
使用教科書 なし						
参考書 なし						
評価方法 最終講義におけるプレゼンテーション（50%）と授業参加姿勢や授業内での発言（50%）を考慮し、総合的に評価する。						
その他 プリントを配布する。						

科目名		教員名	配当年次	期間	形態	単位数
コンピュータリテラシーI	00330	渡辺真保	2	前期	演習	1
授業目標・到達目標 《授業目標》 コンピュータリテラシーIでは、1年次に学習したマイクロソフト社のワード及びエクセルの知識を整理し定着させ、それを実際の業務効率を高めるためにどのように利用できるかを学ぶことを目標としています。 《到達目標》 1. ワード・エクセルの基本から中級レベルの操作をテキスト等を参照せずに行うことができる 2. 目的に合わせて、文書・資料を、体裁よく作成することができる						
講義計画・準備内容 《講義計画》 第1回 [ワード] 文字・文章の入力と変換の復習 第2回 文書管理、文字の修飾 第3回 社内文書、社外文書、箇条書き、特殊な書式、インデント、タブ、段落罫線と網掛け 第4回 書式のコピー・貼り付け、文章校正、ページ罫線、ページ設定 第5回 表の作成と編集、差し込み印刷 第6回 段組み、ワードアートの挿入 第7回 図形・クリップアート・図表の挿入、グラフの挿入 第8回 [エクセル] データの入力・訂正・削除、オートフィル、データの複写と移動の復習 第9回 数式の入力、相対参照と絶対参照、関数 (SUM, AVERAGE, MAX, MIN, COUNT) 第10回 関数 (ROUND, ROUNDUP, INT, MOD, IF, NOW, DATE) 第11回 書式設定、罫線、行・列の編集、表のスタイル 第12回 条件付き書式、入力規則、置換、印刷設定、グラフの作成と編集 (棒グラフ) 第13回 グラフの作成と編集 (円グラフ、レーダーチャート、折れ線・複合グラフ) 第14回 データベース機能 (並べ替え、抽出)、シートの管理、3-D集計、ピボットテーブル 第15回 総復習 《授業外で行うべき学習 (予習・復習、準備学習等)》 ・授業で学習した操作を復習し、質問がある場合は、次回の授業までにまとめておくこと。 ・毎回課題を出すので、完成させておくこと。 ・次回の授業でカバーする箇所に目を通しておくこと。 《標準学習時間の目安》 1回の講義にあたり予習・復習を含めて2時間の学習が望ましい。						
使用教科書 完全マスター Word2010, NOA出版 完全マスター Excel2010, NOA出版						
参考書 ・知りたい操作がすぐわかる Word2010全機能Bible, 西上原 裕明, 技術評論社, ISBN-13: 978-4774144283 ・知りたい操作がすぐわかる Excel2010全機能Bible, 高橋 慈子 八木 重和, 技術評論社, ISBN-13: 978-4774145532						
評価方法 定期試験、課題提出、授業態度を考慮し総合的に評価します。						
その他 学習内容を定着させるために、ほぼ毎回課題を出します。 わからないところがある場合は、授業の時だけでなく、電子メールでの質問も受け付けますので、積極的に質問し解決するようにしてください。						

科 目 名		教 員 名	配当年次	期 間	形 態	単 位 数
コンピュータリテラシーI	00330	山 崎 幸 路	2	前期	演習	1
授業目標・到達目標 《授業目標》 マイクロソフト社のワードは就職後の一般事務のみならず様々な職種において最も使用頻度の高いソフトの一つです。単に文章が打てるというだけでなく、実務文書作成において正確に表現し、常識的なレイアウト構成ができる能力が実務では求められています。またエクセルは、栄養価計算等の計算分析の実務利用のみならず会社経理の業務の基礎能力として就職条件になるケースも多い重要なスキルです。 1年次の学習を踏まえ、さらに実務的な内容に踏み込み、図形や画像レイアウトした文書作成、複雑な集計方法の資料作成などステップアップした応用講座としての位置づけとなります。1年次学習の重要事項の復習をしながら進めます。最終的には実務的成果物の完成を目標として、職場等で役立つ実務レベルの技術を学ぶことが本講義の目標です。 《到達目標》 1. ワード編集機能を使って文書作成、地図作成、図形描画と編集ができる 2. 外部データを利用してワードにグラフ挿入し、データ編集ができる 3. ワードの高度なレイアウトと効果的な配色となる文書編集ができる 4. エクセルのセル絶対参照と論理関数の条件複合を理解し、関数作成ができる 5. エクセルで適切なグラフを選択し、訴求効果のあるグラフ作成ができる 6. エクセルでデータ抽出と集計の方法を学習し、データベースの基本を理解して抽出と集計がで実際にできる。 7. エクセルでデータベース関数とピボットテーブルを学習し、データ管理ができる。						
講義計画・準備内容 《講義計画》 第1回 Word 入力変換方法とWordの基礎事項確認 社外文書作成 第2回 Word 文書表現の統一・ページ設定 第3回 Word さまざまな表作成の編集と工夫 第4回 Word 段組み、アウトラインを利用した文書作成 第5回 Word ワードアート、オートシェイプを利用したグラフィックの挿入 第6回 Word 図、グラフを利用したグラフィックの挿入 第7回 Excel Excelの基本事項確認 数式入力、絶対参照 数学関数応用 第8回 Excel 論理関数応用 複合関数 第9回 Excel 表スタイル作成とオートフォーマット 第10回 Excel 入力規則・コメント・ハイパーリンク応用 第11回 Excel グラフ表現応用 第12回 Excel データベース分析応用 第13回 Excel シート管理、3D集計 第14回 Excel 検索行列関数等、ピボットテーブル 第15回 Excel 実務的複合資料作成練習 《授業外に行うべき学習（予習・復習、準備学習等）》 《予習》テキストを読み、どのようなスキルの学習がなされるのかおおまかに把握しておきます。 《復習》テキストを読み、実際にパソコンの画面を見ながら操作して、授業内容と同じ操作ができるかを確認します。また授業で指定された課題を授業ノートやテキストを参考にして操作演習して課題を完成させます。 《標準学修時間の目安》 1回の講義あたり予習・復習を含めて2時間の学修が必要である。						
使用教科書 完全マスター Word2010, NOA出版 完全マスター Excel2010, NOA出版 実践ドリルで学ぶ Office活用術2010対応, NOA出版						
参考書 ・知りたい操作がすぐわかる Word2010全機能Bible, 西上原 裕明, 技術評論社, ISBN-13: 978-4774144283 ・知りたい操作がすぐわかる Excel2010全機能Bible, 高橋 慈子 八木 重和, 技術評論社, ISBN-13: 978-4774145532						
評価方法 実務的成果物の課題作成能力を評価する。授業態度・課題取り組み姿勢も評価対象として重視する。						
その他 まだパソコンに慣れていない学生から十分に操作知識とスキルのある学生まで、現在のスキルの幅を考えて、ゆっくりな速度で高度な内容を含めて学習していく。適宜ノートを取る。連続性のある授業であるため、極力遅刻と欠席をしないように。また遅刻、欠席をした場合はシラバスを見たり、友人に聞いたりして進んだページを自学学習しておくこと。						

科 目 名	教 員 名	配当年次	期 間	形 態	単位数	
コンピュータリテラシーII	00430	渡 辺 真 保	2	後期	演習	1
授業目標・到達目標 《授業目標》 コンピュータリテラシー IIでは、情報化社会の中で、パソコンを利用して、伝えたい情報を効果的にわかりやすく発信する力を身に付けることを目標としています。マイクロソフト社のプレゼンテーションソフトPowerPointと、ホームページ作成ソフトホームページビルダーを活用し、相手が理解しやすい表現やアプローチを、情報を受け取る側の立場に立って考える力を養います。 《到達目標》 1. PowerPoint及びホームページビルダーの操作方法を習得する 2. 目的・聴衆に合わせたプレゼンテーションを企画・構成し発表することができる 3. 基本的なホームページを作成し、情報をわかりやすく発信できる 4. 他の学生のプレゼンテーション・ホームページを評価することにより、自身の情報発信方法の向上に役立てることができる						
講義計画・準備内容 《講義計画》 第1回 [プレゼンテーション] プレゼンテーションの目的と種類。PowerPoint—基本操作。 第2回 プレゼンテーションの流れと準備。PowerPoint—スライドのレイアウトとオブジェクトの編集 第3回 プレゼンテーションのストーリー作り。PowerPoint—スライドの追加・移動と配布資料作成・印刷 第4回 プレゼンテーションのための情報収集。PowerPoint—配色の変更、グラフの挿入 第5回 プレゼンテーションの運営、表現方法。PowerPoint—図形・写真の挿入 第6回 各自作成したプレゼンテーションの実施と相互評価（1） 第7回 各自作成したプレゼンテーションの実施と相互評価（2） 第8回 [ホームページ] ホームページビルダーの基本操作。サイトの作成、文字入力、書式設定、飾り文字の挿入 第9回 素材集の利用、オリジナル画像の挿入、壁紙の設定 第10回 レイアウトの変更、リンクの設定、ロールオーバー効果 第11回 表の作成、リンクの設定 第12回 転送設定。各自のホームページの構成、トップページのレイアウトをデザイン 第13回 各自のホームページの作成、編集 第14回 各自作成のホームページのアップロードと相互評価 第15回 PowerPointとホームページビルダーの操作方法の復習 《授業外で行うべき学習（予習・復習、準備学習等）》 ・授業で学習した操作を復習し、質問がある場合は、次回の授業までにまとめておくこと。 ・毎回課題を出すので、完成させておくこと。 ・次回の授業でカバーする箇所に目を通しておくこと。 《標準学習時間の目安》 1回の講義にあたり予習・復習を含めて2時間の学習が望ましい。						
使用教科書 よくわかるホームページビルダー 15 30時間でマスター プレゼンテーション+PowerPoint2010, 実教出版, ISBN978-4-407-32097-8						
参考書 プレゼンテーションの極意, 川崎和男, ソフトバンククリエイティブ, ISBN-13: 978-4797328202 ホームページ・ユーザビリティ～顧客をつかむ勝ち組サイト32の決定法則, ヤコブ・ニールセン, 風工社 ISBN-13: 978-4844356400						
評価方法 授業内でのプレゼンテーション、ホームページ作成、定期試験、課題提出、学習態度により総合的に評価します。						
その他 PowerPoint及びホームページビルダーの操作方法を学ぶと共に、独自のプレゼンテーション作成・発表とホームページ作成を行います。各自、テーマや目的を決めて、必要な情報収集や全体構成を考えて完成させます。						

科 目 名		教 員 名	配当年次	期間	形態	単位数
ボランティア実習Ⅱ	00340	沼田卓也	2	その他	実験・実習	1
授業目標・到達目標 《授業目標》 現代社会においては、複雑な土地柄や食文化を乗り越えて、協力共同の精神を培うことがますます重要となっている。ボランティア活動を通して、地域の構成員がお互いにコミュニケーションを図りながら協力し、助け合うことの大切さを学ぶ。 《到達目標》 社会福祉、食育及び各種イベントにおける食事衛生管理など多種多様の支援活動を実際に体験することにより、将来、社会の担い手となることの自覚を深めるとともに、コミュニケーションをとりながら、協力共同、地域連携などを実際に行い、その活動内容が報告できること。						
講義計画・準備内容 《講義内容》 <ul style="list-style-type: none"> ・ボランティア活動先の指示に従うこと。 ・ボランティア活動の内容、主催する団体の代表者、所在地などの情報を事前に集め、単位認定の対象となる活動内容であるか、事前に担当教員と相談する。 ・単位認定の対象となるボランティア活動は、本学に依頼のあった社会的地域活動（保健・医療・福祉・教育等）のほか、学生が自発的に参加する社会的地域活動（保健・医療・福祉・教育等）などとする。 ・学生が自発的に参加する活動に関しては、担当教員が活動内容を確認する。 ・活動内容などによっては、ボランティア保険などへの加入が必要となることもある。 《授業外に行うべき学習（予習・復習、準備学習等）》 実習先のパンフレットやホームページで予め必要な情報を収集して、予備知識を増やしておくこと。 《標準学修時間の目安》 1回の報告書作成に1～2時間程度の学修が必要となる。						
使用教科書 なし						
参考書 なし						
評価方法 <ul style="list-style-type: none"> ・担当教員から承認されたボランティア活動の累積の時間数が30時間以上となった場合に単位を認定する。 ・評価は、活動終了後に学生が提出する活動内容などを記した報告書により行う。 						
その他 <ul style="list-style-type: none"> ・活動時間などを記したボランティア報告書の記載をしっかりとすること（主催者などの確認印のないものは、単位の対象とならない）。 						

専門教育科目

1 年次配当科目

社会福祉概論	25
健康運動実習I	26
解剖生理学I	27
解剖生理学II	28
運動生理学	29
生化学	30
食品学	31
食品衛生学	32
食品学実験	33
食品衛生学実験	34
栄養学総論	35
栄養学各論	36
健康食生活論	37
栄養指導論I	38
栄養指導論II	39
栄養指導実習I	40
給食管理論	41
調理学	42
給食管理実習I	43
調理実習I	44
調理実習II	45
レクリエーション現場実習	46
スポーツボランティア実習	47
被服学	48
被服製作実習	49

2 年次配当科目

公衆衛生学	50
解剖生理学実験	51
食品加工学	52
臨床栄養学概論	53
栄養生化学実験	54
臨床栄養学実習	55
公衆栄養学概論	56
栄養指導実習II	57
給食管理実習II	58
給食管理実習III	59
調理実習III	60
フードスペシャリスト論	61
フードコーディネイト論	62
食品官能評価	63
食品流通	64
レクリエーション理論	65
レクリエーション実技	66
生涯スポーツ演習	67
健康管理概論I	68
健康管理概論II	69
健康運動概論	70
有酸素運動の実技	71
水泳・水中運動演習	72
トレーニングの理論と演習	73
健康・体力測定演習	74
スポーツ心理学(発育・発達と老化を含む)	75
運動障害と救急処置	76
家庭経営学	77
住居学	78
保育学	79
公衆栄養実習	80
特別研究	81

科目名		教員名	配当年次	期間	形態	単位数
社会福祉概論	01120	吉田輝明	1	後期	講義	2
授業目標・到達目標 《授業目標》 人が幸せに、誇りを持って生きていく為の生活基盤の一部として「福祉」を考え、過去・現在・未来に亘る「福祉」の推移や基礎概念の学習を通じ、「日々の生活と直結した福祉」の存在に対する認識を深める。 《到達目標》 1. 社会と福祉の関係性を身につける。 2. 生活に身近な存在として「福祉」を考えられるようになる。 3. 「福祉」を通じて、政治・経済・法律等、社会の動向に関心や興味を持てるようになる。 4. 社会生活における権利と義務、人権の大切さを認識できるようになる。 5. 人が社会の中で自立生活を送るための支えとして「福祉」の存在を考えられるようになる。 6. 「福祉」は創り出していくもの、日々変化をしていくものであり、「参加する福祉」のあり方と大切さを認識できるようになる。						
講義計画・準備内容 《講義計画》 第1回 社会福祉と私たち（・社会福祉の目的とイメージ・ノーマライゼーションの思想） 第2回 社会福祉という考え方（・社会福祉の目的とは・広義、狭義の社会福祉） 第3回 社会福祉の視点（・社会福祉の理念、理論の展開・社会福祉の基本的な視点） 第4回 社会福祉の流れ（・イギリスにおける社会福祉史・アメリカにおける社会福祉史） 第5回 社会福祉の流れ（・日本における社会福祉史・転換期の社会福祉） 第6回 社会福祉の権利（・人権としての社会福祉・生存権とプログラム規定説） 第7回 社会福祉の対象（・社会福祉基礎構造改革について・社会福祉の対象とその把握） 第8回 社会福祉の主体（・福祉ニーズの多様化・社会福祉は誰が行うのか） 第9回 社会福祉法政（・社会福祉の法制度・社会福祉の行財政） 第10回 社会福祉の援助（・ソーシャルワークと社会福祉援助・専門職の成立条件） 第11回 社会福祉の援助（・援助関係における「主体性」原則・ソーシャルワークの種類と実践） 第12回 福祉をとりまく問題（・家族問題と社会福祉・高齢者問題と社会福祉） 第13回 福祉をとりまく問題（・児童問題と社会福祉・障がい者問題と社会福祉） 第14回 福祉をとりまく問題（・地域問題と社会福祉・貧困問題と社会福祉） 第15回 総合生活保障の構築（・我が国の社会福祉の現状・我が国の社会福祉の課題） 《授業外に行うべき学習（予習・復習、準備学習等）》 「授業計画」に沿った授業が進むので、授業の前後にその内容が深まるように日常生活の中で、常に考え、ノートに文章としてまとめる習慣をつける。 《標準学修時間の目安》 1回の講義あたり予習・復習を含めて4時間の学修が必要である。						
使用教科書 シリーズ・はじめて学ぶ社会福祉①社会福祉概論<第3版>, 山本 隆・小山 隆 編著, ミネルヴァ書房, ISBN978-4-623-04636-2						
参考書 なし						
評価方法 授業態度、課題レポートの提出状況、定期試験（筆記）により、総合的に評価する。						
その他 社会は人と人との繋がり合い、支えあいによって成り立つものであり、「福祉」はその重要な役割を果たすものです。人はそれぞれのライフサイクルの中で沢山の人と出会い、学び成長していく中で、沢山の人間に支えられて今日がある事に気がきます。その支えあいこそが「福祉」であり、社会を構成する一人ひとりがより幸福に、より心豊かに人生を過ごすための方法を模索する中で生まれるのが「福祉」です。ぜひ社会福祉概論の授業を通じて「福祉」を身近な存在として感じ、日々の生活に取り入れてもらえるキッカケにしてほしいと考えます。						

科 目 名		教 員 名	配当年次	期 間	形 態	単 位 数
健康運動実習 I	01130	鈴木英悟	1	前期	実験・実習	1
授業目標・到達目標 《授業目標》 生活習慣病を予防し、健康を維持・増進するためには、日常生活の習慣を見直すことが大切である。本授業では、栄養士として理解しておくべき、健康を維持・増進するための身体活動に関する科学的知識およびそれに基づく運動実践方法と運動プログラムの作成方法、評価法について習得することを目的としている。授業では、各個人の目標に対して、講義および体力測定の結果をもとに各自で作成した運動プログラムの実践を中心としているが、集団での運動も行なう。 《到達目標》 1. 自分に適した運動プログラムを作成できる。 2. 健康維持増進に対する効果的で安全な運動を実践できる。 3. 運動プログラムを評価し、プログラムの見直しができる。						
講義計画・準備内容 《講義計画》 第1回 「身体活動と健康づくり」講義 第2回 フィットネスセンター利用方法、トレーニング機器の説明、体力測定 第3回 「健康づくりのための運動処方作成法」講義 第4回 トレーニングプログラムの実践① 第5回 トレーニングプログラムの実践② 第6回 トレーニングプログラムの実践③ 第7回 「健康増進を目的とした運動処方」講義 第8回 トレーニングプログラムの実践④ 第9回 トレーニングプログラムの実践⑤ 第10回 歩くゲームの体験（ウォークラリー） 第11回 トレーニングプログラムの実践⑥ 第12回 トレーニングプログラムの実践⑦ 第13回 「運動を継続するための具体的方法」講義 第14回 効果測定（体力測定） 第15回 授業のまとめとレポート作成 《授業外に行うべき学習（予習・復習、準備学習等）》 復習：講義で進めた範囲を配布資料をもとに復習し、ノートを整理しておくこと。 予習：次回行う授業内容を配布資料等を活用し、その中からキーワードを抽出しまとめておくこと。 《標準学修時間の目安》 次回の講義までに予習・復習を含めて1～2時間の学修が必要となる。						
使用教科書 なし						
参考書 必要に応じて資料を配布する						
評価方法 毎回のトレーニング実施内容の記録内容(40%)、授業態度(30)、最終レポート(30%)より総合的に評価する。						
その他 トレーニングプログラムの実践は本学フィットネスセンターで行なう。必ず運動のできる服装、靴で参加すること。普段着や裸足での参加は認めない。 授業時以外にも積極的にフィットネスセンターなどを利用し運動習慣をもつこと。						

科目名		教員名	配当年次	期間	形態	単位数
解剖生理学 I	02110	田村 堅吾	1	前期	講義	2
授業目標・到達目標 《授業目標》 解剖学及び生理学は医学の中では最も基礎的な学問の一つであるが、医療をはじめとする人体に関係するさまざまな分野に従事する人々にとって必ず学ばなければならない科目である。解剖学では正常状態における人体各部の形態・構造を、また生理学ではそれらの機能を対象としており、さらに解剖学の一分野として組織学、発生学があり、これらを学ぶことは各組織の微細構造や人体発生の過程、遺伝情報及びその成り立ちを理解する上で必要である。 食物の消化・吸収、代謝、排泄の過程においては各臓器の構造及び機能が大きな関わりをもっており、栄養学を学ぶにあたって、とくにそれらを理解することは、極めて重要不可欠である。 解剖生理学 I および II は、各 2 単位であり、それぞれ前期と後期に講義を行なう。						
《到達目標》 次の各項目について理解し説明できるようにすること。 <ol style="list-style-type: none"> 1. 細胞膜の構造と機能、細胞質内の各小器官の機能、細胞核における核酸の構造とそれが関わる遺伝情報とその発現について 2. 細胞内におけるエネルギー代謝の概要について 3. 人体を構成する組織とそれらが存在する部位と特長について 4. 血液の構成と機能及びそれが関与する免疫機能について 5. 骨格及び筋肉の構造と機能について 6. 内臓の各臓の構造と機能について 7. 神経系の構造及び自律神経系と内分泌系による各内臓器官の機能の調整について 						
講義計画・準備内容 次の各項目について教科書を使用し、適宜プリントを用いて講義を行なう。 解剖生理学 I（前期）・解剖生理学 II（後期） 《講義計画》 第 1 回 序論（イントロダクション） 第 2 - 3 回 細胞、組織 第 4 - 6 回 骨格、骨格筋、筋の収縮 第 7 - 10 回 神経系 第 11 - 15 回 血液、免疫 第 16 - 18 回 感覚、感覚器 第 19 - 21 回 消化と吸収 第 22 - 23 回 呼吸器系 第 24 - 26 回 代謝と栄養 第 27 回 泌尿器系 第 28 回 内分泌系 第 29 回 生殖器系 第 30 回 発生学 ＊授業内容の関連性によって項目が前後して授業を進行する場合がある。 《授業外に行うべき学習（予習・復習、準備学習等）》 授業前にテキストを読み、次の講義の内容を大まかに把握し、復習はノート整理をきちんと行い、理解を確実にして重要語句を覚える。 《標準学修時間の目安》 1 回の講義あたり予習・復習を含めて 4 時間の学修が必要である。						
使用教科書 新しい解剖生理学 改訂第 12 版，山本敏行・鈴木泰三・田崎京二共著，南江堂，ISBN978-4-524-23983-2 テキストは解剖生理学 I、II 共通である。						
参考書 なし						
評価方法 筆記試験および受講態度で評価する。						
その他 解剖生理学 I および II は、各 2 単位であり、それぞれ前期と後期に講義を行なう。						

科目名		教員名	配当年次	期間	形態	単位数
解剖生理学Ⅱ	02210	田村 堅吾	1	後期	講義	2
授業目標・到達目標 《授業目標》 解剖学及び生理学は医学の中では最も基礎的な学問の一つであるが、医療をはじめとする人体に関係するさまざまな分野に従事する人々にとって必ず学ばなければならない科目である。解剖学では正常状態における人体各部の形態・構造を、また生理学ではそれらの機能を対象としており、さらに解剖学の一分野として組織学、発生学があり、これらを学ぶことは各組織の微細構造や人体発生の過程、遺伝情報及びその成り立ちを理解する上で必要である。 食物の消化・吸収、代謝、排泄の過程においては各臓器の構造及び機能が大きな関わりをもっており、栄養学を学ぶにあたって、とくにそれらを理解することは、極めて重要不可欠である。 解剖生理学ⅠおよびⅡは、各2単位であり、それぞれ前期と後期に講義を行なう。						
《到達目標》 次の各項目について理解し説明できるようにすること。 <ol style="list-style-type: none"> 1. 細胞膜の構造と機能、細胞質内の各小器官の機能、細胞核における核酸の構造とそれが関わる遺伝情報とその発現について 2. 細胞内におけるエネルギー代謝の概要について 3. 人体を構成する組織とそれらが存在する部位と特長について 4. 血液の構成と機能及びそれが関与する免疫機能について 5. 骨格及び筋肉の構造と機能について 6. 内臓の各臓の構造と機能について 7. 神経系の構造及び自律神経系と内分泌系による各内臓器官の機能の調整について 						
講義計画・準備内容 次の各項目について教科書を使用し、適宜プリントを用いて講義を行なう。 解剖生理学Ⅰ（前期）・解剖生理学Ⅱ（後期） 《講義計画》 第1回 序論（イントロダクション） 第2-3回 細胞、組織 第4-6回 骨格、骨格筋、筋の収縮 第7-10回 神経系 第11-15回 血液、免疫 第16-18回 感覚、感覚器 第19-21回 消化と吸収 第22-23回 呼吸器系 第24-26回 代謝と栄養 第27回 泌尿器系 第28回 内分泌系 第29回 生殖器系 第30回 発生学 ＊授業内容の関連性によって項目が前後して授業を進行する場合がある。 《授業外に行うべき学習（予習・復習、準備学習等）》 授業前にテキストを読み、次の講義の内容を大まかに把握し、復習はノート整理をきちんと行い、理解を確実にして重要語句を覚える。 《標準学修時間の目安》 1回の講義あたり予習・復習を含めて4時間の学修が必要である。						
使用教科書 新しい解剖生理学 改訂第12版, 山本敏行・鈴木泰三・田崎京二共著, 南江堂, ISBN978-4-524-23983-2 テキストは解剖生理学Ⅰ、Ⅱ共通である。						
参考書 なし						
評価方法 筆記試験および受講態度で評価する。						
その他 解剖生理学ⅠおよびⅡは、各2単位であり、それぞれ前期と後期に講義を行なう。						

科目名		教員名	配当年次	期間	形態	単位数
運動生理学	02120	鈴木英悟	1	後期	講義	2
授業目標・到達目標 《授業目標》 現代の栄養士に求められているのは、単に従来的な栄養指導ばかりでなく、健康づくりのための三要素、すなわち栄養、運動、休養を中心としたライフスタイル全体に関する積極的な指導である。本授業では、この三本柱のひとつ「運動」に関して、スポーツをはじめとする身体活動が健康とどのような点で関わりがあるかを科学的に説明する。具体的には、運動とエネルギーの発生および変換、運動と筋・神経機能、運動と呼吸・循環機能、運動と環境適応、運動不足と生活習慣病、運動処方作成方法といった内容で行う。 《到達目標》 1. 骨格筋の構造と働きについて説明できる。 2. 運動時の神経系の仕組みと働きについて説明できる。 3. 運動時の呼吸器系の仕組みと働きについて説明できる。 4. 運動時の循環器系の仕組みと働きについて説明できる。 5. 運動とエネルギー発生の仕組みを説明できる。 6. 身体活動量の測定方法について解説することができる。						
講義計画・準備内容 《講義計画》 第1回 ガイダンス・筋収縮とエネルギー供給系 第2回 筋線維の種類とその特徴 第3回 神経系の役割 第4回 筋の収縮様式と筋力 第5回 運動と循環 第6回 運動と呼吸 第7回 運動とホルモン 第8回 身体組成と肥満 第9回 運動処方 第10回 運動と生活習慣病 第11回 運動と体温調節 第12回 筋疲労の要因 第13回 老化に伴う身体機能の変化 第14回 運動と栄養 第15回 まとめ 《授業外に行うべき学習（予習・復習、準備学習等）》 復習：講義で進めた範囲をテキストをもとに復習し、ノートを整理しておくこと。 予習：次回行う授業内容をテキスト等を活用し、その中からキーワードを抽出しまとめておくこと。 《標準学修時間の目安》 次回の講義までに予習・復習を含めて4時間の学修が必要となる。						
使用教科書 入門運動生理学, 第3版, 杏林書院, ISBN978-4-7644-1087-9						
参考書 ストレングス&コンディショニング(理論編),NSCAジャパン編,大修館書店 イラスト運動生理学,朝山正己ほか編著,東京教学社 やさしい運動生理学杉晴夫編,南江堂						
評価方法 授業内提出物および定期試験（筆記）の結果により評価を行なう。						
その他 なし						

科目名		教員名	配当年次	期間	形態	単位数	
生	化 学	02130	沼 田 卓 也	1	後期	講義	2
授業目標・到達目標 《授業目標》 生化学は、生物の生命現象を化学的に解き明かそうとする学問であり、栄養士にとって必須の科目である。本講義では、我々の体はどのような物質で成り立ち、またその物質はどのような性質や働きをもっているのか、そしてどのように代謝されるのか、ということについて理解することを目標とする。 《到達目標》 1. 人体がどのように構成されているか説明できる。 2. タンパク質・糖質・脂質の各構造の特徴について説明できる。 3. タンパク質・糖質・脂質の消化過程について説明できる。 4. アミノ酸の代謝の概略を説明できる。 5. 糖質からのエネルギー産生の概略を説明できる。 6. 脂肪によるエネルギーの貯蔵と供給の概略について説明できる。 7. DNAに含まれる情報からどのようにタンパク質が合成されるのか説明できる。 8. 酵素の役割と性質について説明できる。 9. 生体の恒常性を保つ仕組みの概略を説明できる。 10. 体内に侵入した異物が免疫系の作用により消滅するまでの過程を説明できる。							
講義計画・準備内容 《講義計画》 第1回 人体の構造 第2回 アミノ酸・タンパク質の構造と性質 第3回 アミノ酸・タンパク質の代謝 第4回 糖質の構造と性質 第5回 栄養素とエネルギーの関係 第6回 糖質の代謝 第7回 脂質の構造と性質 第8回 脂質の代謝 第9回 核酸の構造と性質 第10回 タンパク質の合成 第11回 核酸の代謝、核酸の異常と病気、遺伝子操作 第12回 酵素の性質 第13回 酵素反応の調節 第14回 生体の恒常性を保つ仕組み 第15回 免疫の仕組み 《授業外に行うべき学習（予習・復習・準備学習等）》 予習：テキストを読んでおく。 復習：毎回課題を示すので、授業内容を復習し、課題を行なう。 《標準学修時間の目安》 1回の講義あたり、予習・復習を含めて4時間の学修が必要である。							
使用教科書 イラスト生化学入門（第3版），相原英孝他，東京教学社，ISBN978-4-8082-3029-6							
参考書 授業内で適宜紹介する。							
評価方法 定期試験（80%）、小テスト・学習姿勢（20%）により総合評価する。							
その他 なし							

科目名		教員名	配当年次	期間	形態	単位数
食品学	03110	伊勢谷 栄 樹	1	後期	講義	2
授業目標・到達目標 《授業目標》 食品は、ヒトがそれを食べた時、エネルギー源や栄養源となるものである。しかし、栄養士を目指すためには、さらに安全性の問題、嗜好の問題、経済性の問題、および食生活習慣病の予防などの健康な食生活の増進や維持をも考えなければならない。そのためには、食品に関する科学的な幅広い知識が必要となる。 ここでは科学的視点から食品を捉え、食品成分の種類とその性質、食品成分間の反応などについて学び、食品の特性、栄養性、機能性など調理や加工に役立つ基礎知識を身に付けることが目的である。 《到達目標》 1. 栄養と栄養素を説明できる。 2. 自由水と結合水の違いおよび食品変性要因の反応速度と水分活性の関係を説明できる。 3. 炭水化物(糖質)・脂質・タンパク質を構成している糖、脂肪酸、アミノ酸の主要なものを列挙し、構成する有機物を性質などと共に具体的に説明できる。 4. 体にとって重要なミネラルおよびビタミンの種類と性質、欠乏症などの特徴を説明できる。 5. 主な酵素の名称と作用を説明できる。 6. 食品の色素・香り・味成分の主な種類と特徴が説明でき、食品の嗜好との関係を概説できる。 7. 三大栄養素を構成している糖質・脂質・タンパク質の調理・加工中の変化とその劣化防止法で重要なものを説明できる。 8. 食品のコロイド、レオロジー、テクスチャーの重要な事柄を説明できる。 9. 食品の官能検査の基本的な事項を説明できると共に、感覚に関する用語と現象を説明できる。						
講義計画・準備内容 《講義計画》 第1回 食生活と健康、栄養と栄養素 第2回 食品成分表の利用のされ方と食品の一般成分の分析方法 第3回 食品成分の化学1(水分) 第4回 食品成分の化学2(炭水化物) 第5回 食品成分の化学3(脂質) 第6回 食品成分の化学4(たんぱく質) 第7回 食品成分の化学5(灰分とミネラル) 第8回 食品成分の化学6(ビタミン) 第9回 嗜好成分の化学1(色素成分) 第10回 嗜好成分の化学2(香り成分) 第11回 嗜好成分の化学3(味成分) 第12回 食品の機能性 第13回 食品成分の変化(炭水化物の変化、脂質の変化) 第14回 食品成分の変化(たんぱく質の変化、褐変、酵素による食品成分の変化) 第15回 食品の物性(コロイド、レオロジー、テクスチャー、食品官能検査) 《授業外に行うべき学習(予習・復習、準備学習等)》 授業前に教科書を読み、新しい用語の意味を予め調べてみる。授業後は、重要語句を覚える。新しい用語が多いので繰り返し覚える努力をする。 《標準学修時間の目安》 1回の講義あたり予習・復習を含めて4時間の学修が必要となる。						
使用教科書 Nブックス食品学I(新版), 菅原龍幸・福澤美喜男編著, 建帛社, ISBN978-4-7679-0280-7						
参考書 五訂増補食品成分表, 香川芳子監修, 女子栄養大学出版部						
評価方法 定期試験(80%)および学習姿勢あるいはレポート(20%)により総合評価する。						
その他 食品学は、栄養関連講義と密接に関わるが、食品を構成する成分の基礎知識となる内容である。この講義で出てくるキーワードは栄養士、管理栄養士として常に頭の中で整理されていて、いつでも説明できることが要求される。高校の授業では出てこないような聞きなれない単語が多いが、基礎をしっかり身に付けることが大切である。						

科目名		教員名	配当年次	期間	形態	単位数
食品衛生学	03120	澤 辺 桃 子	1	前期	講義	2
授業目標・到達目標 《授業目標》 食品が安全であるための原理・原則を学び、食の「安全」、「保障」、「防御」の重要性を認識する。フードチェーン全体における安全性確保の在り方と専門知識に基づく判断力を身につける。食に関する情報が氾濫する中で、根拠のない情報に左右されない科学的な視点を養う。 《到達目標》 1. 食品の安全性を損なう要因を具体的に列挙できる。 2. 食中毒の病因物質とその防御対策を主な原因食品を例に挙げて説明できる。 3. 自然環境に存在する寄生虫と関連の深い食品を例を挙げて説明できる。 4. 食品が変質する原因とその防止方法を列挙できる。 5. 食品添加物の種類と表示方法を説明でき、安全性について議論できる。 6. 食品衛生法の意義と食品衛生行政の概要を説明できる。						
講義計画・準備内容 《講義計画》 第1回 食品衛生の目的と意義、食品衛生法 第2回 食品と微生物（微生物の分類とその特徴） 第3回 食品と微生物（微生物と食品との関わり） 第4回 食中毒（定義と分類、疫学） 第5回 食中毒（細菌性食中毒） 第6回 食中毒（ウイルス性食中毒） 第7回 食中毒（自然毒食中毒） 第8回 食品と寄生虫 第9回 有害物質による食品汚染 第10回 食品の変質（微生物による変質） 第11回 食品の変質（化学的変質、変質の防止） 第12回 食品添加物（概要、法規制） 第13回 食品添加物（安全性、使用実態、表示） 第14回 食品衛生対策 第15回 食品衛生関連法規 《授業外に行うべき学習（予習・復習、準備学習等）》 予習は、授業日までに教科書の該当ページを読んでおくこと。また、2回目以降の授業では、毎回、予習に相当する課題を示す。復習は、授業時間内に配布するプリントに示された栄養士実力試験、管理栄養士国家試験等の過去問を授業内容を振り返りながら解くこととする。準備学習としては、新聞・テレビやインターネット等で知りえた食の安全に関する話題の要点を把握しておくこととする。 《標準学修時間の目安》 1回の講義あたり予習・復習を含めて4時間の学修が望ましい。						
使用教科書 食品衛生学，一色賢司編，東京化学同人，ISBN-13: 978-4807916689						
参考書 イラスト食品の安全性，小塚 諭（著），東京教学社，ISBN-13: 978-4808260279						
評価方法 定期試験の成績により評価する。						
その他 なし						

科目名		教員名	配当年次	期間	形態	単位数
食品学実験	03210	沼田卓也	1	前期	実験・実習	1
授業目標・到達目標 《授業目標》 実際に自分の手で実験を行うことにより、食品学で学んだ知識をより深め、自分のものにする。また実験結果をレポートにまとめることにより、科学的思考力を身につける。この授業では、実験の経験が少ない学生に対しても、内容が理解できるように基本的な実験器具の名称および使い方から始める。そして、身近な食品を材料とし、各種成分について定量を行ったり、性質を調べたりするなどの基礎的な実験を行う。 《到達目標》 1. 実験器具の名称を覚え、それらを正しく使用することができる。 2. 食品に含まれる各種成分の定量法の原理を理解し、正しく測定できる。 3. 糖質・脂質・タンパク質・無機質の主な化学的性質を理解し、説明できる。 4. 米・卵の鮮度判定を行う事ができる。 5. 官能検査の方法を理解し、実際に行う事ができる。 6. 実験結果を整理して、レポートにまとめることができる。						
講義計画・準備内容 《講義計画》 第1回 実験の注意事項・器具の取り扱い方 第2回 pHの測定 第3回 試薬の調製法 第4回 有機酸の定量 第5回 塩分の定量 第6回 糖質の定性実験 第7回 脂質の定性実験 第8回 タンパク質の定性実験（1） 第9回 タンパク質の定性実験（2） 第10回 豆腐の作成 第11回 還元糖の定量（前半） 第12回 還元糖の定量（後半） 第13回 米・卵の鮮度判定 第14回 味覚判定に関する実験 第15回 牛乳中の成分の分離分析 《授業外に行うべき学習（予習・復習・準備学習等）》 予習：配布したプリントを読んでおく。分からないところは調べておく。 復習：実験についてのレポートを作成する。 《標準学修時間の目安》 1回のレポート作成に1～2時間程度の学修が必要となる。						
使用教科書						
参考書 Nブックス食品学 I, 菅原龍幸・福澤美喜男編著, 建帛社						
評価方法 レポート内容(70%)、学習姿勢(30%)により総合評価する。						
その他 教科書は使用せず、講義毎にプリントを配布する。						

科目名		教員名	配当年次	期間	形態	単位数
食品衛生学実験	03220	澤 辺 桃 子	1	後期	実験・実習	1
授業目標・到達目標 《授業目標》 講義で学んだ内容を実際に体験することで食品衛生への理解を深める。微生物を取り扱う実験の基本操作を学び、多くの細菌が身の周りに存在することを実感することで、衛生管理意識を養う。 《到達目標》 1. 無菌操作ができる。 2. 微生物の顕微鏡観察とスケッチを行い、サイズや形態の特徴を把握できる。 3. 一般的な食品衛生検査（生菌数算出、大腸菌群の検出、食品添加物の検出）を行える。 4. 石けんや台所用除菌剤の抗菌力を測定し、効用成分について考察できる。 5. 食物アレルギーの基礎知識とアレルギーの簡易的な検出方法を理解する。 6. 市販されている簡易検査キットを使用し、種々の食品衛生検査における公定法との比較を考察できる。						
講義計画・準備内容 《授業計画》 第1回 オリエンテーション・細菌分離用培地の作製（実験1） 第2回 身の周りの微生物の検出（実験2） 第3回 微生物の顕微鏡観察（実験3 細菌・酵母・カビのプレパラート作成） 第4回 微生物の顕微鏡観察（実験3 顕微鏡観察とスケッチ） 第5回 食品中の一般生菌数測定（実験4 試料の調製と混積培養） 第6回 食品中の一般生菌数測定（実験4 生菌数の算出と食品規格基準との比較） 第7回 食品中の大腸菌群の検出（実験5 試料の調製とBGLB培地への接種） 第8回 食品中の大腸菌群の検出（実験5 大腸菌群の検出と食品規格基準との比較） 第9回 まな板・台ふきん・スポンジの衛生検査（実験6 試料の調製と混積培養） 第10回 まな板・台ふきん・スポンジの衛生検査（実験6 生菌数の算出と消毒法の比較） 第11回 薬用石けん・台所用除菌剤の抗菌力試験（実験7 試料の調製とディスク法による培養） 第12回 薬用石けん・台所用除菌剤の抗菌力試験（実験7 発育阻止円の測定と抗菌力の比較） 第13回 食物アレルギー物質の検出（実験8）、食品中の放射性物質の算出（実験9） 第14回 食品中の発色剤の検出（実験10） 第15回 食品中の漂白剤の検出（実験11） 《授業外に行うべき学習（予習・復習、準備学習等）》 授業日までにテキストの該当ページを読み、内容の理解と実験操作のイメージをもっておくことを予習とする。復習は、各実験内容において示す課題に対する回答を参考書やインターネットで調べ、実験レポートの内容に反映させることとする。食品衛生学（講義）にて使用した教科書の実験内容に関連する箇所を見直しておくことを準備学習とする。 《標準学修時間の目安》 1回のレポート作成に1～2時間程度の学修が必要となる。						
使用教科書 講義毎に実験テキストを配布する。教科書は使用しない。						
参考書 食品衛生学（講義）にて使用した教科書						
評価方法 実験レポートの内容及び学習姿勢により総合評価する。 定期試験は行わない。						
その他 講義日程の都合上、実験の順番が変更になることがある。第1回の授業で行うオリエンテーション時に予定表を配布するので、確認すること。 実験室内での飲食は禁止。実験用白衣と専用の上履きを着用すること。						

科目名		教員名	配当年次	期間	形態	単位数
栄養学総論	04110	木幡恵子	1	前期	講義	2
授業目標・到達目標 《授業目標》 栄養学は栄養学総論（基礎栄養学）と栄養学各論（応用栄養学）に分けて学びます。栄養学総論はおもにヒトの栄養となる物質（炭水化物、タンパク質、脂質、ビタミン、ミネラル）について化学的・生物学的に学習します。栄養素に関する化学的・生物学的知識は栄養学の基礎であるばかりでなく、栄養に関する他の専門科目を学ぶ際に必要になります。 《到達目標》 1. 五大栄養素（炭水化物、タンパク質、脂質、ビタミン、ミネラル）は化学的にどのような物質か、理解を深め、説明できる。 2. これらの物質は体内でどのように変化して体をつくる物質になり、体を動かすエネルギーになるか、正確に理解し、まとめて説明できる。 3. 通常、食物にふくまれる栄養物質はそのまま体内に吸収されないで、消化というプロセスをへる。消化作用と消化器系について理解し、各消化器系は自分の体のどの位置にあるか確認できる。 4. 体内の物質輸送を行う循環器系、不要な物質を排出する排出器系、エネルギー生産にかかわる呼吸器系などはたらきについて、理解し説明できる。 5. 生体における水の役割や難消化性炭水化物（食物繊維）の重要性について理解を深め説明できる。 6. 栄養素の必要量、エネルギーの必要量、栄養素の過不足による健康障害などについて検討する。そのうえで健康を維持するために必要な栄養や運動はどうあるべきか、自分で考え計画できるようにする。						
講義計画・準備内容 《講義計画》 第1回 栄養の話 第2回 栄養の意義、栄養学の歴史 第3回 栄養素と食物 食物の摂取 第4回 炭水化物とその栄養 第5回 脂質とその栄養 第6回 タンパク質とその栄養 第7回 無機質、水とその栄養 第8回 ビタミンとその栄養 第9回 エネルギー代謝 第10回 まとめ 第11回 栄養評価 第12回 栄養評価 第13回 栄養評価 第14回 栄養と健康 第15回 まとめ 《授業外に行うべき学習（予習・復習、準備学習等）》 新しい用語に早く慣れること。そのためには、教科書のを事前に読んで単語に慣れ、授業と復習によって確実に覚えるようにする。 《授業外の《標準学修時間の目安》について》 1回の講義あたり予習・復習を含めて4時間の学修が必要である。						
使用教科書 Nブックス 改訂栄養学総論, 林 淳三、高橋徹三著, 建帛社, ISBN978-4-7679-0404-7 C3047						
参考書 本短大図書館には栄養学に関連した書籍が沢山ありますので積極的に利用して下さい。						
評価方法 定期試験および学習姿勢あるいはレポートにより総合評価する。						
その他 本短大図書館には栄養学に関連した書籍が沢山ありますので積極的に利用して下さい。						

科目名		教員名	配当年次	期間	形態	単位数
栄養学各論	04210	若森 右	1	前期	講義	2
授業目標・到達目標 《授業目標》 人は生命を維持するために「栄養」は必要不可欠である。人の一生（ライフステージ）には、段階があり、それに対応した「栄養」の適切な配慮が必要である。本講義では、各ライフステージに応じた生理的特徴・特性を理解するとともに、栄養ケアのあり方、栄養の自立管理について学びそして、栄養状態の評価・判定、つまり栄養アセスメントの基本的考え方を修得する。また、運動による健康の維持・増進、生活習慣病予防そして特殊環境下における栄養と代謝についても理解を深める。 《到達目標》 1. 栄養マネジメントの定義・過程について理解し概説できる。 2. 栄養アセスメントの意義・目的を理解し、その方法について説明できる。 3. 成長・発達・加齢に伴う身体的・精神的変化と栄養について理解し概説できる。 4. 各ライフステージの生理的特徴を理解し概説できる。 5. 各ライフステージの特徴的な疾患・病態を理解し栄養ケアのあり方を概説できる。 6. ライフステージ別のエネルギー・栄養素必要量を理解し概説できる。 7. 運動による健康の維持・増進、代謝、栄養補給について理解し概要を説明できる。 8. 特殊環境下における栄養と代謝について理解し概要を説明できる。						
講義計画・準備内容 《講義計画》 第1回 栄養マネジメント（栄養管理） 第2回 栄養アセスメント（栄養状態の評価・判定） 第3回 成長・発達・加齢（老化） 第4回 妊娠期 第5回 授乳期 第6回 新生児期、乳児期 第7回 幼児期 第8回 学童期 第9回 思春期 第10回 成人期 第11回 閉経期（更年期） 第12回 高齢期 第13回 栄養必要量（栄養要求量）の科学的根拠 第14回 運動・スポーツと栄養 第15回 環境と栄養 《授業外に行うべき学習（予習・復習、準備学習等）》 予習：講義計画・内容に沿って、テキストを読んだり、調べたりしておく。 復習：テキスト等を見返し、毎回授業の始めに前回行った授業内容について質問をするので答えられるようにしておく。 《標準学修時間の目安》 1回の講義あたり予習・復習を含めて4時間の学修が必要である。						
使用教科書 ライフステージ栄養学，鈴木和春，株式会社光生館，ISBN978-4-332-0295-0						
参考書 特になし						
評価方法 定期試験（筆記）により評価する						
その他 なし						

科目名		教員名	配当年次	期間	形態	単位数
健康食生活論	04120	青山浩子	1	前期	講義	2
授業目標・到達目標 《講義目標》 健康維持のために必要な食べ物は、栄養的に必要な成分を補給するものであるが、それは様々な食品を組み合わせることにより可能である。また、食品の原料となる動・植物などはそれぞれの民族が生活してきた気候・風土で異なり、その調理方法も同様に異なる。本講では健康を中心に、食生活の構造、食と環境・地域性の関連、さらには健康づくりとその推進について検討し、これらに関与する栄養士の役割及び責任を考察する。 《到達目標》 1. 食生活の概念と構造についてノートにまとめることが出来る 2. 食行動と食文化・食習慣・食事の意義について理解し説明できる 3. 健康づくりのための食生活指針に基づき、食事のあり方や食生活に対する心構えを説明することが出来る 4. 食事バランスガイドを使って、具体的に「何を」「どの位」食べたらいいかを自己評価することが出来る 5. 食生活と栄養士とのかかわりを理解し説明することが出来る						
講義計画・準備内容 《講義計画》 第1回 食生活の概念と構造（1） 第2回 食生活の概念と構造（2） 第3回 食行動と食文化・食習慣（1） 第4回 食行動と食文化・食習慣（2） 第5回 食行動と食文化・食習慣（3） 第6回 現代の食生活と環境（1） 第7回 現代の食生活と環境（2） 第8回 現代のニーズと食生活 第9回 食生活と健康（1） 第10回 食生活と健康（2） 第11回 食事の構成（1） 第12回 食事の構成（2） 第13回 食物の調理・加工 第14回 食物の摂取 第15回 食生活と栄養士のかかわり 《授業業外に行うべき学習（予習・復習、準備学習等）》 教科書及び授業で配布された資料をもとに、予習・復習を行いノート整理を行うこと。 《標準学修時間の目安》 次回の講義までに予習・復習を含めて4時間の学修が望ましい。						
使用教科書 新食生活論 第三版 岡崎光子 編著 光生館 食品成分表2015 香川芳子監修 女子栄養大学出版部2015						
参考書 ・食生活概論 垣本充・高坂祐夫他（化学同人） ・食生活論 五十嵐脩・唯是康彦（調理栄養教育公社） ・日本の食生活全集 農文協編（農文協） ・調理科学講座7 調理と文化 橋本慶子・下村道子・島田淳子編（朝倉書店）						
評価方法 定期試験およびレポートの内容と授業態度						
その他 なし						

科目名		教員名	配当年次	期間	形態	単位数
栄養指導論 I	05110	伊勢谷 栄 樹	1	前期	講義	2
授業目標・到達目標 《授業目標》 栄養教育・指導の意義は、基本的には「対象者の健康づくりに資すること」である。栄養士は栄養や食生活に関する正しい知識と実践のための技術を駆使し、よりよい食生活の習慣化を図らなければならない。本講義では、栄養教育・指導を円滑に進めるための土台となる諸事項を学習し、人を相手とする栄養教育・指導とは何かを考えていく。						
《到達目標》 1. 日本における栄養教育の歴史を説明できる。 2. 食生活指針などの栄養指導における基礎知識について理解し、その概要を説明できる。 3. 栄養指導計画の流れを説明できる。 4. 栄養指導の基本的な技術を、身につけることができる。						
講義計画・準備内容 《講義計画》 第1回 栄養指導の定義と意義 第2回 栄養指導の沿革 第3回 栄養指導と関係法規 第4回 栄養指導の対象者アセスメント①（対象者の特性把握、アセスメントの方法） 第5回 栄養指導の対象者アセスメント②（栄養アセスメント項目と判定・評価） 第6回 栄養指導の計画と方法 第7回 栄養指導の実際 第8回 栄養指導に必要な基礎事項①（日本人の食事摂取基準・食事バランスガイド・食品成分表） 第9回 栄養指導に必要な基礎事項②（健康日本21、栄養にかかわる食品の表示、食生活指針） 第10回 ライフステージ別栄養指導 第11回 ライフスタイル別栄養指導 第12回 生活習慣病の栄養指導 第13回 施設別給食における栄養指導①（特定給食施設や事業所給食） 第14回 施設別給食における栄養指導②（学校給食や社会福祉施設給食） 第15回 栄養指導の国際的動向 《授業外に行うべき学習（予習・復習、準備学習等）》 教科書を熟読 課題の提出 《標準学修時間の目安》 1回の講義あたり予習・復習を含めて4時間の学修が必要となる。						
使用教科書 Nブックス栄養指導論, 相川りゑ子・鈴木道子編著, 建帛社, ISBN978-4-7679-0409-2						
参考書 日本人の食事摂取基準 厚生労働省策定（2010年版）, 第一出版編集部, 第一出版						
評価方法 筆記試験、学習態度及び課題により総合的に評価する。						
その他 なし						

科目名		教員名	配当年次	期間	形態	単位数
栄養指導論Ⅱ	05210	中村優美	1	後期	講義	2
授業目標・到達目標 《授業目標》 傷病者に対して栄養状態を把握し、適切な栄養管理を行うため、疾患の概要を理解し、臨床検査値、診断、治療、薬物療法、栄養・食事療法、薬と食物の相互作用等について学び知識を身につける。また、栄養士として必要な医療保険制度等について理解し知識を深める。 《到達目標》 1. 傷病者に対して行う栄養管理の意義、目的について説明できる。 2. 医療保険制度における入院時食事療養制度について説明できる。 3. 病院栄養士の業務内容を説明できる。 4. 栄養サポートチームについての意義、目的、役割について説明できる。 5. 各疾患の概要、検査値の見方、診断、治療、食事療法の方法等を理解し概説できる。 6. 薬理効果に対する栄養・食物の相互作用について説明できる。 7. 3種類の食品交換表の説明ができる。						
講義計画・準備内容 《講義計画》 第1回 傷病者に対する栄養食事療法総論 第2回 病院栄養士業務内容 第3回 一般治療食 第4回 糖尿病 第5回 脂質異常症・痛風 第6回 腎臓病 第7回 胃・十二指腸潰瘍、クローン病、潰瘍性大腸炎 第8回 肝臓・膵臓病 第9回 高血圧・心臓病 第10回 貧血 第11回 アレルギー疾患 第12回 高齢者の栄養管理 第13回 先天性代謝異常症 第14回 経管栄養 第15回 検査食 《授業外に行うべき学習（予習・復習、準備学習等）》 予習：講義計画・内容に沿って、事前にテキストを読んだり調べたりしておく。 復習：配布した資料やテキストを見返しておき、毎回授業の始めに前回行った授業の内容について質問をするので答えられるようにしておく。 《標準学習時間の目安》 1回の講義あたり予習・復習を含めて4時間の学修が必要である。						
使用教科書 栄養食事療法必携, 中村丁次, 医歯薬出版, ISBN978-4-263-70456-1 糖尿病食事療法のための食品交換表, 日本糖尿病学会編, 文光堂, ISBN978-4-8306-6046-7 糖尿病性腎症の食品交換表, 日本糖尿病学会編, 文光堂, ISBN978-4-8306-6023-8 腎臓病食品交換表, 中尾俊之他, 医歯薬出版, ISBN978-4-263-70557-5						
参考書 ・栄養健康・科学シリーズ 臨床栄養学, 糸川嘉則他, 南江堂 ・栄養指導論, 相川りゑ子他, 建帛社						
評価方法 定期試験（筆記）により評価する						
その他 なし						

科目名		教員名	配当年次	期間	形態	単位数
栄養指導実習 I	05310	木幡恵子	1	後期	演習	1
授業目標・到達目標 《授業目標》 栄養指導論や給食管理論等で学んだ知識をもって、栄養指導の場で生かせる様に訓練する実習である。 具体的にはコンピュータや種々媒体を用い、計画・実施・検討の流れに沿って実習を進める。 《到達目標》 1. 栄養（食事）や生活活動などの面から調査し、集計・数値化することができる。 2. 日本人の食事摂取基準を十分に理解し、正しく活用できる。 3. 栄養必要量、食品群別摂取量、栄養比率の算出と評価ができる。 4. 調査から問題点の改善方法を明らかにすることができる。 5. 指導対象者に適切な指導媒体を考えることができる。 6. 指導対象者に正しい栄養・食事計画を作成することができる。						
講義計画・準備内容 《講義計画》 第1回 栄養指導実習の意義・目的 第2回 栄養指導の基礎調査・食物摂取状況調査 第3回 栄養指導の基礎調査・生活時間調査 第4回 消費エネルギーと摂取エネルギーの検討 第5回 栄養指導の基礎調査・食事調査結果より、脂質・たんぱく質についての検討 第6回 栄養指導の基礎調査・食事バランスガイドを用いての検討 第7回 栄養指導の基礎調査・グループ発表と評価 第8回 学童期の栄養指導・指導媒体の作成 第9回 学童期の栄養指導・グループ発表（ロールプレイング）と評価 第10回 壮年期の栄養指導・肥満について 第11回 壮年期の栄養指導・ダイエット計画書の作成・献立作成 第12回 壮年期の栄養指導・指導計画書の評価 第13回 高齢期の栄養指導・指導媒体の作成 第14回 情報収集実習・インターネットを使って最新情報を検索 第15回 実習ノートのまとめ 《授業外に行うべき学習（予習・復習、準備学習等）》 授業に集中して参加すること。機器の操作に習熟して自分の課題等に取り組み、実践に即した指導が出来るまで繰り返し練習すること。 《標準学修時間の目安》 1回の報告書（レポート）作成に1～2時間程度の学修が必要となる。						
使用教科書 栄養指導論，相川りゑ子・鈴木道子編著，建帛社，978-4-7679-0409-2 食品成分表 2013，香川芳子監修，女子栄養大学出版，978-4-7895-1013-4 調理のためのベーシックデータ，女子栄養大学出版部，978-4-7895-0314-3 糖尿病食事療法のための食品交換表 第7版，日本糖尿病協会 分光堂						
参考書 給食の運営給食計画・実務論、富岡和夫、医歯薬出版株式会社						
評価方法 実習態度、課題レポート、実習ノート等総合的に評価する。						
その他 随時、資料及びプリント等を配布し活用する。						

科目名		教員名	配当年次	期間	形態	単位数
給食管理論	06110	鈴木 真由美	1	前期	講義	2
授業目標・到達目標 《授業目標》 特定給食施設において適正な給食業務を行うための食事の計画や、調理を含めた給食サービス提供に関する技術の基礎理論を修得する。また、1年次後期および2年次に開講される給食管理実習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲを円滑に行うための知識、実践に応用・展開できることを目標とする。 《到達目標》 1. 給食の概要について理解し、その内容について説明することができる。 2. 給食における栄養士の役割についてまとめることができる。 3. 特定給食施設を列挙し、その特徴や関係法規について把握できる。 4. 「日本人の摂取基準」を理解し、食事計画を立案できる。 5. 給食施設における料理の組み合わせ方を説明できる。 6. 大量調理について説明できる。						
講義計画・準備内容 《講義計画》 第1回 給食の概念 給食の意義・目的 第2回 給食の概念 給食施設の種類と特性 第3回 経営管理 事務管理 第4回 経営管理 原価管理 第5回 栄養管理 特定給食施設における栄養管理 第6回 栄養管理 給与栄養基準量の決定（1） 第7回 栄養管理 給与栄養基準量の決定（2） 第8回 栄養管理 食事計画・食品構成の作成（1） 第9回 栄養管理 食事計画・食品構成の作成（2） 第10回 栄養管理 献立計画・献立作成 第11回 栄養管理 栄養管理の評価/食材料管理 食材料の種類と分類 第12回 食材料管理 食材料管理の方法 第13回 衛生・安全管理 第14回 施設・設備管理 第15回 作業管理/まとめ 《授業外に行うべき学習（予習・復習、準備学習等）》 教科書、ノート、配布資料を中心に復習する事。 《標準学修時間の目安》 1回の講義あたり予習・復習を含めて4時間の学修が必要である。						
使用教科書 給食の運営給食計画・実務論，富岡和夫，医歯薬出版，978-4-263-70436-3 五訂増補 食品成分表〈2015〉，香川 芳子監修，女子栄養大学出版社，978-4-7895-1015-8						
参考書 日本人の食事摂取基準，厚生労働省「日本人の食事摂取基準」策定検討会報告書<2015年版>，第一出版。 「食事バランスガイド」を活用した栄養教育・食育実践マニュアル，日本栄養士会監修，第一出版。						
評価方法 試験成績、レポート課題、給食チケットの使用状況 等を総合して評価する。						
その他 計算問題等に使用する電卓は必ず持参すること。						

科目名		教員名	配当年次	期間	形態	単位数
調理学	06120	福田悦子	1	後期	講義	2
授業目標・到達目標 《授業目標》 今、「食と健康」は生活習慣病の増加と相まって、人間栄養学の中心課題となっており、その中核は生きるために必要な「料理（調理）」となろう。調理とは食品をおいしく、栄養効率よく、衛生的に調製することであり、このためには調理に関わる手法（技術）の基本的理論を習得し、調理中に生じる食品の形状、組織、物性、成分などの変化を理解し、科学的に解明することにより実際の調理に応用・展開できるようにする。 《到達目標》 1. 調理の意義を人間栄養学の中心テーマとして把握し、その内容を説明することができる。 2. 調理の変遷を食事形態を通して掌握し、それら両者の関連の重要性を指摘できる。 3. 食物の嗜好性の科学性を理解することで、生体におけるその役割の重要性を説明できる。 4. 上記1, 2, 3が、栄養指導の中心となることを理解した上で食事設計ができる。 5. 調理操作の種類、その根拠を理解した上で、実際に調理操作を行うことができる。 6. 食品の調理性が、生体利用性と密接な関係にあることを説明することができる。 7. 調理の安全性と環境との関連を説明することができる。						
講義計画・準備内容 《講義計画》 第1回 調理の意義 (調理・調理学・調理科学の内容) 第2回 調理の変遷と食事形態 (食生活と調理の変遷、現代の世界の食生活と食事形態) 第3回 日本料理の原点と食事形態 第4回 世界の人々の食生活と食事形態 第5回 食物の嗜好性と生体における役割 (1) (食べ物のおいしさ、味覚の構造、味成分と生体での役割) 第6回 食物の嗜好性と生体における役割 (2) (食べ物のおいしさ、味覚の構造、味成分と生体での役割) 第7回 味の相互作用及びその他の影響因子 第8回 食事設計と栄養 (献立作成、供応食、行事食) 第9回 調理操作の種類 (1) (非加熱調理操作・加熱調理操作) 第10回 調理操作の種類 (2) (非加熱調理操作・加熱調理操作) 第11回 調理機器・その他 第12回 食品の調理性と生体利用性 (栄養) 第13回 調理の安全性及び環境 第14回 調理学関連問題の演習・まとめ (1) 第15回 調理学関連問題の演習・まとめ (2) 《授業外に行うべき学習 (予習・復習、準備学習等)》 教科書をよく読み、理解できないところは講義で納得できる解説により理解を深め、復習により内容を説明できるようにする。 《標準学修時間の目安》 次回の講義までに予習・復習を含めて4時間の学修が望ましい。						
使用教科書 ネオエスカ調理学 (第二版), 渋川祥子・畑井朝子編著, 同文書院, ISBN978-4-8103-1275-1						
参考書 ・調理, 調理研究会, 建帛社 ・調理学, 森下敏子編, 建帛社 ・調理学 新エスカ21, 渋川祥子他, 同文書院 ・調理科学, 渋川祥子著, 同文書院 ・新版 現代の調理, 高木節子・加田静子 編著, 建帛社 ・日本栄養士会雑誌						
評価方法 定期試験 (80%) および学習姿勢あるいはレポート (20%) により総合評価する。						
その他 なし						

科目名		教員名	配当年次	期間	形態	単位数
給食管理実習Ⅰ	06210	鈴木 真由美	1	後期	実験・実習	1
授業目標・到達目標 《授業目標》 給食管理実習Ⅰでは、給食運営や関連の資源（給食に関わる組織や経費など）を総合的に判断し、すでに学んだ理論などの知識を生かして、栄養面、安全面、経済面全般のマネジメントを行う能力を養うことを目標とする。 《到達目標》 1. 実習に対応できる体調管理ができる。 2. 大量調理に必要な技能を身につけることができる。 3. 大量調理施設衛生管理マニュアルを理解し説明できる。 4. 示された献立表に基づき、調理・提供が時間内にできる。 5. 提供した献立の栄養管理および原価管理ができる。 6. 施設設備の管理ができる。						
講義計画・準備内容 《講義計画》 第1回 実習概要、班編成 第2回 衛生・安全管理および施設・設備管理 第3回 技能調査 第4回 栄養管理 第5回 調理／下処理（以下、／班毎による） 第6回 下処理／調理 第7回 給食の提供（調理、下処理）／原価管理・食材管理 第8回 原価管理・食材管理／給食の提供（調理、下処理） 第9回 給食の提供（調理、下処理）／経営管理・栄養管理 第10回 経営管理・栄養管理／給食の提供（調理、下処理）／経営管理・栄養管理 第11回 経営管理・栄養管理／給食の提供（調理、下処理） 第12回 施設・設備整備 第13回 「給食ソフト」の取り扱い、栄養管理 第14回 栄養管理、ファイルのまとめ 第15回 まとめ 《授業外に行うべき学習（予習・復習、準備学習等）》 ・給食管理論の内容を復習しておく事。 ・大量調理施設衛生管理マニュアルの内容を復習しておく事。 ・示された献立表は、実習当日までに手順等を予習して頭に入れておく事。 ・実習後は、速やかに提供した献立の栄養管理および原価管理作業に取りかかる事。 《標準学修時間の目安》 1回の報告書（レポート）作成に1～2時間程度の学修が必要となる。						
使用教科書 給食の運営給食計画・実務論，富岡和夫，医歯薬出版，978-4-263-70436-3 五訂増補 食品成分表〈2015〉，香川 芳子監修，女子栄養大学出版社，978-4-7895-1015-8						
参考書 実習ノートおよび参考資料等は配布。						
評価方法 試験成績、授業への参加状況、レポート課題、提出物の内容、給食チケットの使用状況 等を総合して評価する。						
その他 自己管理に留意すること。特に給食の提供の際、体調や身支度には十分な配慮をすること。						

科目名		教員名	配当年次	期間	形態	単位数
調理実習 I	06220	庭 亜子	1	前期	実験・実習	1
授業目標・到達目標 《授業目標》 料理は、土地や生活習慣により調理法や使用器具、食べ方に差がある。しかし、科学的にみれば基本的操作には共通点が多い。本講義では、初歩的な料理を通じて、基礎部分（材料の選定、計量、洗浄、加熱、調味、用具の整頓、衛生管理など）を実習し、栄養士として必要な「理論的基礎の上にたつ調理」を身につける。 《到達目標》 1. 正しい計量ができる。 2. 器具を正しく扱うことができる。 3. 調理の基本を理解し実践できる。 4. 日本料理、西洋料理、中国料理の配膳ができる。 5. 身なりや手洗い、清掃などの衛生管理を理解し実践できる。						
講義計画・準備内容 《講義計画》 第1回 実習の心得① 調理の意義と目的・計量の意味と方法 第2回 実習の心得② 衛生管理について 第3回 実習の心得③ 調理器具・調理操作について 第4回 炊飯に関する実習～白飯・味噌汁・青菜のお浸し 第5回 汁ものに関する実習～かき卵汁・炊き込みご飯・酢の物 第6回 親子丼・黄身酢あえ 第7回 鱈の照り焼き・沢煮鮎・いんげんのごま和え・白飯 第8回 コーンポタージュ・ムニエル・パン 第9回 マカロニグラタン・スープ・パン 第10回 ヴァランシア風ライス・トマトサラダ 第11回 ピーマンの肉詰め・ミモザサラダ・パン 第12回 鶏のから揚げ・麻婆豆腐・白飯 第13回 焼売・八宝菜・白飯 第14回 涼麺・凉拌猪肉 第15回 実習のまとめ 《授業外に行うべき学習（予習・復習、準備学習等）》 予習：実習の目標を設定し、配布する実習プリントに記入の上実習へ臨むこと。事前に実習プリントを読み、不明な箇所について調べておくこと。また、調理作業を進行する際の役割分担や時間配分について考えること。 復習：提出課題に取り組むこと。実習を振り返り、反省点および改善点について実習レポートにまとめること。 《標準学修時間の目安》 1回の講義あたり1時間程度の予習と、報告書（レポート）作成に1～2時間程度の学修が必要となる。						
使用教科書 手法別・食品別による基礎調理, 乙坂ひで, 峯書房, ISBN : 978-4-89532-007-8 食品成分表2015, 香川芳子, 女子栄養大学出版部, ISBN : 978-4-7895-1015-8 調理のためのベーシックデータ 第4版, 松本伸子, 女子栄養大学出版部, ISBN : 978-4-7895-0317-4						
参考書 コツと科学の調理事典 第3版, 河野友美著, 医歯薬出版, ISBN : 978-4-263-70264-2						
評価方法 出席状況 (20%)、実習態度 (30%)、実習・課題レポート (50%) により評価する。						
その他 実習用の包丁、ノートは指定のものを使用する。 白衣、帽子、パンツ、シューズは常に清潔に管理すること。						

科 目 名	教 員 名	配当年次	期間	形態	単位数	
調 理 実 習 II	06320	清水陽子・保坂静子	1	後期	実験・実習	1
授業目標・到達目標 《授業目標》 調理実習 I での基礎を踏まえる。 1. 調理実習時に起こりやすい失敗や疑問点をその食品の調理性と関連させて調理実験し解明する。 2. 食品の調理性を有効に生かした調理技術を習得する。 《到達目標》 1. 食品の調理性について調理実験を通し、理解し実際に調理することができる。 2. 調理実験を通して、調理技術を身に付けることができる。						
講義計画・準備内容 《講義計画》 第1回 調理実習 II の目的・レポートの書き方・調理の下準備① 第2回 調理の下準備② 応用調理（三平汁） 第3回 食品の重量と廃棄率 応用調理（リヨネーズポテト・フルーツサラダ他） 第4回 卵の調理性①（卵の加熱凝固性）応用調理（洋風朝食献立・オムレツ他） 第5回 卵の調理性②（卵の希釈性と加熱凝固性）応用調理（和風朝食献立・だし巻き卵他） 第6回 小麦粉の調理性①（小麦粉の種類と性質～グルテンの採取）応用調理（うどん他） 第7回 小麦粉の調理性②（小麦粉の膨化と膨化剤）応用調理（パン各種他） 第8回 小麦粉の調理性③（小麦粉の膨化と卵の気泡性）応用調理（ケーキ各種・紅茶） 第9回 米（うるち米）及び野菜の調理性 応用調理（おにぎり・すまし汁） 第10回 米（もち米）及び魚介類の調理性 応用調理（こわ飯・いかの和え物） 第11回 日本の行事食（お節料理各種） 第12回 米粉の調理性 応用調理（糸切り団子他） 第13回 じゃがいもの調理性 応用調理（いも餅、どつたら餅、だし餅） 第14回 肉・魚の調理性 応用調理（焼肉とスープ） 第15回 寒天及びゼラチンの調理性・まとめ 《授業外に行うべき学習（予習・復習、準備学習等）》 授業前に実習内容を大まかに把握する。 授業後は実習記録を整理し、課題について調べ提出する。 《標準学修時間の目安》 1 回の報告書（レポート）作成に 1～2 時間程度の学修が必要となる。						
使用教科書						
参考書 ・「手法別・食品別による基礎調理」,乙坂ひで編,峯書房 ・「五訂増補 食品成分表〈2015〉」,香川 芳子監修,女子栄養大学出版社						
評価方法 実習ノート (60%)、実技テスト (20%)、実習態度 (20%) により評価する。						
その他 なし						

科目名		教員名	配当年次	期間	形態	単位数
レクリエーション現場実習	08350	鈴木英悟	1	その他	実験・実習	1
授業目標・到達目標 《授業目標》 レクリエーション・インストラクター資格取得の為の必修科目である。目的をもって、地域で開催されている事業を選択し、参加することを目指す。 《到達目標》 1. 健康づくり、介護予防に関わる事業を説明できる 2. 社会参加を促進する事業を説明できる 3. 青少年の健全育成、子育て支援に関わる事業を説明できる 4. 地域づくり、コミュニティづくりに関わる事業を説明できる 5. 生涯学習、生涯スポーツの振興に関わる事業を説明できる 6. 地域文化、生涯スポーツの振興に関わる事業を説明できる 7. その他、地域で行われる公益目的の事業を説明できる						
講義計画・準備内容 《講義計画》 事業参加の対象となる事業の形態は、以下のいずれかに該当すること ①日本レク協会、都道府県レク協会、市区町村レク協会の主催事業 ②日本レク協会および都道府県レク協会に加盟する団体の主催事業 ③教育委員会などの行政や民間団体の主催する事業で、日本レク協会や都道府県レク協会が関係（共催、後援、受託等）している事業 ④日本レクリエーション協会公認指導者養成課程認定校連絡協議会が主催する事業で、日本レク協会や都道府県レク協会が関係している事業 ⑤以上のような目的を持って行われるレク・インストラクターを目指す学生にとってふさわしいと考えられる事業 ・上記事業の形態のうち必ず1回は、①～④に該当するものに参加しなければならない。 ・1回の事業の時間は、1日あたり3時間以上を目安とする ・事業の時間については、次のように考える 《事業参加》受付から解散までの時間 《スタッフ時間》準備から撤収までの時間 《授業外に行うべき学習（予習・復習、準備学習等）》 予習：レクリエーションインストラクター取得関連授業で学んだ内容が当実習で必要となるため、教本をしっかりと読み込むこと。 復習：実際に現場に出て実習を行ってきた後、振り返りの時間として、自己の行動等の改善点、反省点を随時まとめること。 《標準学修時間の目安》 1回の報告書（レポート）作成に1～2時間程度の学修が必要になる。						
使用教科書						
参考書 なし						
評価方法 指定されたレクリエーション関連事業および関連大会に、必ず出席し、そのレポートを提出することが評価の対象となる。（得点配分100%）						
その他 なし						

科 目 名		教 員 名	配当年次	期間	形態	単位数
スポーツボランティア実習	08260	庭 亜 子	1	その他	実験・実習	1
授業目標・到達目標 《授業目標》 ボランティア活動とは、自発的な意思に基づき、他人や社会に貢献する行為といわれている。本授業では、ボランティア活動を通じて、年齢や考え方の異なる人々との交流や社会とのつながりを学び、自己の成長、発展につなげていくことを目的とする。 《到達目標》 1. ボランティアの実践を行うことができる。 2. ボランティア活動を通じて、年齢や考え方の異なる人々との交流や社会とのつながりを学び、自己の成長、発展につなげ自立した生活を送ることができる。						
講義計画・準備内容 《講義計画》 例年、本学には地域より様々なボランティア活動の依頼があるが、その他にも自らできるボランティアを積極的に見つけ、各自で参加申し込みを行い活動すること。 参考として、2015年度に本学に依頼のあった活動を示す。 <ul style="list-style-type: none"> ・函館ハーフマラソンでのボランティア ・地域や福祉施設イベントでのボランティア ・子供を対象とした体験学習でのボランティア など 《授業外に行うべき学習（予習・復習、準備学修等）》 予習：ボランティア活動の意義を考え、各自で目的を設定すること。 復習：ボランティア活動へ参加した後、各自の行動についての反省点・改善点等をまとめること。 《標準学修時間の目安》 1回の報告書（レポート）作成に1～2時間程度の学修が必要になる。						
使用教科書						
参考書						
評価方法 <ul style="list-style-type: none"> ・ボランティア活動へ1年間に4回以上参加し、必要書類およびレポートを提出した者に対して単位を与える。 ・ボランティアの参加回数およびレポート内容から総合的に評価する。 						
その他						

科目名		教員名	配当年次	期間	形態	単位数
被服学	09250	横井由利子	1	前期	講義	1
授業目標・到達目標 《授業目標》 被服学は、衣生活すなわち人間の生活の中で、被服の存在はどうあるべきかを追求していく学問である。生活における人間と被服との永く深い関係をふまえ、快適な衣生活を保持するために必要な着装のし方、被服を構成する被服材料についてや、被服管理のし方、自分なりの被服計画のたて方などを学び、これからの衣生活のありかたについて考えていく。 《到達目標》 1. 被服の起源と役割、被服の類型について理解し、説明できる。 2. 現代の衣生活と対比させながら、衣生活の変遷について考察し、まとめることができる。 3. 被服材料としての繊維、糸、布地等の種類や特徴、性質について理解を深め説明できる。 4. 新しい被服材料や、仕上げ加工の特徴について理解し、説明できる。 5. 保健衛生を考慮した被服の着装について理解し、活用できる。 6. 社会生活を送る上での適切な被服の着装について理解し、活用できる。 7. 素材、形、サイズなど既製の衣料品の購入時に必要なポイントを説明できる。 8. 被服の手入れや保管など、被服管理のし方について理解し、活用できる。 9. 自分なりの被服生活の計画を立てることができる。 10. 現代の衣生活の問題点を探り、好ましい衣生活のあり方を考え、まとめることができる。						
講義計画・準備内容 《講義計画》 第1回 被服と生活（人間と被服・被服の起源と役割） 第2回 被服と生活（被服の類型・被服と衣生活） 第3回 衣生活の変遷（民族と衣服） 第4回 衣生活の変遷（日本の衣生活） 第5回 被服の材料（繊維・糸・布地） 第6回 被服の材料（新しい被服材料） 第7回 被服の材料（被服材料の加工） 第8回 被服の着装（保健衛生と着装） 第9回 被服の着装（社会生活と着装） 第10回 被服の着装（社会生活と着装） 第11回 被服の着装（被服の選択と購入） 第12回 被服の管理（被服の手入れと保管） 第13回 被服の管理（被服の手入れと保管） 第14回 被服の管理（被服生活の計画） 第15回 衣生活の現状と今後のあり方（家庭生活の変化と生活意識の変化・これからの衣生活） 《授業外に行うべき学習（予習・復習、準備学習等）》 テキストを使用せず授業内容に関するプリント等を配布するので、毎回これらをもとにシラバスの《授業計画》と照合しながら授業内容を確認し、まとめた自分なりのノートを作成すること。 《標準学修時間の目安》 1回の講義あたり予習・復習を含めて2時間の学修が必要である。						
使用教科書 なし						
参考書 <ul style="list-style-type: none"> ・シリーズ<生活科学>衣服学,島崎恒蔵・佐々井啓編,朝倉書店 ・生活科学シリーズ① 衣生活論,阿部幸子他著,同文書院,ISBN4-8103-1170-8 ・シリーズ<生活科学>衣生活学,佐々井啓編,朝倉書店 ・衣生活論,中島利誠編著,光生館 ・服飾教本,小川安朗著,光生館 ・衣服と健康の科学,日本家政学会被服衛生学部会編,丸善株式会社 						
評価方法 授業への参加姿勢と授業態度、筆記試験により評価する。						
その他 随時作成した資料を活用した授業を展開する。 ノートをしっかりとること（把握した学習内容等を自分の言葉でまとめる）。						

科目名		教員名	配当年次	期間	形態	単位数
被服製作実習	09350	横井由利子	1	後期	実験・実習	1
授業目標・到達目標 《授業目標》 各種の基礎的な縫い方の実習や、日常用いる簡単な物の製作を通して、採寸、型紙の作成、裁断、縫製等、被服製作に必要な基礎的な技術を習得する。 《到達目標》 1. 手縫いやミシン縫いで2枚以上の布を縫い合わせることができる。 2. 布がずれないようにしたり、形を整えるためのしつけをすることができる。 3. 開口部やあきのしまつのための縫い方ができる。 4. 縫い代端がほつれないように、手縫いやミシン縫いで縫い代端の始末ができる。 5. まつり縫い、千鳥ぐげができる。 6. 用途に応じたボタン、スナップ、かぎホックのつけ方ができる。 7. 基礎縫いを応用して、小物等を製作できる。 8. 自分好みのエプロンを製作できる。 9. 実習で学んだことや、自分の力量を考慮して自由作品を製作することができる。						
講義計画・準備内容 《講義計画》 第1回 被服製作実習について 第2回 基礎縫いⅠ 縫合する（手縫い、ミシン縫い） 第3回 基礎縫いⅠ 開口部やあきのしまつ 第4回 基礎縫いⅠ 縫い代端のしまつ 第5回 基礎縫いⅠ まつり縫い、千鳥ぐげ 第6回 基礎縫いⅡ ボタンの付け方 第7回 基礎縫いⅡ スナップやかぎホックの付け方 第8回 基礎縫いの応用製作 第9回 基礎縫いの応用製作 第10回 エプロンの製作 採寸、型紙の作成 第11回 エプロンの製作 裁ち方（用布の見積もり） 第12回 エプロンの製作 縫製 第13回 エプロンの製作 縫製 第14回 自由製作 第15回 自由製作 《授業外に行うべき学習（予習・復習、準備学習等）》 第1回 実習に必要な用具や事柄について説明するので、次回からの製作実習へ備え、準備をしっかりとすること。 第2回～第15回 前回の授業で実習したことは、次回までにやりとげておくこと。 欠席及び用具類等の準備不足は、次回からの実習に響くので製作へ向けての取り組みをしっかりとさせ、作品を完成させること。 《標準学修時間の目安》 1回の作品作成に1～2時間程度の学修が必要となる。						
使用教科書 なし						
参考書 なし						
評価方法 授業への参加姿勢と実習態度、実習で製作した作品の提出を総合して評価する。						
その他 随時資料及びプリント等を配布し、活用する。						

科 目 名		教 員 名	配当年次	期 間	形 態	単 位 数
公 衆 衛 生 学	01110	鈴 木 英 悟	2	前 期	講 義	2
授業目標・到達目標 《授業目標》 公衆衛生学とは、地域社会の組織的な努力を通じて、疾病を予防し、寿命を延ばし、健康と活力を増進するための科学と技術であると定義されている。本授業では、序論として予防医学とは何か、あるいは健康とはどのようなことを指すのかについて解説する。その後、疫学や保健統計などの公衆衛生学に関する基礎、母子保健から老人保健までの各ライフステージにそって、健康上の問題点や公衆衛生対策を説明する。また、これからの栄養士にとって特に必要な生活習慣病対策や健康づくりに関しては重点的に講義を行なう。 《到達目標》 1. 健康に関する概念、健康増進の考え方について説明できる。 2. 人口に関する統計より、わが国の健康レベルの現状について説明できる。 3. 感染症に関して、感染源、感染経路、感受性および感染症に対する予防対策について説明できる。 4. 地球規模の環境問題について説明できる。 5. 公害（大気汚染、水質汚染）、廃棄物処理の問題について説明できる。 6. 地域、母子、学校、職場における健康管理の仕組みについて説明できる。						
講義計画・準備内容 《講義計画》 第1回 公衆衛生とは（公衆衛生学の目的と意義） 第2回 社会と健康（公衆衛生学の概念・歴史、健康の概念・定義） 第3回 環境と健康（環境汚染、環境衛生） 第4回 健康・疾病・行動に関わる統計① 第5回 健康・疾病・行動に関わる統計② 保健統計 第6回 健康状態、疾病の測定と評価①（疫学の概念） 第7回 健康状態、疾病の測定と評価感染症②（バイアスと交絡） 第8回 行動科学と食行動変容 第9回 情報社会におけるコミュニケーション 第10回 生活習慣の現状と対策①（身体活動・運動、睡眠、休養、ストレス） 第11回 生活習慣の現状と対策②（喫煙行動、飲酒行動、口腔保健） 第12回 主要疾患の疫学と予防対策①（生活習慣の概念、がん、循環器疾患） 第13回 主要疾患の疫学と予防対策② 第14回 保健・医療・福祉・介護の制度① 第15回 保健・医療・福祉・介護の制度② まとめ 《授業外に行うべき学習（予習・復習、準備学習等）》 復習：講義で進めた範囲をテキストをもとに復習し、ノートを整理しておくこと。 予習：次回行う授業内容をテキスト等を活用し、その中からキーワードを抽出しまとめておくこと。 《標準学修時間の目安》 次回の講義までに予習・復習を含めて4時間の学修が望ましい。						
使用教科書 公衆衛生学 第五版 後藤政幸他 ISBN978-4-8103-1436-6						
参考書 なし						
評価方法 授業内提出物および定期試験（筆記）の結果により評価を行なう。						
その他 なし						

科目名		教員名	配当年次	期間	形態	単位数
解剖生理学実験	02310	澤 辺 桃 子	2	前期	実験・実習	1
授業目標・到達目標 《授業目標》 人体の構造と機能について講義や教科書で学んだことを基に、自ら積極的に身体を動かし、実験や標本観察を通して、系統的な学習を行う。 各実験における基礎的技術の習得および観察力と考察力を養い、ヒトの健康維持・増進や生活習慣病の予防・治療などと結びつけた理解を深める。 《到達目標》 1. 人体の構造と機能について、図示しながら系統的に説明できる。 2. 感覚器の個人差について理解する。 3. 消化器系の臓器および関連する酵素について詳細な説明ができる。 4. 人体を構成する組織の細胞および血液細胞の特徴を説明できる。 5. 栄養指導を想定し、人体の構造と機能、主な疾病、栄養素との関連について図示しながら説明できる。						
講義計画・準備内容 《講義計画》 第1回 オリエンテーション 第2回 実験1 消化に関する実験（1）唾液による消化 第3回 実験2 消化に関する実験（2）胃液・膵液による消化 第4回 実験3 感覚に関する実験（1）重量感覚 第5回 実験4 感覚に関する実験（2）味覚の分布と閾値 第6回 実験5 感覚に関する実験（3）味覚の相乗効果と対比現象 第7回 実験6 身体計測の実験 第8回 実験7 顕微鏡を用いた細胞の観察 第9回 実験8 血液に関する実験（1）血液標本の作製および観察 第10回 実験9 血液に関する実験（2）赤血球の浸透圧抵抗の観察 第11回 実験10 人体模型の観察 第12回 実験11 ラットの解剖（1）解剖実習と臓器の採取 第13回 実験12 ラットの解剖（2-1）臓器の観察 第14回 実験13 ラットの解剖（2-2）臓器の観察 第15回 実験14 組織標本の観察 《授業外に行うべき学習（予習・復習、準備学習等）》 予習は、予め配布する実験テキストを読み、実験内容を理解しておく。復習は、各実験内容ごとに示す課題に対する回答を含めた内容にて実験レポートを作成する。各実験項目において、1年次の解剖生理学（講義）で使用した教科書の該当箇所を見直しておくことを準備学習とする。 《標準学修時間の目安》 1回のレポート作成に1～2時間程度の学修が必要となる。						
使用教科書 教科書は使用せず、講義毎に配布するプリントを実験テキストとする。						
参考書 1年次の解剖生理学（講義）で使用した教科書						
評価方法 実験に対する積極性、実験レポートの内容を総合して評価する。						
その他 講義日程の都合上、実験の順番が変更になることがある。第1回目の授業で行うオリエンテーション時に予定表を配布するので、確認すること。 実験室内での飲食は禁止。実験用白衣と専用の上履きを着用すること。						

科目名		教員名	配当年次	期間	形態	単位数
食品加工学	03111	高橋 是太郎	2	後期	講義	2
授業目標・到達目標 《授業目標》 栄養士として様々な角度から食を通じた栄養指導を行うためには、加工食品がどのように製造され流通しているのかを正しく知っていなければならない。食品の加工と貯蔵は密接な関係にあることを理解し、加工の原理・方法、加工・流通過程での成分、品質の変化に対する基礎知識を整理して身に付ける。 《到達目標》 1. 食品劣化と水分活性の関連を実際の応用例を挙げながら説明できる。 2. 水分活性との関連で食品加工の貯蔵原理を説明できる。 3. ゲル化食品について成分との関連で加工原理を説明できる。 4. 食品加工の新技术の原理の概要を説明できる 5. 酵素的褐変、非酵素的褐変（アミノカルボニル反応、ストレッカー分解、カラメル化、アスコルビン酸の褐変）についてその特長を記述することができる。 6. 包材の特徴から缶詰、びん詰、レトルト食品の長所と短所を説明できる。 7. 農産物、畜産物、水産物に関連する加工食品の製造原理の概要を解説できる。						
講義計画・準備内容 《講義計画》 第1回 食品加工の目的、食品の保蔵（食品と微生物、水分活性、乾燥、塩蔵・糖蔵、酢漬け、くん煙） 第2回 食品の保蔵（低温、加熱、CA貯蔵、MA貯蔵） 第3回 食品加工の操作（物理的操作、化学的操作、生物学的操作） 第4回 食品の包装、食品加工の新技术（缶詰、びん詰、レトルト食品、エクストルーダー、超臨界ガス、バイオテクノロジー） 第5回 食品加工と成分変化、安全性、品質表示（たんぱく質・デンプン・脂質の変性・劣化、食品添加物、食品表示） 第6回 農産加工（穀類、いも類、豆類、野菜） 第7回 畜産加工（畜肉製品、乳製品、卵製品） 第8回 水産加工（乾製品、塩蔵品、ねり製品、調味加工食品） 第9回 発酵食品（酒類、味噌、醤油、食酢） 第10回 調味料、嗜好食品（調味料、甘味料、嗜好飲料類） 第11回 インスタント食品、食用油脂（アルファーマイ、冷凍食品、レトルト食品、食用油脂の精製・加工） 第12回 加工関連問題の演習（まとめとドリル）① 第13回 加工関連問題の演習（まとめとドリル）② 第14回 加工関連問題の演習（まとめとドリル）③ 第15回 加工関連問題の演習（まとめとドリル）④ 《授業外に行うべき学習（予習・復習、準備学習等）》 テキストを指定していないので、授業中に配布される資料或いは授業中に紹介される図書館に備えてある参考書によって復習を行うと内容が深まり、理解しやすくなる。 《標準学修時間の目安》 1回の講義あたり予習・復習を含めて4時間の学修が必要である。						
使用教科書 Nブックス 改訂 食品加工学 菅原龍幸 編著 建帛社 ISBN：978-4-7679-0454-2						
参考書 新版食品加工学概論、國崎直道・川澄敏幸編著、同文書院、ISBN978-4-8103-1371-0 (2205円)						
評価方法 定期試験 (80%) および学習姿勢あるいはレポート (20%) により総合評価する。						
その他 1年次で学んだ食品学を復習すると理解しやすい。						

科 目 名		教 員 名	配当年次	期間	形態	単位数																
臨床栄養学概論	04310	田村堅吾	2	前期	講義	2																
授業目標・到達目標 《授業目標》 古来より「医食同源」という言葉があるように医療と食物の関わりについては古くからのべられているが、とくに臨床面において食事療法や栄養管理に関する領域では、これらが適切に行なわれることが治療に直結する重要な問題となっている。近年、臨床栄養の分野の進歩は著しく、また各医療機関ではいろいろな職種からなる栄養サポートチームが組織され、栄養士もその一員として活躍する場となっている。さらに栄養管理の領域は予防医学や在宅医療などの介護の面にまで広がっており、今後ますますその必要性が増してくるものと思われる。 臨床栄養学では、病的状態における病態を正しく理解し、さらに栄養状態との関係を明確にして、それに基づいて栄養管理を適確に行なうための基礎的な知識を得ることを目的としている。そのために病態生理学や栄養生理学及びそれらには付随するものとして臨床検査や栄養投与の方法などについて学ぶことが必要である。 《到達目標》 次の各項目を習得し、実務に際して応用ができるようになること。 1. 臨床検査の項目とその意義について 2. 栄養補給法の種類とその適応について 3. 栄養評価の実際 4. 次の各疾患における病態とそれに対する栄養管理について ①代謝性疾患……糖尿病、痛風、肥満症及び瘦（そう） ②動脈硬化症、脂質異常症 ③循環器疾患……高血圧症、心不全、虚血性心疾患 ④消化器疾患……胃及び腸疾患、肝疾患、膵疾患 ⑤腎疾患……腎炎、ネフローゼ ⑥血液疾患……貧血 ⑦脳血管疾患……脳内出血、脳梗塞 ⑧新生児における先天性代謝異常 5. 手術後における栄養管理について																						
講義計画・準備内容 次の各項目について教科書及びプリントを用いて講義を行なう。 《講義計画》 <table border="0"> <tr> <td>第1回 臨床栄養学序論、臨床検査概論</td> <td>第8回 腎疾患</td> </tr> <tr> <td>第2回 栄養補給法、栄養アセスメント（栄養評価）</td> <td>第9回 消化器、肝及び膵疾患</td> </tr> <tr> <td>第3回 保健機能食品</td> <td>第10回 中枢神経及び運動器疾患</td> </tr> <tr> <td>第4回 糖尿病</td> <td>第11回 血液及び内分泌疾患</td> </tr> <tr> <td>第5回 肥満・るい瘦・痛風</td> <td>第12回 膠原病・アレルギー疾患</td> </tr> <tr> <td>第6回 高脂血症・動脈硬化症</td> <td>第13回 感染症</td> </tr> <tr> <td>第7回 高血圧症・心疾患</td> <td>第14回 小児及び母性に関する臨床栄養</td> </tr> <tr> <td></td> <td>第15回 外科療法と臨床栄養</td> </tr> </table> 《授業外に行うべき学習（予習・復習、準備学習等）》 授業前にテキストを読み、次の講義の内容を大まかに把握し、復習はノート整理をきちんと行い、理解を確実にして重要語句を覚える。 《標準学修時間の目安》 1回の講義あたり予習・復習を含めて4時間の学修が必要である。							第1回 臨床栄養学序論、臨床検査概論	第8回 腎疾患	第2回 栄養補給法、栄養アセスメント（栄養評価）	第9回 消化器、肝及び膵疾患	第3回 保健機能食品	第10回 中枢神経及び運動器疾患	第4回 糖尿病	第11回 血液及び内分泌疾患	第5回 肥満・るい瘦・痛風	第12回 膠原病・アレルギー疾患	第6回 高脂血症・動脈硬化症	第13回 感染症	第7回 高血圧症・心疾患	第14回 小児及び母性に関する臨床栄養		第15回 外科療法と臨床栄養
第1回 臨床栄養学序論、臨床検査概論	第8回 腎疾患																					
第2回 栄養補給法、栄養アセスメント（栄養評価）	第9回 消化器、肝及び膵疾患																					
第3回 保健機能食品	第10回 中枢神経及び運動器疾患																					
第4回 糖尿病	第11回 血液及び内分泌疾患																					
第5回 肥満・るい瘦・痛風	第12回 膠原病・アレルギー疾患																					
第6回 高脂血症・動脈硬化症	第13回 感染症																					
第7回 高血圧症・心疾患	第14回 小児及び母性に関する臨床栄養																					
	第15回 外科療法と臨床栄養																					
使用教科書 栄養・健康科学シリーズ 臨床栄養学（改訂第4版），糸川嘉則・岩崎良文編，南江堂， ISBN978-4-524-23584-1																						
参考書 なし																						
評価方法 筆記試験および受講態度で評価する。																						
その他 なし																						

科目名		教員名	配当年次	期間	形態	単位数
栄養生化学実験	04211	沼田卓也	2	後期	実験・実習	1
授業目標・到達目標 《授業目標》 栄養生化学実験では、食品中の様々な栄養素の分析やその化学的性質を調べる実験、栄養素が体内でどのように代謝されているのか調べる実験、酵素の性質に関する実験などを行う。これらを通じて、栄養士として必須の栄養学や生化学などで学んだ知識を、より深く理解し、身につける。 《到達目標》 1. 実験器具の名称を覚え、それらを正しく使用することができる。 2. 酵素の性質や調節の仕組みを理解し、説明できる。 3. 栄養素の代謝過程について理解し、説明できる。 4. 栄養素がどのように消化・吸収されるか理解し、説明できる。 5. 食品中の各種成分の検出法および定量法の原理を理解し、正しく実施することができる。 6. 実験結果を整理して、レポートにまとめることができる。						
講義計画・準備内容 《講義計画》 第1回 オリエンテーション 第2回 酵素の性質に関する実験 第3回 酵素反応の調節に関する実験 第4回 糖質の代謝に関する実験 第5回 褐変に関する実験 第6回 食品の色素成分に関する実験 第7回 脂質の化学的試験法 第8回 脂質の消化に関する実験 第9回 糖質の消化に関する実験 第10回 タンパク質の変性および消化に関する実験 第11回 ビタミンの検出 第12回 ビタミンCの定量 第13回 ミネラルの検出 第14回 カルシウムの定量 第15回 DNAの抽出と分析 《授業外に行うべき学習（予習・復習・準備学習等）》 予習：配布したプリントを読んでおく。分からないところは調べておく。 復習：実験についてのレポートを作成する。 《標準学修時間の目安》 1回のレポート作成に1～2時間程度の学修が必要となる。						
使用教科書						
参考書 ・イラスト生化学入門,相原英孝他,東京教学社 ・Nブックス食品学I,菅原龍幸・福澤美喜男編著,建帛社 ・Nブックス 改訂栄養学総論,林 淳三、高橋徹三著,建帛社						
評価方法 レポート内容(70%)、学習姿勢(30%)により総合評価する。						
その他 教科書は使用せず、講義毎にプリントを配布する。						

科目名		教員名	配当年次	期間	形態	単位数
臨床栄養学実習	04410	木幡恵子	2	後期	実験・実習	1
授業目標・到達目標 《授業目標》 入院時の食事は、医療の一環として提供されるべきものであり、それぞれ患者の病状に応じて必要とする栄養量が与えられ、食事の質の向上と患者サービスの改善を目指して行われるべきものである。これらことから傷病者の病態や栄養状態の特徴に基づいて、適切な栄養管理を行うことができる技術を身につけることが実習目的である。 《到達目標》 1. 一般治療食の献立を常食から展開して作成することができる。 2. 一般治療食の内容、形態等を理解し、実際に作ることができる。 3. 調乳、離乳食の内容、形態を理解し、実際に作ることができる。 4. 高齢者食の内容、形態を理解し、実際に作ることができる。 5. 各治療食の内容、形態を理解し、実際に作ることができる。 6. 治療食の献立を常食から展開して作成することができる。						
講義計画・準備内容 《講義計画》 第1回 一般治療食献立作成（常食からの展開） 第2回 流動食（実習1） 第3回 常食・軟食（実習2） 第4回 治療食献立作成（常食から各治療食への展開） 第5回 調乳・離乳食（実習3） 第6回 高齢者食（実習4） 第7回 減塩食①（実習5） 第8回 減塩食②（実習6） 第9回 貧血食（実習7） 第10回 特別用途食品（実習8） 第11回 糖尿病食（実習9） 第12回 膵臓疾患食（実習10） 第13回 腎臓疾患食（実習11） 第14回 検査食・経腸栄養剤（実習12） 第15回 高齢者の生理機能 消化・腎・排泄系について 《授業外に行うべき学習（予習・復習、準備学習等）》 予習：配布済み資料を熟読しておく。 復習：提示した課題に取り組み不明点等があればそれを解消しておく。 《標準学修時間の目安》 1回のレポート作成に1～2時間程度の学修が必要となる。						
使用教科書 なし						
参考書 <ul style="list-style-type: none"> ・栄養食事療法必携,中村丁次,医歯薬出版 ・食品成分表2014,香川芳子,女子栄養大学出版部 ・調理のためのベーシックデータ,松本伸子,女子栄養大学出版部 ・栄養健康・科学シリーズ 臨床栄養学,糸川嘉則他,南江堂 ・栄養指導論,相川りゑ子他,建帛社 						
評価方法 課題レポートおよび学習姿勢により評価する						
その他 臨床栄養学実習ファイルを配布する						

科目名		教員名	配当年次	期間	形態	単位数
公衆栄養学概論	05120	庭 亜子	2	後期	講義	2
授業目標・到達目標 《授業目標》 公衆栄養学は、「適切な食事・栄養によって集団及び個人の健康を維持・増進し、疾病を予防するための学問」と言える。本講義では、公衆栄養学の基礎知識と公衆栄養活動の実態、その基本事項を学習する。 《到達目標》 1. 日本人の健康・栄養問題について、その現状と課題を説明できる。 2. 日本人の食事摂取基準を理解し、献立作成に活かすことができる。 3. 公衆栄養プログラム計画の流れを説明できる。 4. 現在、日本で取り組まれている主な公衆栄養プログラムについて、その概要を解説できる。						
講義計画・準備内容 《講義計画》 第1回 公衆栄養学の概念 第2回 公衆栄養活動の歴史 第3回 わが国の健康・栄養問題の現状と課題①（国民栄養の現状と課題、高齢社会と健康・栄養問題） 第4回 わが国の健康・栄養問題の現状と課題②（食生活の変遷・食料をめぐる現状と課題） 第5回 わが国の栄養行政・栄養関連法規 第6回 諸外国の栄養状況と施策 第7回 栄養疫学の概要 第8回 日本人の食事摂取基準 第9回 公衆栄養アセスメント 第10回 公衆栄養マネジメント 第11回 公衆栄養プログラム計画 第12回 公衆栄養プログラムの目標設定 第13回 公衆栄養プログラムの実施・評価 第14回 わが国の栄養施策・関連法規 第15回 まとめ 《授業外に行うべき学習（予習・復習、準備学修等）》 予習：各回、事前にテキストを読んで講義に臨むこと。不明な用語等を事前に確認すること。 復習：教科書および配布プリントについて各自ノートにまとめること。 《標準学修時間の目安》 次回の講義までに予習・復習を含めて4時間の学修が望ましい。						
使用教科書 健康・栄養科学シリーズ『公衆栄養学』改訂第5版，南江堂，ISBN：978-4-524-26166-6						
参考書 国民衛生の動向，厚生統計協会，厚生統計協会 日本人の食事摂取基準(2015年版)，第一出版，ISBN：9784804113128						
評価方法 出席状況(20%)、課題(10%)、定期試験(70%)により評価する。						
その他						

科目名		教員名	配当年次	期間	形態	単位数
栄養指導実習Ⅱ	05410	中村優美	2	前期	実験・実習	1
授業目標・到達目標 《授業目標》 栄養指導論等で修得した基礎知識および専門知識を展開させ、指導技術を演習・カウンセリング等で学習することにより、指導を必要としている人に対して、その問題解決の援助ができる力を身につけることが実習の目的である。 また、治療食の実際、つまり常食からの各展開食の理解を深めるため、給食管理実習室にてそれらの技術を修得する。 《到達目標》 1. 栄養事務に関する帳票類の説明ができる。 2. 食事調査の方法を理解し実際に活用することができる。 3. 常食の適な食品構成・量が説明でき指導することができる。 4. 脂質異常症の食事療法の原則を理解し献立を作成することができる。 5. 糖尿病の栄養指導の概要を理解し報告書を作成することができる。 6. 糖尿病性腎症、腎臓病の食品構成を作成することができる。 7. 治療食の形態や献立作成方法等を理解し、実際に作るすることができる。						
講義計画・準備内容 《講義計画》 第1回 栄養アセスメントについて 第2回 一般治療食の実際（常食・全粥食・五分粥食・三分粥食・流動食・ミキサー食） 第3回 特別治療食の実際（常食・減塩食・糖尿病食・腎臓疾患食・膵臓疾患食・きざみ食） 第4回 体質判定 第5回 栄養指導用リーフレット作成 第6回 帳票類について、食事摂取頻度調査法 第7回 食事思い出し法、食品構成、食品の配分 第8回 脂質異常症の指導 第9回 糖尿病集団栄養指導 第10回 糖尿病初回個人栄養指導 第11回 糖尿病2回目以降個人栄養指導 第12回 糖尿病性腎症の指導 第13回 腎臓病の指導 第14回 調乳指導 第15回 高齢者の栄養指導 《授業外に行うべき学習（予習・復習、準備学習等）》 予習：配布済み資料を熟読しておく。 復習：提示された課題に取り組み不明点等を解消しておく。 《標準学修時間の目安》 1回のレポート作成に1～2時間の学修が必要となる。						
使用教科書 糖尿病食事療法のための食品交換表，日本糖尿病学会編，文光堂ISBN978-4-8306-6046-7 糖尿病性腎症の食品交換表，日本糖尿病学会編，文光堂，ISBN978-4-8306-6023-8 腎臓病食品交換表，中尾俊之他，医歯薬出版，ISBN978-4-263-70557-5 食品成分表2014，香川芳子，女子栄養大学出版部，ISBN978-4-7895-1013-4 調理のためのベーシックデータ，松本伸子，女子栄養大学出版部，ISBN 978-4-7895-0317-4						
参考書 ・栄養食事療法必携，中村丁次，医歯薬出版 ・栄養健康・科学シリーズ 臨床栄養学，糸川嘉則他，南江堂 ・栄養指導論，相川りゑ子他，建帛社 ・給食の運営 給食計画・実務論，富岡和夫、医歯薬出版						
評価方法 課題レポートおよび学習姿勢により評価する。						
その他 栄養指導実習Ⅱファイルを配布する。						

科目名		教員名	配当年次	期間	形態	単位数
給食管理実習Ⅱ	06310	鈴木 真由美	2	前期	実験・実習	1
授業目標・到達目標 《授業目標》 給食管理実習Ⅱは、特定給食施設における給食の運営と実務に関連する基礎的事項を習得するために、学内の給食施設を利用し、グループ編成による各班が栄養管理・作業管理・食材管理・衛生管理・経営管理の業務を交替に行い、大量調理と食事サービス業務などについて模擬的に実習を行うものである。これにより校外実習に連携させ、教育効果を高めることを目的にしている。 《到達目標》 1. 給食管理実習Ⅲの特定給食施設実習先の種類と特性について説明できる。 2. 対象者に対する食事計画ができる。 3. 立案した食事計画に沿って、栄養管理、作業管理、食材管理、衛生管理、経営管理ができる（給食の提供）。 4. 実施した食事計画の評価ができる。 5. 形式としてグループ活動が多くなることから、人間関係において協調性を培うことができる。						
講義計画・準備内容 《講義計画》 第1回 実習概要、班編成 第2回 給食計画の作成 第3回 各班毎に特定給食施設給食の献立作成（1） 第4回 各班毎に特定給食施設給食の献立作成（2） 第5回 各班毎に給食の提供ならびに栄養管理、作業管理、食材管理、衛生管理、経営管理の実施（1） 第6回 各班毎に給食の提供ならびに栄養管理、作業管理、食材管理、衛生管理、経営管理の実施（2） 第7回 各班毎に給食の提供ならびに栄養管理、作業管理、食材管理、衛生管理、経営管理の実施（3） 第8回 各班毎に給食の提供ならびに栄養管理、作業管理、食材管理、衛生管理、経営管理の実施（4） 第9回 各班毎に給食の提供ならびに栄養管理、作業管理、食材管理、衛生管理、経営管理の実施（5） 第10回 各班毎に給食の提供ならびに栄養管理、作業管理、食材管理、衛生管理、経営管理の実施（6） 第11回 各班毎に給食の提供ならびに栄養管理、作業管理、食材管理、衛生管理、経営管理の実施（7） 第12回 各班毎に給食の提供ならびに栄養管理、作業管理、食材管理、衛生管理、経営管理の実施（8） 第13回 各班毎に給食の提供ならびに栄養管理、作業管理、食材管理、衛生管理、経営管理の実施（9） 第14回 各班毎に給食の提供ならびに栄養管理、作業管理、食材管理、衛生管理、経営管理の実施（10） 第15回 施設・設備整備／まとめ 実習報告書の作成 《授業外に行うべき学習（予習・復習、準備学習等）》 各班が設定した対象施設・対象者・テーマのもと、給食の提供を行うため、授業外での栄養計算、発注作業、調理手順・作業工程表の作成、作業分担の決定等はもちろん、班員のみで行う事前の料理試作やミーティングは計画性をもって必ず実施すること。 《標準学修時間の目安》 1回の報告書（レポート）作成に1～2時間程度の学修が必要となる。						
使用教科書 給食の運営給食計画・実務論，富岡和夫，医歯薬出版，978-4-263-70436-3 五訂増補 食品成分表〈2015〉，香川 芳子監修，女子栄養大学出版部，978-4-7895-1015-8						
参考書 日本人の食事摂取基準，厚生労働省「日本人の食事摂取基準」策定検討会報告書〈2015年版〉，第一出版。 「食事バランスガイド」を活用した栄養教育・食育実践マニュアル，日本栄養士会監修，第一出版。 実習ノートおよび参考資料等は配布。						
評価方法 試験成績、授業への参加状況、レポート課題、提出物の内容、給食チケットの使用状況 等を総合して評価する。						
その他 自己管理に留意すること。特に給食提供の際は、体調や身支度に十分な配慮をすること。 また、グループワークが多くなるので、各自、責任と誠意をもって実習すること。						

科目名		教員名	配当年次	期間	形態	単位数
給食管理実習Ⅲ	06410	鈴木真由美・庭 亜子 清水 陽子・佐賀 暁美	2	通年	実験・実習	1
授業目標・到達目標 《授業目標》 給食管理実習Ⅲは、栄養士養成に必要な実習単位であり、各特定給食施設においてその運営方法や給食現場の実践を体験する。利用者に対し必要な食事の計画や調理を含めた給食サービス提供に関する技術を修得できることを目的としている。 《到達目標》 1. 事前指導においては、各実習先の概要について理解し、施設利用者に適応した食事計画（1週間の献立）を作成することができる。 2. 当該実習においては、実習先施設の給食業務、食事計画また、給食サービスなどの実際を体得する。 3. 事後指導では、各実習先の実習概要についてまとめ、報告することができる。						
講義計画・準備内容 《講義計画》 下記の内容で実施する。 1. 給食管理実習Ⅲ（校外実習）は、事前・事後指導とあわせて実施する。 2. 予定される施設は病院・学校・福祉施設・事業所であり各施設の「給食の運営」について学ぶ。 《実習内容》 1. 関連施設における栄養部門業務全般について、基本的な理解を深める。 2. 献立の立案から配膳に至る一連の作業を学習する。 3. フードサービスの観点からどのような工夫や技術が活用されているかを体験する。 4. 実習施設における食事オーダ管理がどのような体制やシステムで運営されているか見学し、学習する。（食数管理、食事オーダ管理） 5. 特に、特別に複雑な食事内容が要求される施設においては、献立管理や調理作業上、どのように対応しているのかを学習する。 6. 適時・適温配膳についてどのような作業管理が実施され、機器や備品等にどのようなものが活用されているかを確認する。（作業管理、機器、備品管理、温度管理） 7. 衛生管理について、食中毒の予防などの観点から学習する。（衛生管理・衛生教育、危機管理、HACCPなど） 《授業外に行うべき学習（予習・復習、準備学習等）》 校外実習に臨むにあたり、目標とするテーマを掲げる。また事前に取り組んだ学習内容等について十分に確認し理解をしておく。実習後は、実習ノート（ファイル）等を完成させ、実習内容を報告する。 《標準学修時間の目安》 1回の講義あたり1時間程度の予習と報告書（レポート）の作成に1～2時間程度の学修が必要となる。						
使用教科書 給食の運営給食計画・実務論， 富岡和夫， 医歯薬出版， ISBN 978-4-263-70436-3						
参考書 適宜紹介していく。						
評価方法 各実習先の評価、事前・事後指導の出席状況及び課題の提出。						
その他 1. 給食管理実習Ⅲ事前・事後指導を受けること。 2. 実習終了後、事後指導として状況説明および報告をすること。 3. 実習ノート（ファイル）は配布する。 4. 1年次の卒業必修科目、栄養士必修科目の単位をすべて取得していること。 5. 事前課題を指定期日までに完成させていること。						

科目名		教員名	配当年次	期間	形態	単位数
調理実習Ⅲ	06420	庭 亜子	2	前期	実験・実習	1
授業目標・到達目標 《授業目標》 日本料理、西洋料理及び中国料理の献立実習を通して、調理の手法やその理論を食文化的視点から把握する。すなわち各料理の配膳形式、会食形式、食卓作法等の実際のパーティーを企画・実践しながら学び、テーブルマナーを習得する。 《到達目標》 1. 日本料理の基本献立を理解し、実践できる。 2. 日本料理による行事食を企画・実践できる。 3. 西洋料理の献立構成を理解し、各種パーティーを企画・実践できる。 4. 中国料理の献立構成、特殊材料を理解し、中国料理による宴席を企画・実践できる。 5. 同一食材の和風、洋風、中華風の扱い方を実践できる。 6. 各種宴席を企画・実践できる。						
講義計画・準備内容 《講義計画》 第1回 日本料理 (1) 食卓作法・行事食① 第2回 日本料理 (2) 昼食献立 第3回 日本料理 (3) 夕食献立① 第4回 日本料理 (4) 夕食献立② 第5回 日本料理 (5) 行事食② 第6回 西洋料理 (1) ブランチパーティー 第7回 西洋料理 (2) テーブルマナー 第8回 西洋料理 (3) ランチョンパーティー 第9回 西洋料理 (4) ティーパーティー 第10回 西洋料理 (5) ビュッフェパーティー 第11回 中国料理 (1) 中国料理の献立構成 第12回 中国料理 (2) 中国料理の食卓作法① 第13回 中国料理 (3) 中国料理の食卓作法② 第14回 中国料理 (4) 点心 第15回 実習のまとめ 《授業外に行うべき学習(予習・復習、準備学修等)》 予習：実習の目標を設定し、配布する実習プリントに記入の上実習へ臨むこと。事前に実習プリントを読み、不明な箇所について調べておくこと。また、調理作業を進行する際の役割分担や時間配分について考えること。 復習：提出課題に取り組むこと。実習を振り返り、反省点および改善点について実習レポートにまとめること。また、実習ⅠおよびⅡの基礎事項を振り返り、行事食や各種宴席への応用展開について考察すること。 《標準学修時間の目安》 1回の講義あたり1時間程度の予習と、報告書(レポート)作成に1～2時間程度の学修が必要となる。						
使用教科書 手法別・食品別による基礎調理, 乙坂ひで, 峯書房, ISBN: 978-4-89532-007-8 食品成分表2015, 香川芳子, 女子栄養大学出版部, ISBN: 978-4-7895-1015-8 調理のためのベーシックデータ 第4版, 松本伸子, 女子栄養大学出版部, ISBN: 978-4-7895-0317-4						
参考書 コツと科学の調理事典 第3版, 河野友美, 医歯薬出版, ISBN: 978-4-263-70264-2						
評価方法 出席状況(20%)、実習態度(30%)、実習・課題レポート(50%)により評価する。						
その他 実習用の包丁、ノートは指定のものを使用する。 白衣、帽子、パンツ、シューズは常に清潔に管理すること。						

科目名		教員名	配当年次	期間	形態	単位数
フードスペシャリスト論	07110	福田悦子	2	前期	講義	2
授業目標・到達目標 《授業目標》 社会的要請にこたえて登場した「フードスペシャリスト」であるが、このような専門職の養成が必要とされるようになったわが国の食生活背景を学び、その人材が果たすべき役割を正しく理解する必要がある。食の生産・流通と消費者の間であって消費者の健全な食生活に優位な助言、情報を提供することを旨として食に関する専門的知識・総合的な知識を身につけ、健康と快適な食生活・食育・健全な食産業・地域環境にも貢献できるように、広い視野から国民の食生活を支えることができるフードスペシャリストを目標に授業を進める。 《到達目標》 1. フードスペシャリストはどのような専門職であるか、養成校の認定、資格のとり方、業務内容、栄養士との活躍分野の違いを説明できる。 2. 人類の歩みと食物について説明できる。食品加工と保存技術史について説明できる。 3. 世界の食について、手食、箸食、ナイフフォーク食の文化と作法について説明でき、また、世界各地の食事情、宗教と食について説明できる。 4. 日本の食物史について説明できる。 5. 現代日本の食生活を振り返り、戦後の食生活の変化、食行動の変化、消費生活を理解し、説明できる。 6. 食料自給率について理解し、解説できる。 7. 食品産業の役割について説明できる。 8. 食品の品質の規格と表示について説明できる。 9. 食情報と消費者保護について理解を深め説明できる。						
講義計画・準備内容 《講義計画》 第1回 フードスペシャリストとは(フードスペシャリストの概念・フードスペシャリストの業務とその専門性) 第2回 フードスペシャリストの養成と資格(フードスペシャリストの活躍分野・フードスペシャリストの責務) 第3回 人類と食物(人類の歩みと食物) 第4回 人類と食物(食品加工・保存技術史) 第5回 世界の食(食作法・食の禁忌と忌避) 第6回 世界の食(世界各地の食事情) 第7回 日本の食(日本の食物史・食の地域差) 第8回 現代日本の食生活(戦後の食生活の変化・食生活の現状と消費生活・食生活の変化と食産業) 第9回 現代日本の食生活(食料の供給と食料自給率・環境と食) 第10回 食産業の役割(フードシステムと食品産業・食品卸売業と食品小売業) 第11回 食産業の役割(外食産業) 第12回 食品の品質規格と表示(食品の品質規格・表示に関わる法律・JAS法による規格と表示) 第13回 食品の品質規格と表示(食品衛生法による表示・健康増進法による表示・その他の法律による表示・コーデックス規格・フードスペシャリスト協会過去問題解説) 第14回 食情報と消費者保護(食情報の発信と受容・食情報の濫用・食品の情報管理・フードスペシャリスト協会過去問題解説) 第15回 食品の安全(消費者保護の制度・フードスペシャリスト協会過去問題解説) 《授業外に行うべき学習(予習・復習、準備学習等)》 授業前に講義内容を大まかに理解しておく。授業後はテキスト内容を再確認しながら、ノートに要点をまとめる。 《標準学修時間の目安》 1回の講義あたり1時間の予習と3時間の復習が必要となる。						
使用教科書 四訂フードスペシャリスト論, 日本フードスペシャリスト協会編, 建帛社, ISBN978-4-7679-0360-6						
参考書 <ul style="list-style-type: none"> ・(新)現代の調理, 建帛社 ・食物と歴史, レイ・タナヒル, 評論社 ・美味学, 増成隆士・川端晶子, 建帛社 ・食文化論, 吉川誠次他, 建帛社 ・家庭料理の世界, 辰巳芳子, 平凡社 ・四季日本の料理, 講談社 ・食事と健康の科学, 建帛社 ・応用栄養学, 建帛社 						
評価方法 期末筆記試験および授業への参加姿勢と授業態度で評価する。						
その他 関連プリント配布、新聞記事、社会・家庭・経済情報より分りやすく説明伝達。						

科 目 名	教 員 名	配当年次	期間	形態	単位数	
フードコーディネイト論	07120	横 山 陽 子	2	前期	講義	2
授業目標・到達目標 《授業目標》 食の専門家として活躍する場面に於いて、あらゆる角度から「食」に関する基礎知識が備わっていることを期待される。フードスペシャリスト資格試験合格を視野に入れつつ、日本や世界の食文化、歴史、メニュー、マナー、食空間のコーディネイト、プランニング、マネジメント、企画立案等「食」の一般教養と応用を身につける事が目標。 《到達目標》 1. フードコーディネイトの基本理念を説明できる。 2. 日本、中国、西洋料理の「食事の文化」を解説できる。 3. 日本、中国、西洋料理の「食卓のコーディネイト」を解説できる。 4. 日本、中国、西洋料理の「食卓のサービスとマナー」について解説できる。 5. 日本、中国、西洋料理の「メニュープランニング」を説明できる。 6. 「食空間コーディネイト」の用語の説明ができる。 7. 「フードサービスマネジメント」の用語の説明ができる。 8. 食企画の実践コーディネイトの基礎的スキルを説明できる。						
講義計画・準備内容 《講義計画》 第1回 フードコーディネイトの基本理念① 第2回 フードコーディネイトの基本理念②・食事の文化① 第3回 食事の文化② 第4回 食卓のコーディネイト① 第5回 食卓のコーディネイト② 第6回 食卓のサービスとマナー① 第7回 食卓のサービスとマナー② 第8回 メニュープランニング① 第9回 メニュープランニング② 第10回 食空間のコーディネイト① 第11回 食空間のコーディネイト② 第12回 フードサービスマネジメント① 第13回 フードサービスマネジメント② 第14回 食企画の実践コーディネイト① 第15回 食企画の実践コーディネイト②・まとめ 《授業外に行うべき学習（予習・復習、準備学習等）》 予め教科書を読み授業の流れを把握しておく。教科書を見て、配布プリントの空欄の語句を書き込んでおくと良い。授業中は、その語句が合っているかどうかを確かめ、朱で書き込んでおく。各単元の終わりには関連する過去問題をプリントに載せているので、予め自分でやり、授業で解説、解答時に、答え合わせを行い、解説を朱で書き込んでおくと良い。授業後は、プリントの重要項目の語句を中心に復習し、過去問題を見直しておくが良い。 《標準学修時間の目安》 1回の講義あたり、予習・復習を含めて4時間の学修が望ましい。						
使用教科書 三訂フードコーディネイト論, (社) 日本フードスペシャリスト協会編, (株) 建帛社, ISBN978-4-7679-0440-5						
参考書 「フードスペシャリスト資格認定試験過去問題集」(公社) 日本フードスペシャリスト協会編・建帛社発行 「フードスペシャリスト資格認定試験問題集」フードスペシャリスト資格取得対策研究会 [編]・ 株式会社一藝社発行 (毎年、上記の新しい年度の本が短期大学の図書館に入ります。特に新しい年度の「過去問題集」が参考になります。)						
評価方法 期末筆記試験および授業への参加姿勢、授業態度で評価する。						
その他 関連プリント配布。予め配ったプリントは次回必ず持参して下さい。 授業ではパワーポイントを用いますので、特に前方の窓を閉め、ブラインドを下ろします。その為、講義室は空調を使用します。空調の温度調節はこまめに行いますが、多人数で大きな講義室の為、席によって、空調の温度差が出てしまうこともあります。カーディガン、ひざ掛けの持参など、体温調節は各自で行って下さい。						

科目名		教員名	配当年次	期間	形態	単位数
食品官能評価	07130	猪上徳雄	2	前期	講義	3
授業目標・到達目標 《授業目標》 食は毎日の健康に欠かせない。栄養士あるいはフードスペシャリストという食の専門家は、ヒトが食材を食品として口にする重要な流れの関連職場で従事することになる。食品の安全性を確認するには客観的な機器による分析の他に人間の鋭い感覚機能も利用される（官能評価）。人間の感覚は主観的な要素も強いが、機器では十分に測定できないヒトの嗜好性（おいしさ等）と大きく関わる。 主観的になりがちな官能評価を科学的に再現性のある測定方法として認められるために必要な基本的な内容を理解し、具体的なやり方を身に付けることが目的である。 《到達目標》 1. 官能検査の必要性、目的、方法を列挙できる。 2. 官能検査の具体的な実施方法について説明できる。 3. 食品の水分と保存性、外観と色素成分などの概要を説明できる。 4. 食品の鮮度指標のK値、油脂の酸化について説明できる。 5. 食品の粘弾性、破断特性について述べるができる。 6. チキソトロピーやダイラタント流動の具体例を列挙できる。 7. 米、小麦粉の特性を解説できる。 8. 野菜、果実などの植物性食品の成分特性について解説できる。						
講義計画・準備内容 《講義計画》 第1回 官能検査とは（必要性、検査の目的と方法、順序効果、位置効果） 第2回 官能検査の実施法（パネル、検査票の様式） 第3回 官能検査の実施法（集計） 第4回 官能検査の実施法（解析、検定） 第5回 官能検査の演習（評点法） 第6回 官能検査の演習（順位法における演習） 第7回 化学的評価法（食品の品質と成分、水分と保存性、外観と色素成分） 第8回 化学的評価法（糖度、酸度、魚のK値、油脂成分） 第9回 物理的評価法（レオロジー、塑性流動、チキソトロピー、ダイラタント流動） 第10回 物理的評価法（力学模型、食品の粘弾性、破断特性） 第11回 個別食品の鑑別（穀類、豆類） 第12回 個別食品の鑑別（野菜・きのこ） 第13回 個別食品の鑑別（果実類、海藻類） 第14回 フードスペシャリスト資格関連問題の演習（その1） 第15回 フードスペシャリスト資格関連問題の演習（その2） 《授業外に行うべき学習（予習・復習、準備学習等）》 テキストを使用しないので、授業で配布される資料、或いは授業中に紹介される図書館に備え付けてある参考書を参考にして、新しい用語などの理解を深める。復習を中心にノートをもとめると頭の中を整理しやすい。土曜日開講の授業は、主に過去のフードスペシャリスト資格試験を利用した演習を行う。 《標準学修時間の目安》 次回の講義までに予習・復習を含めて、6時間の学修が望ましい。						
使用教科書 なし						
参考書 新版食品の官能評価・鑑別演習（三訂版）,日本フードスペシャリスト協会編,建帛社						
評価方法 最終定期試験の結果のみではなく普段の学習姿勢（予習・復習など）（ドリルにより確認する。）を加味して総合的に評価する。						
その他 1年次で学んだ食品学を復習すると理解しやすい。 テキストは1年次に使用した食品学を使用し、必要なプリントを配布する。 栄養士実力認定試験やフードスペシャリスト資格試験に対応できるような実践的な内容で講義を進める。 土曜日にも授業がある3単位の授業である。						

科目名		教員名	配当年次	期間	形態	単位数
食品流通	07140	横山陽子	2	前期	講義	2
授業目標・到達目標 《授業目標》 栄養士として栄養指導をする場面に於いて、クライアント個々人の消費行動をよく理解する必要がある。また、フードスペシャリストとしても、クライアントの要求を的確に把握する必要がある。そして共に、時流に即した指導、アドバイスをする必要がある。その為にも「食」に携わる専門家として、食品消費に関連する流通の仕組みを理解し、急速に変化してゆくフードビジネスの現状を、的確にとらえる必要がある。フードスペシャリスト資格試験合格を視野に入れ、将来も、刻々と変わりゆく「食」の課題に適切な判断と行動がとれる力を習得することが目標。 《到達目標》 1. 食生活形態の種類を列挙し、その変化について説明できる。 2. 食品消費の変化について解説できる。 3. 食生活とフードマーケティングの変遷について説明できる。 4. 「小売と卸売」の食品流通の特徴について解説できる。 5. 家庭内食を支える食品小売業の種類とその特徴を解説できる。 6. 外食を支える外食産業の変遷と種類、手法について解説できる。 7. 中食を支える中食産業の特徴とシステムについて解説できる。 8. 食品消費に伴う「環境対策」について説明できる。 9. 食品消費に関わる「安全対策」について説明できる。 10. 関連統計の種類を列挙し、その特徴を説明できる。						
講義計画・準備内容 《講義計画》 第1回 食生活の変化①（食生活形態の変化） 第2回 食生活の変化②（食品消費の変化） 第3回 フードマーケティングと食品流通・食生活とフードマーケティング① 第4回 食生活とフードマーケティング② 第5回 食生活とフードマーケティング③ 第6回 食品の流通—小売と卸売—① 第7回 食品の流通—小売と卸売—② 第8回 食品の流通—小売と卸売—③・食品市場と食品流通① 第9回 食品市場と食品流通② 第10回 食品市場と食品流通③ 第11回 食品市場と食品流通④ 第12回 食品市場と食品流通⑤・新しい食品消費の課題・食品消費と環境問題① 第13回 食品消費と環境問題②・食品消費と安全① 第14回 食品消費と安全②・基本関連統計とその解説① 第15回 基本関連統計とその解説②・まとめ 《授業外に行うべき学習（予習・復習、準備学習等）》 予め教科書を読み授業の流れを把握しておく。教科書を見て、配布プリントの空欄の語句を書き込んでおく。授業中は、その語句が合っているかどうかを確かめ、朱で書き込んでおく。各単元の終わりには関連する過去問題をプリントに載せているので、予め自分でやり、授業で解説、解答時に、答え合わせを行い、解説を朱で書き込んでおく。授業後は、プリントの重要項目の語句を中心に復習し、過去問題を見直しておく。 《標準学修時間の目安》 1回の講義あたり、予習・復習を含めて4時間の学修が望ましい。						
使用教科書 新版 食品の消費と流通, (社) 日本フードスペシャリスト協会編, (株) 建帛社発行, ISBN978-4-7679-0364-4						
参考書 「フードスペシャリスト資格認定試験過去問題集」(公社) 日本フードスペシャリスト協会編・建帛社発行 「フードスペシャリスト資格認定試験問題集」フードスペシャリスト資格取得対策研究会 [編]・ 株式会社一藝社発行 (毎年、上記の新しい年度の本が短期大学の図書館に入ります。特に新しい年度の「過去問題集」が参考になります。)						
評価方法 期末筆記試験および授業への参加姿勢、授業態度で評価する。						
その他 関連プリント配布。予め配ったプリントは次回必ず持参して下さい。 授業ではパワーポイントを用いますので、特に前方の窓を閉め、ブラインドを下ろします。その為、講義室は空調を使用します。空調の温度調節はこまめに行いますが、多人数で大きな講義室の為、席によって、空調の温度差が出てしまうこともあります。カーディガン、ひざ掛けの持参など、体温調節は各自で行って下さい。						

科目名		教員名	配当年次	期間	形態	単位数
レクリエーション理論	08150	水落敏博	2	後期	講義	2
授業目標・到達目標 《授業目標》 レクリエーションにおける基本的な支援の基礎（心地良さ、生きる喜び）を理解する。 健康づくり、豊かな社会づくり、環境づくりなど身近な人々を支援する活動・事業を学び、日本レクリエーション協会公認指導者のレクリエーション・インストラクター資格取得に必要な基礎理論を身につける。 《到達目標》 1. レクリエーションインストラクター資格の求める基礎理論を理解することが出来る。 2. あそび心を大切さを理解し、それを表現することができる。 3. ホスピタリティ、アイスブレイキングなどのコミュニケーション技法を活かすことができる。						
講義計画・準備内容 《講義計画》 第1回 オリエンテーション、レクリエーションの意義 第2回 レクリエーション運動を支える制度 第3回 レクリエーションインストラクターの役割 第4回 ライフスタイルとレクリエーション 第5回 少子高齢社会の課題とレクリエーション 第6回 コミュニケーション・ワークⅠ・Ⅱ（ホスピタリティとは、ホスピタリティの示し方） 第7回 レクリエーション事業とは 第8回 事業計画Ⅰ（個々人のアセスメントに基づいたプログラム・応用） 第9回 事業計画Ⅱ（市民を対象とした事業のつくり方とイベントの応用） 第10回 アイスブレイキングⅠ 第11回 アイスブレイキングⅡ 第12回 レクリエーション活動の安全管理Ⅰ 第13回 レクリエーション活動の安全管理Ⅱ 第14回 対象に合わせたレク・ワーク（レク・ワークの基本技術） 第15回 対象に合わせたレク・ワーク（段階的アレンジ法の活用）、まとめ 《授業外に行うべき学習（予習・復習、準備学習等）》 授業にて配布される資料を熟読すると共に、復習をして基礎となる理論をしっかりと身につけること。 授業のほかにも地域社会における様々なレクリエーション活動に目を向けて、レク支援者の活動する姿を通して、レクリエーション活動への理解を深めることが望ましい。 《標準学習時間の目安》 1回の講義あたり予習・復習を含めて4時間の学修が必要である						
使用教科書 なし						
参考書 なし						
評価方法 課題レポートの内容により評価する。						
その他 レクリエーションインストラクター養成教則本に基づき、講義のつど必要に応じてプリント資料を配布する。						

科 目 名		教 員 名	配当年次	期 間	形 態	単 位 数
レクリエーション実技	08250	水 落 敏 博	2	後期	実技	1
授業目標・到達目標 《授業目標》 レクリエーションの様々な現場で必要となるコミュニケーション技法やレクリエーション・ワークの技術を身につける。 地域で開催されるレクリエーション行事・事業に参加することにより、実践的技術を身につけたレクリエーション支援者の資格取得を目指す。 《到達目標》 1. 様々な対象の変化に応じて、支援方法が異なることに気づく。 2. 実技・演習を通して自己を再確認すると共に多様な技法を身につける。 3. ホスピタリティ、アイスブレイキング等の技法で幅広い年齢層、対象場面に対応した基礎的なレクリエーション支援ができる。						
講義計画・準備内容 《講義計画》 第1回 オリエンテーション、作って楽しいクラフト 第2回 ホスピタリティの実際と応用 第3回 散歩の応用・ウォーク・ラリーとは（企画・作図） 第4回 街発見のウォーク・ラリーの実践 第5回 自然が身近になるネイチャーゲーム 第6回 福祉レクリエーションの現場と実際 第7回 様々なレクリエーション・ゲーム 第8回 対象に合わせたレク・ワーク（指導の実際） 第9回 目的に合わせたレク・ワーク（アクティビティの展開方法） 第10回 目的に合わせたレ・ワーク（指導の実際） 第11回 コミュニケーション・ワーク（アイスブレイキングとは） 第12回 コミュニケーション・ワーク（アイスブレイキングの方法） 第13回 レクリエーション・ダンス 第14回 歌のよさを活かすレク・ワーク（レク・ソング） 第15回 みんなで挑戦！チャレンジ・ザ・ゲーム、まとめ 《授業外に行うべき学習（予習・復習、準備学習等）》 授業で学習した基礎的技術を確実に支援技術として表現できることが大切ですので、学習したことを反復練習して支援できる水準まで達するように努力すること。 地域で行われる様々なレクリエーション活動に積極的に参加して、自己技術の向上に努めることが望ましい。 《標準学習時間の目安》 1回の課題レポート作成に2時間程度の学習が必要となる。						
使用教科書 なし						
参考書 なし						
評価方法 実技の理解度や習熟度及び課題レポート評価、製作等に取り組む姿勢や作品により評価する。						
その他 運動できる服装や靴で受講する。 必要に応じてプリント資料を配布する。						

科目名		教員名	配当年次	期間	形態	単位数
生涯スポーツ演習	08251	滝本 貴	2	後期	演習	1
授業目標・到達目標 《授業目標》 地域や学校、施設等で健康づくり、機能のリハビリテーション等レクリエーション現場で楽しめる材料として楽しめる競技を体験する。 福祉の現場で応用できるようルール、実践方法を学習する。 《到達目標》 1. 進行にホスピタリティ・アイスブレイキングの技法を生かすことができる。 2. 共によるこびを分かちあうことができる。						
講義計画・準備内容 《講義計画》 第1回 オリエンテーション 第2回 チャレンジ・ザ・ゲーム（ドリブルリレーなど） 第3回 シャフル・ボード（1） 第4回 シャフル・ボード（2） 第5回 スポーツ・チャンバラ（1） 第6回 スポーツ・チャンバラ（2） 第7回 フライングディスク（1） 第8回 フライングディスク（2） 第9回 インディアカ（1） 第10回 インディアカ（2） 第11回 日レクボール・ディスコン（1） 第12回 日レクボール・ディスコン（2） 第13回 総合指導（1） 第14回 総合指導（2） 第15回 まとめ 《授業外に行うべき学習（予習・復習、準備学習等）》 配布資料に目を通して授業に備える。 レクリエーション活動に積極的に参加して自己を高める。 《標準学修時間の目安》 1回のレポート作成に1～2時間程度の学修が必要となる。						
使用教科書 なし						
参考書 なし						
評価方法 授業時間に出題する課題によるレポートにより評価する。						
その他 必要に応じてプリントを使用する。						

科目名		教員名	配当年次	期間	形態	単位数
健康管理概論 I	08110	鈴木英悟	2	後期	講義	1
授業目標・到達目標 《授業目標》 本授業は、健康運動実践指導者資格の取得および健康運動実践指導者として現場において求められる実践力の向上を目的とする。具体的には、健康づくりに関する施策および健康状態の判定に関してテキストにそって解説を行ない、資格取得に向けての対策を行なう。また本学フィットネスセンター会員に向けた体力測定イベントでの実習により、実践力の向上を目指す。 《到達目標》 1. わが国における健康づくり施策について説明できる。 2. 健康と体力の関連性について説明することができる。 3. 正確な体力測定の方法を理解し、実際の場面で実施できる。						
講義計画・準備内容 《講義計画》 第1回 健康と健康増進の概念について 第2回 健康の定義, アルマアタ宣言, オタワ憲章について 第3回 わが国の健康づくり政策について 第4回 21世紀における国民健康づくり運動(健康日本21)について 第5回 健康増進法について 第6回 生活習慣と生活習慣病 第7回 運動・身体活動と健康について 第8回 食事・食生活と健康について 第9回 休養・睡眠活動と健康について 第10回 飲酒について 第12回 喫煙, メタボリックシンドロームについて 第13回 介護予防について 第14回 メディカルチェックの手順と内容について 第15回 時事問題・わが国が抱える健康問題の打開策についてまとめ 《授業外に行うべき学習(予習・復習, 準備学習等)》 復習: 講義で進めた範囲をテキストをもとに復習し, ノートを整理しておくこと。 予習: 次回行う授業内容をテキスト等を活用し, その中からキーワードを抽出しまとめておくこと。 《標準学修時間の目安》 次回の講義までに予習・復習を含め2時間の学修が必要である。						
使用教科書 健康運動実践指導者養成用テキスト, 財団法人健康体力づくり事業財団 健康運動実践指導者試験分野別&模擬問題集, NESTA JAPAN著, 編集, 日本能率協会マネジメントセンター ISBN: 9784820746218						
参考書 なし						
評価方法 授業時に実施する数回のレポート課題により評価する						
その他 本授業の受講対象者は、原則「健康運動実践指導者」資格取得を目指す学生とする。また、「健康運動実践指導者」取得に必要なとされる科目を全て履修すること。 さらに当財団資格申請および取得には、1年次に開講されている解剖生理学Ⅰ・Ⅱ, 運動生理学, 栄養指導論Ⅰの単位取得が必須である。						

科 目 名		教 員 名	配当年次	期間	形態	単位数
健康管理概論Ⅱ	08210	鈴木英悟	2	後期	講義	1
授業目標・到達目標 《授業目標》 わが国では昭和30年代からの、いわゆる成人病対策の時代から平成に入り生活習慣病という概念が導入される過程において疾患予防の面においても加齢が生活習慣へと着目点の変更がみられ、とくに健康増進をはかり疾患の発症を予防しようという「一次予防」に重点が置かれるようになった。これに伴って国の施策においても第1次、第2次国民健康づくり対策及び「健康日本21」が実施され、とくに第2次健康づくり対策<アクティブ80ヘルスプラン>では、運動習慣の普及に重点が置かれ、その一環として健康運動指導士、健康運動実践指導者などの育成が行なわれている。健康管理概念では、その内容において公衆衛生学、公衆栄養学や健康生理学などと重複する部分が見られるが、本講義では健康管理概論Ⅰの内容を踏まえ、とくに、人体における疾患関連の部分を中心として行なわれる。 《到達目標》 次の各項目について理解を深め、説明できること。 1. 疾病の発生要因とそれぞれの因子となる事項について。 2. 疾病の進行過程と各段階における「1次予防」「2次予防」「3次予防」の意義とその手段について。 3. 生活習慣病の概念とこれに属する疾患の病態の概略について。 4. メタボリック症候群の診断項目とそれらが病態に及ぼす影響について。 5. 肥満と肥満症の違い及び肥満が影響を及ぼす疾患とその病態について。 6. 食生活における問題点、食事摂取基準、特別用途食品及び保健機能食品などについて。 7. 健康によい食生活の基本。 8. 運動療法の血圧、脂質代謝、インスリン感受性などにおける効果及びそれを実施する際の注意事項、介護予防の上で問題となっているロコモティブ症候群について。						
講義計画・準備内容 《講義計画》 第1回 疾病の発生要因 第2回 疾病の自然史とその予防及び手段について 第3回 健康運動実践指導者試験対策①（過去問題） 第4回 生活習慣病とその病態について 第5回 メタボリック症候群とその概念について 第6回 健康運動実践指導者試験対策②（過去問題） 第7回 肥満症及びそれに関連する疾患について 第8回 食生活と健康の関連について 第9回 健康運動実践指導者試験対策③（過去問題） 第10回 わが国の運動の実施割合 第11回 わが国の運動施策と運動療法とその効果及び実施上の留意点 第12回 健康運動実践指導者試験対策④（過去問題） 第13回 健康日本21 第14回 エクササイズガイド2006, 2013について 第15回 健康運動実践指導者試験対策⑤（過去問題） 《授業外に行うべき学習（予習・復習、準備学習等）》 授業前にテキストを読み、次の講義の内容を大まかに把握し、復習はテキストをもとに整理を理解を確実にして重要語句を覚える。 《標準学修時間の目安》 次回の講義までに予習・復習を含めて2時間の学修が必要となる。						
使用教科書 健康運動実践指導者養成用テキスト, 公益財団法人 健康・体力づくり事業財団						
参考書 なし						
評価方法 授業内で行なう過去問題の結果および受講態度で評価する。						
その他 講義では、必要なプリントをその都度配布する。						

科目名		教員名	配当年次	期間	形態	単位数
健康運動概論	08120	原崎千鶴子	2	後期	講義	1
授業目標・到達目標 《授業目標》 健康運動実践指導者資格の取得および健康運動実践指導者として必要な身体活動量・運動活動量を理解し、目的に合ったプログラム構成まで発展させる知識の向上を目的とする。 具体的には、安全で効果的な健康、体力づくりを目的に行う有酸素運動や無酸素（レジスタンス）運動に適したプログラムを作成し、そのウォーミングアップとクーリングダウンの効果を理解させることを目的とする。 《到達目標》 目的に合った有酸素運動や無酸素運動のプログラムを構成する能力を身に付けることができる。						
講義計画・準備内容 《講義計画》 第1回 身体活動基準2013とアクティブガイドの理解（1） 第2回 身体活動基準2013とアクティブガイドの理解（2） 第3回 トレーニングの原則の理解（1） 第4回 トレーニングの原則の理解（2） 第5回 運動プログラムの作成上のポイント（1） 第6回 運動プログラムの作成上のポイント（2） 第7回 ウォーミングアップとクーリングダウンの目的と効果（1） 第8回 ウォーミングアップとクーリングダウンの目的と効果（2） 第9回 有酸素運動とその効果（メッツの理解と消費カロリーを算出）（1） 第10回 有酸素運動とその効果（メッツの理解と消費カロリーを算出）（2） 第11回 無酸素運動とその効果（レジスタンス運動の負荷設定法）（1） 第12回 無酸素運動とその効果（レジスタンス運動の負荷設定法）（2） 第13回 健康、体力づくりプログラムを提出（1） 第14回 健康、体力づくりプログラムを提出（2） 第15回 まとめ 《授業外に行うべき学習（予習・復習、準備学習等）》 復習：講義で学んだ知識を行動に変え、自ら運動実践で体得すること。 予習：次回行う授業内容をシラバスで確認し、テキストを熟読しておくこと。 《標準学修時間の目安》 今回の講義までに予習・復習を含めて2時間の学修が望ましい。						
使用教科書 健康運動実践指導者養成用テキスト、財団法人健康・体力づくり事業財団						
参考書 特になし						
評価方法 授業態度とプログラム作成能力と筆記テストによる総合点						
その他 特になし						

科目名		教員名	配当年次	期間	形態	単位数
有酸素運動の実技	08220	原崎千鶴子	2	通年	実技	2
授業目標・到達目標 《授業目標》 健康運動実践指導者資格の取得および健康運動実践指導者として必要な安全で効果的な健康、体力づくりを目的に行う有酸素運動に適したプログラムを指導することを目的とする。 具体的には、有酸素運動であるウォーキング、ジョギング、エアロビックダンスの特性を理解し、基本動作を習得し、幅広い年齢層に適した安全で効果的なプログラム作りとその指導法を理解し実践できる能力を習得することを目的とする。 《到達目標》 年齢、体力など考慮し目的に合った有酸素運動プログラムを構成する能力、正しい姿勢で動きの見本を示す実演能力、指導できる能力を身に付けることができる。						
講義計画・準備内容 《講義計画》 第1回 健康運動実践指導者とは（DVDを視聴） 第2回 エアロビックダンスの特性と正しい姿勢の確認 第3回 エアロビックダンスの基本動作の習得（1） 第4回 エアロビックダンスの基本動作の習得（2） 第5回 エアロビックダンスの基本動作の習得（3） 第6回 エアロビックダンスの効果と運動強度変換方法（1） 第7回 エアロビックダンスの効果と運動強度変換方法（2） 第8回 エアロビックダンスの効果と運動強度変換方法（3） 第9回 健康運動指導者の実技テスト（エアロビックダンスの実演）の習得（1） 第10回 健康運動指導者の実技テスト（エアロビックダンスの実演）の習得（2） 第11回 健康運動指導者の実技テスト（エアロビックダンスの実演）の習得（3） 第12回 健康運動指導者の実技テスト（エアロビックダンスの実演）の指導法（1） 第13回 健康運動指導者の実技テスト（エアロビックダンスの実演）の指導法（2） 第14回 健康運動指導者の実技テスト（エアロビックダンスの実演）の指導法（3） 第15回 まとめの実技テスト 第16回 目的別エアロビックダンスのメインエクササイズのプログラム作成（1） 第17回 目的別エアロビックダンスのメインエクササイズのプログラム作成（2） 第18回 目的別エアロビックダンスのメインエクササイズのプログラム作成（3） 第19回 エアロビックダンスのメインエクササイズのプログラム分解法と指導法（1） 第20回 エアロビックダンスのメインエクササイズのプログラム分解法と指導法（2） 第21回 エアロビックダンスのメインエクササイズのプログラム分解法と指導法（3） 第22回 ウォーキングの消費エネルギー量の計算方法 第23回 歩行テスト 第24回 ウォーキングの基本フォームの習得 第25回 ウォーキングの指導方法 第26回 ジョギングの消費エネルギー量の計算方法 第27回 走テスト 第28回 ジョギングの基本フォームの習得 第29回 ジョギングの指導法 第30回 ウォーキングとジョギングの実技テストと筆記テスト 《授業外に行うべき学習（予習・復習、準備学習等）》 復習：テキストの付録のDVDとYouTubeを活用し基本ステップを練習、実践すること。 予習：健康運動実践指導者養成用テキスト第8章を熟読すること。 《標準学修時間の目安》 1回の講義あたり1～2時間程度の自主学修が望ましい。						
使用教科書 健康運動実践指導者養成用テキスト、財団法人健康・体力づくり事業財団						
参考書 特になし						
評価方法 授業態度と実技と筆記テストによる総合点						
その他 身だしなみを整えて、基本的にジャージとシューズを着用し受講すること。						

科 目 名		教 員 名	配当年次	期間	形態	単位数
水泳・水中運動演習	08221	伊 藤 遼	2	前期	実技	1
授業目標・到達目標 《授業目標》 健康運動実践指導者の資格取得の為に必要な知識及び技能を習得する。 水中運動の特性・効果を理解し、安全で効果的な指導法を習得する。 《到達目標》 1. 健康運動実践指導者の資格取得。 2. 水の特性・効果を理解し、水中運動を実践指導できる能力の習得。						
講義計画・準備内容 《講義計画》 第1回 水中運動の特性と基本動作の習得 第2回 水中レジスタンス運動の指導法習得 第3回 水中レジスタンス運動の指導法習得 第4回 水中レジスタンス運動の指導実践 第5回 水中レジスタンス運動の指導実践 第6回 水中レジスタンス運動の指導テスト 第7回 水中ウォーキングの指導法習得 第8回 水中ウォーキングの指導法習得 第9回 水中ウォーキングの指導実践 第10回 水中ウォーキングの指導実践 第11回 水中ウォーキングの指導テスト 第12回 水中運動の指導法習得 第13回 水中運動の指導実践 第14回 水中運動の指導実践 第15回 水中運動の指導テスト 《授業外に行うべき学習（予習・復習、準備学習等）》 授業で実践したことを思い出してイメージトレーニングを行い、次回以降の指導法に役立てる。 《標準学修時間の目安》 1回の講義あたり1時間程度の自主学修が望ましい。						
使用教科書 健康運動実践指導者養成用テキスト,財団法人健康・体力づくり事業財団						
参考書 特になし						
評価方法 授業態度と実技テストによる総合評価。						
その他 水着、水泳キャップ必須						

科目名		教員名	配当年次	期間	形態	単位数
トレーニングの理論と演習	08222	原 崎 千鶴子	2	後期	実技	1
授業目標・到達目標 《授業目標》 健康運動実践指導者資格の取得および健康運動実践指導者として必要なトレーニングの理論と技能を学ぶ。 具体的には、健康、体力づくりを目的に実施するレジスタンス運動の基本動作を習得し、幅広い年齢層に適した安全で効果的なトレーニングとその指導法を理解することが目的である。 《到達目標》 レジスタンス運動プログラムを実践する能力、正しい姿勢で動きの見本を示す実演能力、指導できる能力を身に付けることができる。						
講義計画・準備内容 《講義計画》 第1回 レジスタンス運動の基礎知識（1） 第2回 レジスタンス運動の基礎知識（2） 第3回 自重負荷によるトレーニングの実習（1） 第4回 自重負荷によるトレーニングの実習（2） 第5回 自重負荷によるトレーニングの実践と指導法（1） 第6回 自重負荷によるトレーニングの実践と指導法（2） 第7回 マシンとフリーウエイトトレーニングの実習（1-1） 第8回 マシンとフリーウエイトトレーニングの実習（1-2） 第9回 マシンとフリーウエイトトレーニングの実習（2-1） 第10回 マシンとフリーウエイトトレーニングの実習（2-2） 第11回 マシンとフリーウエイトトレーニングの実践と指導法（1） 第12回 マシンとフリーウエイトトレーニングの実践と指導法（2） 第13回 自重負荷によるトレーニングの実技テスト（1） 第14回 自重負荷によるトレーニングの実技テスト（2） 第15回 まとめ 《授業外に行うべき学習（予習・復習、準備学習等）》 復習：授業で学んだトレーニングを、日ごろから実践すること。 予習：健康運動実践指導者養成用テキスト第2章、3章を熟読すること。 《標準学修時間の目安》 1回の講義あたり1～2時間程度の自主学修が望ましい。						
使用教科書 健康運動実践指導者養成用テキスト、財団法人健康・体力づくり事業財団						
参考書 特になし						
評価方法 授業態度と実技と筆記テストによる総合点						
その他 身だしなみを整えて、基本的にジャージとシューズを着用し受講すること。						

科目名		教員名	配当年次	期間	形態	単位数
健康・体力測定演習	08310	鈴木英悟	2	後期	演習	1
授業目標・到達目標 《授業目標》 健康運動実践指導者資格の取得および健康運動実践指導者として現場で求められる実践力の向上を目的とする。具体的には、健康および運動、体力に関する既習の内容を基に、一連の内容を通じて健康あるいは運動、体力分野における知識を高めるとともに、調査の実施、結果の評価および成果をまとめるという力を修得することを目的とする。 《到達目標》 1. 健康および運動、体力に関する既習の内容を基に調査課題を設定し、調査計画を立てることができる。 2. 調査項目を理解し、その結果を評価することができる。 3. 結果を考察し、まとめることができる。						
講義計画・準備内容 《講義計画》 第1回 健康と運動、体力について 第2回 無酸素性能力の測定方法 第3回 有酸素性能力の測定方法 第4回 最大酸素摂取量の測定方法 第5回 無酸素性作業閾値について 第6回 体脂肪量の測定 第7回 皮下脂肪厚法、インピーダンス法等 第8回 体力テスト・新体力テストについて 第9回 新体力テスト種目について（年齢別） 第10回 評価方法 第11回 健康運動実践指導者過去問題 第12回 測定項目評価 第13回 健康づくりのための運動指針2006 第14回 健康運動実践指導者過去問題 第15回 まとめ 《授業外に行うべき学習（予習・復習、準備学習等）》 復習：講義で進めた範囲をテキストをもとに復習し、ノートを整理しておくこと。 予習：次回行う授業内容をテキスト等を活用し、その中からキーワードを抽出しまとめておくこと。 《標準学修時間の目安》 次回の講義までに予習・復習を含め2時間の学修が必要となる。						
使用教科書 健康運動実践指導者試験分野別&模擬問題集, NESTA JAPAN著, 編集, 日本能率協会マネジメントセンター ISBN : 978-4820746218						
参考書 健康・スポーツ科学のための研究方法, 出村慎一著, 杏林書院 すべてがわかるアンケートデータの分析, 菅民郎著, 現代数学社						
評価方法 授業内過去問題テスト(60%)および授業態度(40%)により総合的に評価する。						
その他 本授業の受講対象者は、原則「健康運動実践指導者」資格取得を目指す学生とする。また、「健康運動実践指導者」取得に必要とされる科目を全て履修すること。 さらに当財団資格申請および取得には、1年次に開講されている解剖生理学Ⅰ・Ⅱ, 運動生理学, 栄養指導論Ⅰの単位取得が必須である。						

科 目 名	教 員 名	配当年次	期 間	形 態	単位数	
スポーツ心理学(発育・発達と老化を含む)	08130	鈴木英悟	2	後期	講義	1
授業目標・到達目標 《授業目標》 健康運動実践指導者には、いかに対象者に身体活動や運動習慣を獲得させるか、あるいは継続させるかといった知識と技能が求められる。本授業では、健康運動実践指導者として求められる運動と心の関係および行動変容のための知識と技能の習得を目的とする。具体的には、運動実践と心の健康および行動科学を活かした運動継続に対する方法についてテキストにそって解説を行なう。また発育・発達と老化についてもテキストにそって講義する。 《到達目標》 1. 運動による心の健康に及ぼす効果について説明できる。 2. 健康心理学、行動科学の分野で用いられている運動継続のための理論、モデルを説明できる。 3. 成長期における体力・基本的動作スキル（歩く、走る、投げる、跳ぶ）を説明できる。 4. 加齢に伴う体力、運動能力の低下について説明できる。						
講義計画・準備内容 《講義計画》 第1回 スポーツ心理学とは 第2回 「こころの健康」と運動 第3回 運動実践のための動機付け・継続に対する働きかけ 第4回 心理社会的要因 メンタルトレーニングについて 第5回 健康実践指導者過去問題① 第6回 運動の採択・継続・運動停止の行動理論 第7回 トランスセオレティカル・モデル 第8回 ソーシャルマーケティングについて 第9回 人間のからだの発育 第10回 健康実践指導者過去問題② 第11回 人間の諸機能の発達 第12回 発育、発達段階に応じた身体活動について 第13回 老化と身体活動について 第14回 健康実践指導者過去問題③ 第15回 まとめ 《授業外に行うべき学習（予習・復習、準備学習等）》 復習：講義で進めた範囲をテキストをもとに復習し、ノートを整理しておくこと。 予習：次回行う授業内容をテキスト等を活用し、その中からキーワードを抽出しまとめておくこと。 《標準学修時間の目安》 次回の講義までに予習・復習を含めて2時間の学修が必要となる。						
使用教科書 健康運動実践指導者養成用テキスト、財団法人健康・体力事業財団						
参考書 なし						
評価方法 課題に対するレポート内容により評価する						
その他 本授業の受講対象者は、原則「健康運動実践指導者」資格取得を目指す学生とする。また、「健康運動実践指導者」取得に必要とされる科目を全て履修すること。 さらに当財団資格申請および取得には、1年次に開講されている解剖生理学Ⅰ・Ⅱ、運動生理学、栄養指導論Ⅰの単位取得が必須である。						

科目名		教員名	配当年次	期間	形態	単位数
運動障害と救急処置	08340	畑 中 一 映	2	後期	演習	1
授業目標・到達目標 《授業目標》 健康づくりを目的とした運動では継続が何よりも重要である。継続のためにはいかにケガをしないかも重要な要素のひとつである。従って、健康運動実践指導者は、運動によって発生する障害に関する知識、対処方法や予防方法についての知識と技能が求められる。本授業では、健康運動実践指導者として求められるスポーツ障害についての知識および予防方法とその対処方法について理解することを目的とする。具体的には、代表的な内科的および外科的な運動障害についてテキストにそって解説を行なう。また救急蘇生法、テーピング実技および応急処置に関する実技を行なう。 《到達目標》 1. 内科的・外科的スポーツ障害についてそれぞれ説明できる。 2. 予防方法としてのテーピング、特にスポーツ現場で頻発する捻挫予防に対するテーピングを実施できる。 3. 必要な場面で救急蘇生を実施できる。 4. 必要な場面で応急手当を実施できる。						
講義計画・準備内容 《講義計画》 第1回 運動障害のメカニズム (1) 第2回 運動障害のメカニズム (2) 第3回 運動、スポーツと障害 (内科的障害) (1-1) 第4回 運動、スポーツと障害 (内科的障害) (1-2) 第5回 運動、スポーツと障害 (外科的障害) (2-1) 第6回 運動、スポーツと障害 (外科的障害) (2-2) 第7回 テーピング実技①テーピングの基本 第8回 テーピング実技①テーピングの実際 (捻挫予防を目的とした足関節のテーピング) 第9回 テーピング実技②テーピングの実際 (膝のテーピング) (1) 第10回 テーピング実技②テーピングの実際 (膝のテーピング) (2) 第11回 救急蘇生法 (実技) (1) 第12回 救急蘇生法 (実技) (2) 第13回 応急手当 (実技) (1) 第14回 応急手当 (実技) (2) 第15回 まとめ 《授業外に行うべき学習 (予習・復習、準備学習等)》 復習：講義で進めた範囲をテキストをもとに復習し、ノートを整理しておくこと。 予習：次回行う授業内容をテキスト等を活用し、その中からキーワードを抽出しまとめておくこと。 《標準学修時間の目安》 次回の講義までに予習・復習を含めて2時間の学修が望ましい。						
使用教科書 健康運動実践指導者養成用テキスト、財団法人健康・体力づくり事業財団						
参考書 スポーツ傷害、高澤晴夫他監修、西東社						
評価方法 テーピング・蘇生法技能 (60%)、授業時間内に出した課題に対するレポート (40%)により総合的に評価する。						
その他 本授業の受講対象者は、原則「健康運動実践指導者」資格取得を目指す学生とする。また、「健康運動実践指導者」取得に必要とされる科目を全て履修すること。さらに当財団資格申請および取得には、1年次に開講されている解剖生理学Ⅰ・Ⅱ、運動生理学、栄養指導論Ⅰの単位取得が必須である。						

科目名		教員名	配当年次	期間	形態	単位数
家庭経営学	09253	横井由利子	2	後期	講義	1
授業目標・到達目標 《授業目標》 社会の最小単位としての家庭は、社会情勢の変化に伴い、そのあり方、経営のしかたについて常に新しい対応が必要となる。 家族の物質的、精神的な生活の安定と幸福を目指して、主体性のある意志決定ができるとともに、生活者として自分らしく生きるための基本的な行動がとれる家庭経営のあり方を考える。 《到達目標》 1. 家庭の生活構造と理念を知り、家庭経営学を学ぶ意義を説明することができる。 2. 家庭経営における意志決定の必要性を理解し、まとめることができる。 3. 家族、親族、家庭、世帯等の家族関係や、家族（家庭）の機能について理解し、説明できる。 4. 現代社会における様々な家族形態から、変容する家族、家庭について説明できる。 5. 現代の家族、家庭の姿と対比させながら、家族と家庭経営の変遷についてまとめることができる。 6. 法律と生活の相互作用を理解し、家庭経営を進める上で必要な基本的な法を理解し説明することができる。 7. 生活設計の意義を理解して、自分なりの生活設計を立てることができる。 8. 労働時間や自由時間と関連させながら、自分なりの生活時間のあり方を考えることができる。 9. 家事労働の変容について理解し、家事労働の経済的評価について説明できる。 10. 家庭経済の仕組みを理解し、家計管理のし方や家計の課題についてまとめることができる。 11. 生活と情報、消費者問題等、家庭経営に及ぼすメリット、デメリットを把握し、適切な対応のし方をまとめ、発表することができる。						
講義計画・準備内容 《講義計画》 第1回 家庭経営の構造と理念（価値・目標・基準・家庭経営における意志決定・21世紀を生きる生活経営） 第2回 家庭経営と家族関係（家族・家庭・世帯・家族の機能） 第3回 家庭経営と家族関係（変容する家族・家庭） 第4回 家庭経営と家族関係（家庭経営の変遷） 第5回 法律と自己決定（人－出生から死亡まで） 第6回 法律と自己決定（家族の法①） 第7回 法律と自己決定（家族の法②） 第8回 生活設計（生活設計の意義・多様性と選択の生活設計） 第9回 生活時間の経営と管理（生活時間構造の変化・生活時間と生活経営） 第10回 労働とジェンダー（職域分離とジェンダー） 第11回 労働とジェンダー（家事労働の変容と家事労働の経済的評価・これからの労働と生活経営） 第12回 家庭経済と家庭経営（現代家計の構造と特徴） 第13回 家庭経済と家庭経営（これからの家庭経済と家庭経営） 第14回 現代社会の消費者問題（消費者と消費者問題・消費者契約と消費者法） 第15回 生活と情報（ニューメディア時代の家庭生活管理・生活の変化と環境・ライフスタイルの再構築） 《授業外に行うべき学習（予習・復習、準備学習等）》 予習：シラバスの「授業計画」に沿って、事前にテキストの関連するところをよく読んでおくこと。 復習：授業内容をふり返り、理解を深めるため、テキストを再度読み返し、シラバスの《講義計画》と照合しながら、自分なりのノートを作成すること。 《標準学修時間の目安》 次回の講義までに予習・復習を含めて2時間の学修が望ましい。						
使用教科書 現代社会の生活経営，御船美智子・上村協子共編著，光生館，ISBN978-4-332-20072-1 C3077						
参考書 ・生活経営－Wellbeing 目指す自助努力－，松岡明子他，建帛社 ・生活経営論＝生活のリスク・診断・学習と実践＝，清野きみ，放送大学教育振興会 ・21世紀の生活経営－自分らしく生きる－，白井和恵編著，同文書院						
評価方法 授業への参加姿勢と授業態度、レポートにより、総合評価する。						
その他 随時資料を作成し、活用した授業を展開する。 ノートをしっかりとること（把握した学習内容等を自分の言葉でまとめる）。						

科 目 名		教 員 名	配当年次	期間	形態	単位数
住 居 学	09251	木 村 徹	2	後期	講義	1
授業目標・到達目標 《授業目標》 誰もが係わる住居（器）の認識をベースとして、様々な視点から「住む」ということに関して、お互いに考え見つけ直して試みることができるような内容・講義になることを目標に進める。また、最終的には住宅の設計（平面プランニング）を通して、イメージを表現し図面化できることを目標にする。 《到達目標》 1. 住宅の歴史を理解し、現代住宅のあり方をレポートにまとめることができる。 2. 住居・住まいの目的を理解し、現代家族における家族団欒の場の役割をレポートにまとめることができる。 3. 敷地と配置との関連を理解し、北海道における住宅の問題点等についてレポートにまとめることができる。 4. 各室の平面計画について理解し、自由設計に取り入れたいテーマ・要素についてイメージをレポートにまとめることができる。 5. 階段の種類と法規について理解し、平面プラン立案に向けて自ら情報収集を行い、それらを考察してレポートにまとめることができる。 6. 設計図や記号・建築モジュールについて理解し、イメージを平面プラン化することができる。 7. 住まい方と生き方について関連づけて理解・考察し、それを自由設計として図面化・表現化することができる。						
講義計画・準備内容 《講義計画》 第1回 講義の進め方と評価の観点について（教科の考え方と捉え方・新住居学事始め） 第2回 住宅の歴史（レポート提出「現代住宅についての考察」） 第3回 住居・住まいの目的について（1）（住宅の分類・家族周期と住要求の変化） 第4回 住居・住まいの目的について（2）（住宅の構成と動線計画・レポート提出「現代家族における家族団欒の場についての考察」） 第5回 建築計画の進め方（1）（敷地計画・配置計画） 第6回 建築計画の進め方（2）（バリアフリーとユニバーサルデザイン・レポート提出「北海道における住宅建築の問題点・改善点についての考察」） 第7回 平面計画（1）（各室の平面計画について・台所の形式とLDKについて） 第8回 平面計画（2）（リビングルームの必要性について・レポート提出「自由設計に取り入れたい要素・機能・空間等について」） 第9回 建築工法について（1）（階段の種類と建築基準法・補修と点検について） 第10回 建築工法について（2）（建築構造・工法の種類と基礎知識・自由設計課題提示） 第11回 住宅の設計について①- 1（設計図の見方と進め方・モジュールについて） 第12回 住宅の設計について①- 2（内的・外的条件・事例紹介） 第13回 住宅の設計について②- 1（住まい方は生き方・住まい方の姿勢について） 第14回 住宅の設計について②- 2（住宅の個性について・自由設計課題（平面プラン）提出） 第15回 まとめ 《授業外に行うべき学習（予習・復習、準備学習等）》 授業で配布プリントをよく理解して、授業外でも自分の課題に積極的に取り組み、理解を深めるように心がけること。日頃からあらゆる情報を通して、住まいについてのイメージを膨らませておくこと。 《標準学修時間の目安》 1回の講義あたり4時間の学修が望ましい。						
使用教科書 なし						
参考書 建築・住宅関連書籍全般						
評価方法 毎時間の取組・意欲・出席・レポート提出・住宅自由設計（平面プラン）の提出等を総合的に判断し評価する。						
その他 毎講義毎にプリントや関連資料等を配布して進める。						

科目名		教員名	配当年次	期間	形態	単位数
保 育 学	09252	上 平 恵美子	2	前期	講義	1
授業目標・到達目標 《授業目標》 保育とはどのような事なのかを学びますが、理論は実践において必ずしも合致するものではありません。子どもは私たちに多様な姿（状態）を見せてくれますが、それらは同じようであっても、個々の育ちや背景にある環境、その要因となるものが違っている事も多く、それに対応する方法は異なります。授業では、一人ひとりの子どもの内面を理解し、常にものごとの本質に立ち返って考える態度を身に付けて、信頼関係のもとで子どもの育ちを見守り支援できるよう学習することを目標とします。 《到達目標》 1. 保育とはなにかを理解し説明できる。 2. 保育の基盤としての子ども観を理解し、その説明ができる。 3. 子どもが育つ環境の大切さを理解し説明できる。 4. 保育者に求められるのは何かを理解し、実践に結びつけることができる。						
講義計画・準備内容 《講義計画》 第1回 保育とはなにか（保育とは何をする事なのか） 第2回 保育とはなにか（保育と養護および教育の関係・保育の専門性とは何か） 第3回 保育の基盤としての子ども観（子ども観とは何か） 第4回 保育の基盤としての子ども観（保育者の子ども観を形づくるもの・子ども観と保育の内容・方法） 第5回 子ども理解から出発する保育（保育における子ども理解とは） 第6回 子ども理解から出発する保育（子どもの発達をとらえる「まなざし」・子ども理解を深めるために） 第7回 子どもが育つ環境の理解（子どもが育つ環境とはどのようなものか） 第8回 子どもが育つ環境の理解（物的環境と人的環境の関連について） 第9回 保育内容・保育の方法と保育の計画（保育の基本をふまえた保育内容） 第10回 保育内容・保育の方法と保育の計画（保育方法の原則は子どもの主体性、自発性を大切に・保育の計画には、どのようなものがあるか） 第11回 健康・安全と障がいのある子への対応（健康な子どもの姿とは） 第12回 健康・安全と障がいのある子への対応（子どもの安全に配慮した保育・障がいのある子どもの保育のなかでの留意点） 第13回 保育者に求められるもの（保育者という仕事） 第14回 保育者に求められるもの（子どもや保護者とのかかわりのなかで求められるもの） 第15回 保育の現状と課題（子育てを取り巻く社会の変化と保育課題・保育所の現状と課題） 《授業外に行うべき学習（予習・復習、準備学習等）》 予習：シラバス「授業計画」に沿って授業に参加する前に教科書を読み、分からない用語の意味を調べておくこと。 復習：授業後は講義内容について、復習し、重要な所はノートを作成し、整理しておくこと。 《標準学修時間の目安》 この授業は1単位なので、次回の講義までに予習・復習を含めて2時間の学修が望ましい。						
使用教科書 保育原理，森上史朗，ミネルバ書房，ISBN 978-4-623-04910-3						
参考書 授業の中で紹介します。						
評価方法 定期試験結果（80％）と課題提出物（10％）、学習態度等の総合判定を行います。						
その他 必要に応じて参考資料を配布します。						

科目名		教員名	配当年次	期間	形態	単位数			
公衆栄養実習	05420	鈴木真由美/庭 亜子	2	その他	実験・実習	1			
授業目標・到達目標 《授業目標》 栄養行政の第一線機関において、直接その業務を担当する保健所栄養士（管理栄養士）の行う業務の性格とその内容・方法を実習し、公衆衛生活動における栄養士の役割と公衆栄養活動の実態についてその概要を体得する。（保健所の実際の業務に支障がある場合には、実施できないことがある。） 《到達目標》 1. 実際の栄養行政の業務内容を説明できる。 2. 公衆衛生活動の中での栄養士の役割を説明できる。									
講義計画・準備内容 《講義計画》渡島保健所における実習例 <table border="0" style="width: 100%;"> <tr> <td style="vertical-align: top; width: 33%;"> 1日目 ・挨拶・オリエンテーション ・地域保健活動について ・企画総務課の業務 ・健康増進課の業務 ----- ・地域保健推進課の業務 ・精神保健福祉課の業務 ・生活衛生課の業務 ・社会復帰学級（献立作成） ・カンファレンス </td> <td style="vertical-align: top; width: 33%;"> 2日目 ・保健所公衆栄養業務 ・社会復帰学級（資料作り） ----- ・市町村栄養士活動について ・社会復帰学級の打ち合わせ ・カンファレンス 3日目 ・社会復帰学級（材料準備等） ・乳幼児指導について ----- ・見学「3歳児健康診査」 ・（移動・昼食を含む） ・カンファレンス </td> <td style="vertical-align: top; width: 33%;"> 4日目 ・社会復帰学級（打ち合わせ） ・実習「社会復帰学級」 ・「社会復帰学級」に参加 ----- ・集団給食施設指導について ・実習・記録・整理 ・カンファレンス 5日目 ・給食施設指導（大野町学校給食センター） ・（移動・昼食含む） ----- ・記録・まとめ ・カンファレンス・記録 ・まとめ・会場整理・挨拶 </td> </tr> </table> 《授業外に行うべき学習（予習・復習・準備学習等）》 ・公衆栄養学概論・公衆衛生学を中心に保健所業務、栄養士業務の復習を行うこと。 ・公衆栄養・公衆衛生の観点から保健所と栄養士の重要性について説明できるようにしておくこと。 ・公衆栄養・公衆衛生におけるわが国の現状と問題点について説明できるようにしておくこと。 《標準学修時間の目安》 1回の報告書（レポート）作成に1～2時間程度の学修が必要となる。							1日目 ・挨拶・オリエンテーション ・地域保健活動について ・企画総務課の業務 ・健康増進課の業務 ----- ・地域保健推進課の業務 ・精神保健福祉課の業務 ・生活衛生課の業務 ・社会復帰学級（献立作成） ・カンファレンス	2日目 ・保健所公衆栄養業務 ・社会復帰学級（資料作り） ----- ・市町村栄養士活動について ・社会復帰学級の打ち合わせ ・カンファレンス 3日目 ・社会復帰学級（材料準備等） ・乳幼児指導について ----- ・見学「3歳児健康診査」 ・（移動・昼食を含む） ・カンファレンス	4日目 ・社会復帰学級（打ち合わせ） ・実習「社会復帰学級」 ・「社会復帰学級」に参加 ----- ・集団給食施設指導について ・実習・記録・整理 ・カンファレンス 5日目 ・給食施設指導（大野町学校給食センター） ・（移動・昼食含む） ----- ・記録・まとめ ・カンファレンス・記録 ・まとめ・会場整理・挨拶
1日目 ・挨拶・オリエンテーション ・地域保健活動について ・企画総務課の業務 ・健康増進課の業務 ----- ・地域保健推進課の業務 ・精神保健福祉課の業務 ・生活衛生課の業務 ・社会復帰学級（献立作成） ・カンファレンス	2日目 ・保健所公衆栄養業務 ・社会復帰学級（資料作り） ----- ・市町村栄養士活動について ・社会復帰学級の打ち合わせ ・カンファレンス 3日目 ・社会復帰学級（材料準備等） ・乳幼児指導について ----- ・見学「3歳児健康診査」 ・（移動・昼食を含む） ・カンファレンス	4日目 ・社会復帰学級（打ち合わせ） ・実習「社会復帰学級」 ・「社会復帰学級」に参加 ----- ・集団給食施設指導について ・実習・記録・整理 ・カンファレンス 5日目 ・給食施設指導（大野町学校給食センター） ・（移動・昼食含む） ----- ・記録・まとめ ・カンファレンス・記録 ・まとめ・会場整理・挨拶							
使用教科書									
参考書 ・五訂増補食品成分表2015,香川芳子監修,女子栄養大学出版 ・国民衛生の動向,財団法人厚生統計協会 ・国民栄養の現状,健康・栄養情報研究会編 ・栄養調理六法,新日本法規出版									
評価方法 カンファレンス、記録のまとめ、参加姿勢を総合して評価する。									
その他 保健所の実際の業務に支障がある場合には、実施できないことがある。 事前に実習先に問い合わせる必要資料を準備する。									

科目名		教員名	配当年次	期間	形態	単位数
特別研究	00450	食物栄養学科担当教員	2	その他	演習	2
授業目標・到達目標 《授業目標》 食物栄養学科で学ぶ講義・実験・実習などの集大成として、この分野の最近の課題等について論文形式のものにまとめるための指導を行なう。 自主的あるいは指導教員と相談して決定した課題について半年以上をかけて実施する。 この特別研究の実施にあたっては、学科会議で了解を得るものとする。 《授業目標》 自分の研究テーマのまとめを行う過程で、以下のようなことを身につけ、プレゼンテーションと論文作成ができる。 1. 課題を進める上で必要な構成力、実験技術（アンケート調査解析を含む）を習得する。 2. 研究の計画と遂行、結果のまとめ方、結果の発表の仕方など基本的なことを身につける。 3. 実験結果、アンケート調査の適切な解析、解釈、考察ができる能力を身につける。 4. 一連の計画遂行のなかで、独創的発想、探究心、倫理的思考、表現力、判断力など1人で研究を行なうための総合的能力を身につける。						
講義計画・準備内容 《準備内容》 履修登録に当たっては、必ず教員に事前に相談すること。 実際の実施にあたっては、指導教員と詳細な打ち合わせを行なうこと。 研究テーマの範囲は、広く食に関連した分野とする。 指導教員と個別に相談し、両者が納得し、学科会議で特別研究を行なうことの了解を得る必要がある。 《授業外に行うべき学習（予習・復習、準備学習等）》 この科目の選択に当たっては、指導教員と良く相談して、研究テーマに沿った文献等を読み込むこと。 英語の文献を辞書無しでも理解できる適度の学力が必要となる。 《標準学修時間の目安》 合計で60時間以上の自主学習を行う必要がある。						
使用教科書 なし						
参考書 なし						
評価方法 課題に対する積極性、成果のまとめ方、学科内での口頭発表などを総合して評価する。						
その他 履修登録に当たっては、必ず教員に相談すること。						

1 年次配当科目

栄養にかかると教育に関する科目

学校栄養教育法 …………… 82

教科又は教職に関する科目

障害のある生徒の理解と指導 … 83

教職に関する科目

教職の意義と職務 …………… 84

教育原理 …………… 85

教育心理学 …………… 86

教育経営論 …………… 87

家庭科教育法 …………… 88

道徳教育の研究 …………… 89

生徒指導の研究 …………… 90

特別活動の研究 …………… 91

2 年次配当科目

教科又は教職に関する科目

地域福祉と教育 …………… 92

教職に関する科目

進路指導の研究 …………… 93

教育方法論 …………… 94

教育相談の研究 …………… 95

栄養教育実習 …………… 96

中学校教育実習 …………… 97

教職実践演習（中学校・家庭） 98

教職実践演習（栄養教諭） …… 99

科目名		教員名	配当年次	期間	形態	単位数
学校栄養教育法	09220	清水陽子・保坂静子	1	後期	講義	2
授業目標・到達目標 《授業目標》 教職に関する科目及び栄養士養成課程での習得内容を基礎とする。 1. 児童・生徒の食に関連する現状と課題を把握し、栄養教諭として果たすべき職務の内容を修得する。 2. 学校給食を生きた教材として活用し、食に関わる指導を行うために必要な知識と実践力を身につける。 3. 学校給食の歴史的背景とその意義や役割について学ぶ。 《到達目標》 1. 栄養教諭の役割および職務内容を理解し実践することができる。 2. 食に関する指導の基礎的知識を理解し指導することができる。 3. 学校給食の意義と役割が解り学校給食を「生きた教材」として活用できる。						
講義計画・準備内容 《講義計画》 【栄養教諭の役割と職務内容】 第1回 栄養教諭の制度と役割 第2回 栄養教諭の職務内容 第3回 学校給食の意義と役割 【児童・生徒の栄養に係わる課題】 第4回 児童・生徒の食生活の現状と課題 【食文化とその歴史】 第5回 食文化の変遷と学校給食 第6回 地場産物の活用と郷土食、行事食等について 【食に関する指導の方法】 第7回 食に関する指導の全体計画、給食時間における食に関する指導 第8回 教科における食に関する指導（家庭科、技術・家庭科、体育科、保健体育科） 第9回 教科における食に関する指導（道徳、特別活動） 第10回 教科における食に関する指導（生活科、総合的な学習の時間、その他教科） 第11回 発達に応じた食に関する指導、個別栄養相談 第12回 学校、家庭、地域と連携した食に関する指導 第13回 実践演習A（食に関する指導の指導案作り） 第14回 実践演習B（学生が作成した指導案の発表、相互批評等） 第15回 実践演習C（模擬授業、指導効果の評価） 《授業外に行うべき学習（予習・復習、準備学習等）》 教科書を読み、内容把握。授業後はレポート課題提出 《標準学修時間の目安》 次回の講義までに予習・復習を含めて4時間の学修が望ましい						
使用教科書 「三訂 栄養教諭論 第2版-理論と実際-」、金田雅代編著、建帛社 ISBN:978-4-7679-2104-4						
参考書 栄養教諭のための学校栄養教育論 補訂、笠原賀子編著、医歯薬出版株式会社						
評価方法 定期試験(80%)、学習態度・レポート(20%)により総合評価する。						
その他 1年前期において、卒業必修科目、栄養士必修科目、栄養教諭必修科目の単位を取得していること。						

科 目 名	教 員 名	配当年次	期 間	形 態	単位数	
障害のある生徒の理解と指導	09230	小 岩 眞智子	1	前期	講義	2
授業目標・到達目標 《授業目標》 世界保健機構（WHO）の障害観（ICF）の改訂を受け、我が国においてもバリアフリーやユニバーサルデザイン等の考え方や取り組みが広がり、教育においても一人一人のニーズに応じる「特別支援教育」の推進が図られている。本授業では、インクルージョンの理念に基づく「特別支援教育」の在り方を学ぶとともに、障害のある子どもたちへの理解を深め、そのニーズを温かく受け止め、一人一人の健やかな自立と社会参加を適切に支援する態度を体験的に育むことを目標とする。 《到達目標》 1. 障害のある子どもやその保護者のニーズを理解し、支援の必要性について説明できる。 2. 特別支援教育の基本的な考え方について理解し、説明できる。 3. 各障害の特性を理解し、環境づくりや支援の工夫について記録することができる。 4. 特別支援学校や特別支援学級の役割について理解し、説明できる。 5. 専門機関等との連携についてとらえ、その必要性を説明できる。 6. 障害のある人々を支える方途について考え、小論文にまとめることができる。						
講義計画・準備内容 《講義計画》 第1回 オリエンテーション（本講義の目標と内容の確認・教職履修カルテの活用法） 第2回 子どもの障害とニーズの把握（障害の疑似体験：ブラインドウォーク等） 第3回 特別支援教育の基本理念と歩み 第4回 特別支援教育の概要（特別支援教育コーディネーターの役割・連携体制づくり） 第5回 特別支援学校の役割（特別支援教育における地域のセンターとして） 第6回 視覚障害のある子どもの理解と支援の在り方 第7回 聴覚障害のある子どもの理解と支援の在り方 第8回 肢体不自由のある子どもの理解と支援の在り方 第9回 発達障害の特性と環境づくり（発達障害者支援センター職員の講話） 第10回 知的障害及び発達障害のある子どもの理解と支援の在り方 第11回 特別支援学級の指導の在り方 第12回 通常の学級における特別支援教育の在り方 第13回 特別支援教育に期待すること（障害のある子どものいる保護者の話） 第14回 障害のある子どもたちを支えるために私のできること（小論文作成） 第15回 まとめ（小論文の交流・授業評価・自己評価・教職履修カルテへの記入等） 《授業外に行うべき学習（予習・復習・準備学修等）》 ・復習として、授業での学びや感想を記録し、提出する。 ・予習として、次回のテーマとなる障害等について調べ、自分の考えをまとめておく。 ・詳細については、各回ごとに提示する。 《標準学修時間の目安》 1回の講義あたり、1時間の予習と3時間の復習が必要となる。						
使用教科書						
参考書 なし						
評価方法 ・授業への参加態度と課題等への取組状況（得点配分60%） ・小論文の取材態度及び記述内容の状況（得点配分40%）						
その他 ・講義の中で、適宜プリントを配布する。						

科目名		教員名	配当年次	期間	形態	単位数
教職の意義と職務	09140	小岩 眞智子	1	前期	講義	2
授業目標・到達目標 《授業目標》 教育の職務については、人間の心身の発達に直接関わるものであるところから、高い専門性が要求される。この授業は、教員が備えるべき条件を概括的に取り上げて、教職の全体像を把握し、専門職としての基礎を確立するとともに、関係する法規等と照らしながら、教職の意義、教員の役割、職務内容等に関する理解を深めることを目標とする。また、達成モデルとして現職教員を招聘し、学生の教職を志す意欲を高めるとともに、自らの適性を確認し、自己課題等を明らかにすることも目標とする。 《到達目標》 1. 子どもの生活実態と教育や教師の役割について意見交換できる。 2. 教員の身分やサービスの在り方について、法的根拠を押さえて説明できる。 3. 教員の職務について、その概要をとらえてまとめ、発表できる。 4. 研修の義務について法的根拠を押さえて説明できる。 5. 地域や家庭との連携の在り方について、課題を含めて説明できる。 6. 教育や教師を取り巻く課題について小論文にまとめことができる。						
講義計画・準備内容 《講義計画》 第1回 オリエンテーション①（本講義の目標と内容の確認・教職履修カルテの活用法・適性検査の実施） 第2回 オリエンテーション②（理想とする教育や教員の在り方・自己課題の把握） 第3回 自分たちを取り巻く教育と教師（函館短期大学の教育等） 第4回 最近の子どもの生活と求められる教師像（現職の家庭科教員の講話） 第5回 最近の子どもの生活と求められる教師像（現職の栄養教諭の講話） 第6回 教師の身分①（教育公務員制度における教師の地位と身分） 第7回 教師の身分②（各教育法規における教師の服務） 第8回 教師の職務①（学習指導要領→教育課程の編成→指導計画の作成） 第9回 教師の職務②（学習指導：計画→実践→評価→改善） 第10回 教師の職務③（学級経営：学級担任の心構え・生徒指導・進路指導等） 第11回 教師の職務④（学校運営・校務分掌・地域貢献） 第12回 教師の職務⑤（研究と修養の義務） 第13回 家庭や地域との連携 第14回 教育や教師を取り巻く課題（小論文の作成） 第15回 まとめ（授業の振り返り・成果と課題の確認・自己評価・授業評価・教職履修カルテへの記入） 《授業外に行うべき学習（予習・復習・準備学修等）》 ・予習として、次回のテーマ等について教科書を読み、内容をまとめておく。 ・復習として、授業での学びや感想を記録し、提出する。 ・詳細については、各回ごとに提示する。 《標準学修時間の目安》 1回の講義にあたり、2時間の予習と2時間の復習が必要となる。						
使用教科書 教職入門～教師への道、吉田辰雄・大森正、図書文化、ISBN978-4-8100-9311-7						
参考書 なし						
評価方法 ・授業への参加態度や発言内容（得点配分30%） ・レポート及び小論文の内容（得点配分40%） ・期末試験（得点配分30%）						
その他 ・教科書は、2年後期「進路指導の研究」においても使用する。 ・講義の中で、適宜プリントを配布する。						

科目名		教員名	配当年次	期間	形態	単位数
教育原理	09141	藤井 壽夫	1	前期	講義	2
授業目標・到達目標 《授業目標》 教育の理念並びに教育に関する歴史及び思想を学ぶことを通して、①教育とは何か、②教育の内容と方法等について理解を深め、教育に対する興味を培う。 《到達目標》 1. いろいろな教育理論について、その人間観と関連づけて説明できる。 2. 様々な教授理論について、その違いを説明できる。 3. 西欧教育の歴史と制度を教授・教育理論と対比して説明できる。 4. 日本教育の歴史と制度を教授・教育理論と比較して説明できる。 5. 様々な教育改革者にふれ、教育についての理解を深めることができる。						
講義計画・準備内容 《講義計画》 第1回 オリエンテーション・教育とは何か（教育の語義、教育の定義、教育的存在としての人間） 第2回 人間の成長・発達（素質と環境、人間の成長の特徴、文化と人間形成）・教育の可能性 第3回 子どもとは何か・西欧の子ども観と日本の子ども観・子ども観と教育理論・子育てと教育 第4回 西欧教育の目的・日本教育の目的・教育の目的 第5回 外国教育史（ヨーロッパ中世の教育、近代教育思想の展開） 第6回 江戸時代以前の教育・江戸時代の教育 第7回 明治期の教育・明治期の教育者群像 第8回 大正自由教育運動・自由教育運動と教育改革者群像 第9回 戦前・戦中・戦後の教育・教育の目的と政治・社会の変化 第10回 民主的教育の成立と教育制度・学習指導要領 第11回 学習指導要領の変遷と学校教育・「ゆとり」と学力・個性化と社会化の中で 第12回 校内暴力と学校改革・生徒指導と学校教育 第13回 いじめ・不登校と学校・学校の機能と社会の変化 第14回 新たな学校像と教育課程 第15回 これまでの講義のまとめと評価 《授業外に行うべき学習（予習・復習、準備学習等）》 毎回、課題を示すので、次回までに準備、学習してくること。 《標準学修時間の目安》 1回の講義あたり2時間の予習と2時間の復習が必要である。						
使用教科書 教育原理第2版 寺下明著 ミネルヴァ書房 ISBN-10: 4623065197						
参考書 食育のための教育原理 中村弘行著,三恵社,ISBN978-4-88361-771-5						
評価方法 ・筆記試験（50%） ・出欠、授業への参加態度（30%） ・レポートの提出状況（20%）						
その他 講義の中で補助資料を配付する。						

科目名		教員名	配当年次	期間	形態	単位数
教育心理学	09142	藤井 壽夫	1	前期	講義	1
授業目標・到達目標 《授業目標》 教育・学習について、心理学的な見方、考え方について学ぶ授業である。人間は生涯学び、成長していくが、その発達プロセスや学習メカニズムといった心理学の基礎的知識を身に付け、教師として、子どもの発達、学習に関する専門的な理解を深めることを目指す。また、知能と学力の関係、発達障害について学校現場の臨床例をもとに理解する。 《到達目標》 1. 発達の諸理論を理解し、その違いを説明できる 2. 学習の諸理論を理解し、その違いを説明できる 3. 動機付けと意欲について説明できる 4. 知能と学力の関係、発達障害について理解し、説明できる。 5. 教育現場における不適応行動と問題行動の現状を理解し、その要因を説明できる。						
講義計画・準備内容 《講義計画》 第1回 ガイダンス 第2回 教育心理学とは（教育心理学の範疇と教育への貢献） 第3回 発達の理論①（発達の諸理論） 第4回 発達の理論①（研究の歴史） 第5回 発達の理論②（発達段階） 第6回 発達の理論②（発達に及ぼす影響） 第7回 学習の理論（条件付け、技能学習） 第8回 学習の理論（認知学習、学習と記憶） 第9回 効果的な学習（動機付けと意欲） 第10回 効果的な学修（学習指導法） 第11回 知能と学力（知能、学力） 第12回 知能と学力（知能と学力の関係、発達障害） 第13回 不適応行動の理解（不適応行動と問題行動） 第14回 不適応行動の理解（問題行動の現状） 第15回 まとめと試験対策説明 《授業外に行うべき学習（予習・復習、準備学習等）》 次回までに予習しておく箇所を講義の最後に伝えるので、テキスト該当箇所を熟読してくる。 《標準学修時間の目安》 1回の講義あたり予習・復習を含めて2時間の学修が必要である。						
使用教科書 教職をめざす人のための教育心理学， 福村出版， 藤田圭一、楠本恭久編著， 978-4-571-20071-7						
参考書 特になし						
評価方法 授業への参加態度（出欠含）（得点配分30%）、提出レポートの内容（20%）、及び学期末定期試験（50%）により評価する。						
その他 毎回、講義の中でプリントを配付する。						

科目名		教員名	配当年次	期間	形態	単位数
教育経営論	09143	藤井 壽夫	1	後期	講義	1
授業目標・到達目標 《授業目標》 教育の危機、再生等が叫ばれて久しいが、今あらためて教育とは何かが問われている。本科目では学校教育を取り巻く法的内容、教育関係組織を理解し、現在学校が直面している課題とこれからの時代を担う教育のあり方等を実例を中心に学習する。 《到達目標》 1. 教育関連法の背景と内容について理解し、説明できる。 2. 公教育の制度と運営についての原理を理解し、説明できる。 3. 学校経営推進計画を目指す子ども像と結びつけて説明できる。 4. 教育改革の動向と当面する教育課題について述べるができる。 5. 学校を取り巻く危機管理、トラブル等を理解し、その対処法を説明できる。						
講義計画・準備内容 《講義計画》 第1回 オリエンテーション、教育経営とは何か 第2回 法律と教育経営（教育基本法改正の背景と課題） 第3回 法律と学校をつなぐもの①（文部科学省と学習指導要領等） 第4回 法律と学校をつなぐもの②（教育委員会、教育委員会制度・教育行政執行方針） 第5回 地方教育行政の仕組み（函館市教育委員会の組織、運営・教育推進計画） 第6回 目指す子ども像（子ども像の意味するもの・子ども像と教育経営） 第7回 学校経営推進計画（公立中学校における学校経営案・学校経営の具体） 第8回 学校経営の実際（「講演」私の学校経営・校長の夢と学校改革） 第9回 教師とは（教師と教師を取り巻く現状・教師の職務） 第10回 教育経営と危機管理（不審者対応・危機管理の現状と課題） 第11回 学校を取り巻く問題と対応①（学校への苦情とモンスターペアレント・教師の対応） 第12回 学校を取り巻く問題と対応②（学校トラブルと教師のメンタルケア） 第13回 学校給食をめぐるトラブル①（栄養教諭の学校における立場と重要性） 第14回 学校給食をめぐるトラブル②（学校給食をめぐる事件・事故・食育と教育経営） 第15回 まとめ（教育経営案と評価・授業を振り返って） 《授業外に行うべき学習（予習・復習、準備学習等）》 毎回、課題を示すので、次回までに準備、学習してくること。 《標準学修時間の目安》 1回の講義あたり、予習・復習を合わせて2時間の学修が必要である。						
使用教科書 なし						
参考書 なし						
評価方法 ・出欠、授業への参加態度等（30%） ・レポート等提出状況（20%） ・筆記試験（50%）						
その他 講義要項内容毎にプリントを印刷配付する。						

科目名		教員名	配当年次	期間	形態	単位数
家庭科教育法	09210	横井由利子	1	後期	講義	1
授業目標・到達目標 《授業目標》 家庭科教育には実践的、体験的な学習活動や問題解決的な学習活動の一層の充実が求められている。本講義では、家庭科の意義や目標、内容構成などを理解した上で「確かな学力」を育てるための学習指導の展開や題材の構成、指導方法の工夫など、基本的な授業設計と評価について学習し、模擬授業を通して実践する。 《到達目標》 1. 家庭科教育の意義や目標、内容構成を理解し説明することができる。 2. 学習指導計画の立て方や学習形態、学習方法を理解し説明することができる。 3. 評価の意義、目的、及び評価方法について理解を深め、それを表現することができる。 4. 指導実践例から題材構成と指導方法について理解を深め、それを表現することができる。 5. 学習指導案を作成することができる。 6. 模擬授業を行うことができる。						
講義計画・準備内容 《講義計画》 第1回 オリエンテーション 第2回 家庭科教育の意義・特質 第3回 家庭科教育の目標・内容（学習指導要領について） 第4回 家庭科教育の目標・内容（目標及び内容） 第5回 家庭科の授業設計（学習形態と学習方法） 第6回 家庭科の授業設計（学習指導計画） 第7回 学習指導と評価（評価の意義と目的） 第8回 学習指導と評価（評価方法） 第9回 家庭科学習指導の実際（1） 第10回 家庭科学習指導の実際（2） 第11回 学習指導案の作成（1） 第12回 学習指導案の作成（2） 第13回 模擬授業（1） 第14回 模擬授業（2） 第15回 授業後の話し合い 《授業外に行うべき学習（予習・復習、準備学習等）》 予習：授業前にテキストや配布された資料を読み、次時の講義内容を大まかに把握しておくこと。 復習：講義内容についての復習を行い、自己課題について探求すること。 学習指導案作成：自分の興味のある題材について、前もって教材研究を深めておくこと。 模擬授業：授業者も参加者も、事後の話し合いの「気づき」を大切に、教育実習に生かすようにすること。 《標準学修時間の目安》 1回の講義あたり予習・復習を含めて、2時間の学修が必要である。						
使用教科書 中学校学習指導要領、解説－技術・家庭編，文部科学省（教育図書），ISBN978-4-87730-234-4						
参考書 ・家庭科の21世紀プラン，日本家庭科教育学会編著，家政教育社 ・家庭科の教育と授業研究，田部井恵美子他編著，学術図書出版社						
評価方法 学習指導案と模擬授業及び学習姿勢、授業態度により総合評価する。						
その他 随時、資料及びプリント等を配布し、活用する。						

科目名		教員名	配当年次	期間	形態	単位数
道徳教育の研究	09245	藤井 壽夫	1	後期	講義	1
授業目標・到達目標 《授業目標》 道徳教育は、人格形成をめざす教育の基底になるものである。本科目では、価値観が多様化し変化の激しい現代社会に必要とされる「生きる力」の重要な内容になる道徳性（意志、社会性、情操を含む）の育成に焦点をあてて、道徳教育のあり方、進め方を実践的に学習する。 《到達目標》 1. 道徳教育の基本と価値項目を理解し、説明できる。 2. 道徳性は人間の成長と発達がかかわっていることを理解し、説明できる。 3. 道徳教育は、その目標の理解、全体計画、道徳の時間の指導と深い関連性を持っていることを理解し、説明できる。 4. 指導方法について多様な形があり、その多様性を生かすことの重要性を理解し、実践できる。 5. 道徳の時間の指導案が作成できる。 6. 道徳の模擬授業を行うことができる。						
講義計画・準備内容 《講義計画》 第1回 オリエンテーション（学習指導要領における「道徳」と価値項目） 第2回 道徳性に関する発達課題（道徳性に関する発達課題） 第3回 道徳教育の成立と変遷（全教育活動のなかでの道徳教育・「道徳の時間」における道徳指導） 第4回 「道徳の時間」の指導の実際①（コールバーグの葛藤教材と授業の実際） 第5回 「道徳の時間」の指導の実際②（ロールプレイングと映像教材） 第6回 「道徳の時間」の指導案研究①（「道徳の時間」の指導案の作成と工夫のポイント） 第7回 「道徳の時間」の指導案研究②（「道徳の時間」の指導案に関する研究協議） 第8回 「道徳の時間」の指導案研究③（「道徳の時間」の指導案の作成） 第9回 「道徳の時間」の指導案研究④- 1（指導案検討） 第10回 「道徳の時間」の指導案研究④- 2（研究授業者決定） 第11回 「道徳の時間」の研究授業①（模擬授業・授業における研究協議） 第12回 「道徳の時間」の研究授業②（模擬授業・授業における研究協議） 第13回 「道徳の時間」の研究授業③（模擬授業・授業における研究協議） 第14回 研究授業（代表者による公立中学校における研究授業） 第15回 まとめ（授業の振り返り、自己評価、授業評価、教職履修カルテ記入） 《授業外に行うべき学習（予習・復習、準備学習等）》 毎回、課題を示すので、次回までに準備、学習してくる。 《標準学修時間の目安》 1回の講義あたり、予習・復習を合わせて2時間の学修が必要である。						
使用教科書 文部科学省中学校指導書—道徳編一、文部科学省、日本文教出版、ISBN978-4-536-59004-4 中学校道徳「明日をひらく」1 東京書籍 ISBN978-4-487-43005-5 中学校道徳「明日をひらく」2 東京書籍 ISBN978-4-487-43006-2 中学校道徳「明日をひらく」3 東京書籍 ISBN978-4-487-43007-9						
参考書 なし						
評価方法 ・道徳学習指導案（30%） ・出欠、授業への参加態度等（30%） ・レポート等提出状況（40%）						
その他 講義項目については、それぞれ、資料を印刷し配付する。						

科目名		教員名	配当年次	期間	形態	単位数
生徒指導の研究	09242	藤井 壽夫	1	前期	講義	1
授業目標・到達目標 《授業目標》 生徒指導は、一人一人の子どもが、自らの所属する集団や生活に適応し、自分のよさや持ち味を健やかに伸ばしていくとともに、将来、社会の中で自己実現できるような資質や能力、態度を育成することを目的としている。本授業において、今日的課題や地域課題と結びつけて、その指導理念や指導原理を学ぶとともに、実践力を高める方策等についての理解を深めることを目指す。 《到達目標》 1. 子どもの生活実態と今日的課題及び地域課題について説明できる。 2. 生徒指導の意義と課題について、学習指導要領、現状を押さえて説明できる。 3. 生徒指導における基本姿勢や手法を理解し、説明できる。 4. 生徒指導における今日的喫緊の課題を理解し、教師としての対応を説明できる。 5. 生徒指導と他機関との連携の重要性を理解し、説明できる。						
講義計画・準備内容 《講義計画》 第1回 オリエンテーション（本講義の目標と内容、講義中のきまり等の確認） 第2回 子どもの現状と今日的課題（情報化社会の光と影） 第3回 生徒指導の意義と課題①（生徒指導提要と生徒指導の意義） 第4回 生徒指導の意義と課題②（生徒指導の今日的課題） 第5回 生徒指導の基本姿勢①（児童・生徒理解） 第6回 生徒指導の基本姿勢②（望ましい人間関係づくりと集団指導、個別指導） 第7回 生徒指導の手法①（Q U、アセスの実践的活用） 第8回 生徒指導の手法②（構成的グループエンカウンターの活用） 第9回 生徒指導の手法③（接点の理解と活用） 第10回 生徒指導と交流分析（交流分析とエゴグラム） 第11回 他機関との連携と地域課題（非行・薬物・暴力行為等） 第12回 生徒指導の喫緊の課題①（いじめ） 第13回 生徒指導の喫緊の課題②（不登校） 第14回 これからの生徒指導の在り方（教師の姿勢とカウンセリングマインド） 第15回 まとめ（授業の振り返り・成果と課題の確認・自己評価・授業評価・教職履修カルテへの記入） 《授業外に行うべき学習（予習・復習、準備学習等）》 毎回、課題を示すので、次回までに準備、学習してくること。 《標準学修時間の目安》 1回の講義あたり、予習・復習を含めて2時間の学修が必要である。						
使用教科書 なし						
参考書 なし						
評価方法 ・授業への出欠、参加態度、発言（得点配分30%） ・レポートの提出状況と内容（得点配分20%） ・筆記試験（得点配分50%）						
その他 なし						

科目名		教員名	配当年次	期間	形態	単位数
特別活動の研究	09244	小岩 眞智子	1	後期	講義	1
授業目標・到達目標 《授業目標》 特別活動は、望ましい集団活動を通して、心身の発達と個性の伸長を図るとともに、集団の一員としての自覚を深め、協力してよりよい生活を築こうとする自主的実践的な態度を育てることを目指している。本授業においては、学習指導要領において重点化された「人間関係」を軸に、特別活動の基本的な押さえと構造を踏まえながら、各内容の特質を学び、指導を進める上で必要な実践力の向上を図ることを目標とする。 《到達目標》 1. 特別活動の意義について、現今の教育課題を踏まえて意見交換できる。 2. 特別活動の目的や内容等について説明できる。 3. 特別活動の指導法について、内容ごとの特質を踏まえて協議できる。 4. 特別活動の指導案づくりの基盤やプロセスについて説明できる。 5. 特別活動の授業を通して育てる力や態度について把握し、実践できる。 6. 特別活動の評価の在り方について説明できる。						
講義計画・準備内容 《講義計画》 第1回 オリエンテーション（本講義の目標と内容の確認・教職履修カルテの活用法） 第2回 特別活動の教育的意義 第3回 特別活動の歴史の変遷 第4回 特別活動の基本的な性格（学習指導要領における位置付け） 第5回 特別活動の指導内容①（特別活動の原理・指導方法） 第6回 特別活動の指導内容②（学級活動） 第7回 特別活動の指導内容③（児童会活動・生徒会活動） 第8回 特別活動の指導内容④（学校行事①：儀式的行事） 第9回 特別活動の指導内容⑤（学校行事②：勤労生産・奉仕的行事：ボランティア活動等） 第10回 授業づくりの基盤（全体構想（教育課程）→特別活動の全体計画） 第11回 学級活動指導案を立てる道筋（年間指導計画→指導案） 第12回 学級活動指導案の作成と配慮事項 第13回 学級活動の授業の仕方 第14回 特別活動の評価の仕方（実践交流と研究協議） 第15回 まとめ（授業の振り返り・成果と課題の確認・自己評価・授業評価・教職履修カルテへの記入） 《授業外に行うべき学習（予習・復習・準備学習等）》 ・予習としては、次回のテーマ等について調べ、自分の考えをまとめておく。 ・復習としては、授業での学びや感想を記録し、提出する。 ・詳細については、各回ごとに提示する。 《授業外に行うべき学習（予習・復習・準備学習等）》 1回の講義あたり、1時間の予習と1時間の復習が必要となる。						
使用教科書						
参考書 なし						
評価方法 ・授業や活動への参加態度（得点配分30%） ・発言内容やレポート内容等（得点配分30%） ・期末試験（得点配分40%）						
その他 講義の中で、適宜プリントを配布する。						

科目名		教員名	配当年次	期間	形態	単位数
地域福祉と教育	09330	小岩 眞智子	2	後期	講義	2
授業目標・到達目標 《授業目標》 本授業は、「社会福祉」並びに「地域福祉」の概念や概要を学び、福祉的なものの見方や考え方を体験的に培うとともに、福祉教育の在り方について理解することを目標とする。具体的には、「生きる力」を育む学校教育における福祉教育やボランティア活動の位置付けや実践の仕方を通して、地域社会にある福祉施設や地域住民との連携や交流の必要性をとらえ、地域福祉的な活動やボランティア活動に自ら参加し、温かい地域づくりに主体的に取り組む態度を養うことを目指す。 《到達目標》 1. 福祉の充実や福祉教育の必要性について、その背景を押さえて説明できる。 2. 社会福祉・地域福祉の理念や制度について理解し、説明できる。 3. 函館市における福祉的な取組について興味関心を持ち、資料を集めることができる。 4. 地域福祉の実際をとらえ、福祉教育の必要性について自分の考えをまとめて記述することができる。 5. 学校教育における福祉教育の位置付けを理解し、その実践について説明できる。 6. 地域福祉やボランティア活動に関する自分の考えや行動について小論文にまとめることができる。						
講義計画・準備内容 《講義計画》 第1回 オリエンテーション（本講義の目標と内容の確認・教職履修カルテの活用法） 第2回 福祉教育や福祉の充実が求められる背景（少子高齢化・核家族化・離職者の増加・貧困等） 第3回 社会福祉・地域福祉の理念と制度 第4回 社会福祉・地域福祉の歩みと課題（社会福祉施設職員の講話） 第5回 函館市における地域福祉の取組（福祉センター・社会福祉協議会の役割） 第6回 地域福祉の実際と福祉教育の必要性①（児童福祉：虐待防止） 第7回 地域福祉の実際と福祉教育の必要性②（母子福祉：子育て支援） 第8回 地域福祉の実際と福祉教育の必要性③（高齢者福祉：独居支援・介護サービス） 第9回 地域福祉の実際と福祉教育の必要性④（障害者福祉：通所授産施設・障害者のニーズ） 第10回 地域福祉を支えるボランティア活動（DV防止活動：ウィメンズネット職員の講話） 第11回 学校教育における福祉教育①（基本的な考え方・ボランティア活動・奉仕的活動の推進） 第12回 学校教育における福祉教育②（「総合的な学習の時間」における授業実践） 第13回 学校教育における福祉教育③（「道徳」における授業実践） 第14回 地域福祉を支えるために私のできること（小論文作成） 第15回 まとめ（小論文の交流・授業評価・自己評価・教職履修カルテへの記入等） 《授業外に行うべき学習（予習・復習・準備学修等）》 ・予習として、次回のテーマや課題等について調べ、まとめる。 ・復習として、授業での学びや感想を記録し、提出する。 ・詳細については、各回ごとに提示する。 《標準学修時間の目安》 1回の講義あたり、1時間の予習と3時間の復習が必要となる。						
使用教科書						
参考書 なし						
評価方法 ・授業への参加態度とレポートの内容及び提出状況（得点配分70%） ・小論文の取材態度及び内容（得点配分30%）						
その他 ・講義の中で、適宜プリントを配布する。 ・第14回目に小論文を作成することから、資料収集等に努め、準備しておくこと。						

科 目 名	教 員 名	配当年次	期 間	形 態	単 位 数	
進路指導の研究	09344	小 岩 眞智子	2	後期	講義	1
授業目標・到達目標 《授業目標》 今日、人々の生活様式の変化に加え、産業構造や雇用体系を含めて社会全体が急速に変動しており、子どもたちの多くは、将来に対する見通しが持てず、不安や恐れを募らせている。これらを受け、学校教育においては、自らの人生設計を含めた「生き方」の指導が求められており、進路指導はその中核を担っている。本授業は、進路指導を計画的、組織的、体系的に展開することの重要性について学ぶとともに、自らの進路についても見通しを立て、具体的な展望を持つことを目指す。 《到達目標》 1. 進路指導における今日的課題について説明できる。 2. 進路指導の意義と役割、実施上の課題について説明できる。 3. キャリア教育が求められている背景や就業状況について理解し、自分の考えを発表できる。 4. キャリア教育について理解し、勤労・奉仕体験の必要性について意見交換できる。 5. 勤労奉仕体験から学んだことをまとめ、自らの勤労観や職業観と併せて記述できる。 6. 学びを振り返り、自己評価をし、自らの進路に向けての課題を設定できる。						
講義計画・準備内容 《講義計画》 第1回 オリエンテーション（講義目的、内容、進め方の確認、今日的課題の把握） 第2回 進路指導に関する今日的課題（フリーター、ニートの増加） 第3回 進路指導とは（定義と6領域の活動） 第4回 進路指導を進める上で配慮すること（学習指導要領の位置付け） 第5回 進路指導に求められている課題 第6回 キャリア教育が求められる背景 第7回 キャリア教育の特徴と方向性 第8回 キャリア教育の構造（中学校におけるキャリア教育の取組） 第9回 職場における若者の就業状況と課題（企業で働く先輩の講話） 第10回 進路指導やキャリア教育に期待すること（企業で働く先輩との協議） 第11回 進路指導やキャリア教育推進の方策（各教科への位置付け・学校段階の課題） 第12回 勤労や奉仕にかかわる体験的な学習の在り方（職場体験・インターンシップ・ボランティア活動） 第13回 勤労奉仕体験に関するレポートの作成（ボランティア活動やアルバイトから学んだこと） 第14回 体験発表についての意見交流（自分の勤労観、職業観の育ち） 第15回 まとめ（授業評価・自己評価と課題の設定・教職履修カルテへの記入等） 《授業外に行うべき学習（予習・復習・準備学修等）》 ・予習として、次回のテーマ等について教科書を調べ、自分のプラン等を立案する。 ・復習として、授業での学びや感想を記録し、提出する。 ・第13・14回は、全員の発表となることから、事前にボランティア活動等に取り組み、勤労奉仕体験を通して感じたことや学んだこと、そこで得た勤労観や職業観を記録しておく。 ・詳細については、各回ごとに提示する。 《標準学修時間の目安》 1回の講義あたり、1時間の予習と1時間の復習が必要となる。						
使用教科書 教職入門～教師への道、吉田辰雄・大森正、図書文化、ISBN978-4-8100-9311-7						
参考書 なし						
評価方法 ・授業への参加態度や発言とレポートの提出（得点配分50%） ・勤労・奉仕体験の記述及び発表内容（得点配分20%） ・自分の進路に向けての自己課題の設定内容（得点配分30%）						
その他 ・教科書は1年次前期「教職の意義と職務」等においても使用する。 ・講義の中で、適宜プリントを配布する。						

科目名		教員名	配当年次	期間	形態	単位数
教育方法論	09240	小岩 眞智子	2	前期	講義	1
授業目標・到達目標 《授業目標》 授業づくりに取り組むためには、「何を学ばせるか（目標の設定）」、「どんな教材や教具を使うか」、「どのような学習活動を行うか（学習形態等）」、「どのように働きかけるか（発問等）」の方法や技術の吟味が必要である。本授業においては、学校や子どもの実態に応じて工夫・改善を図りながら、一人一人が興味・関心を持って意欲的に学ぶ授業づくりを支える具体的な方法や技術について理解することを目標とする。 《到達目標》 1. 授業づくりをする上で必要な方法や技術について理解し、意見交換できる。 2. 授業づくりの方法と技術についてとらえたことをレポートにまとめることができる。 3. 資料づくりや説明の仕方を工夫して、発表することができる。 4. 授業づくりの方法と技術を理解して、指導案を立てて、授業の準備ができる。						
講義計画・準備内容 《講義計画》 第1回 オリエンテーション（本講義の目標と内容と進め方の確認・教職履修カルテの活用法） 第2回 教育方法の意義と今日的な課題 第3回 教育方法の要素（授業づくりをする上で必要なこと） 第4回 教材研究と教材開発の仕方（師範授業の参観） 第5回 授業づくりの方法と技術①（題材の設定・教材教具の用意） 第6回 授業づくりの方法と技術②（指導案の枠組みと学習過程） 第7回 授業づくりの方法と技術③（学習課題の設定と学習活動） 第8回 授業づくりの方法と技術④（発問の仕方と工夫） 第9回 授業づくりの方法と技術⑤（板書の仕方と工夫） 第10回 授業づくりの方法と技術⑥（個への指導の仕方・机間指導等） 第11回 授業づくりの方法と技術⑦（学習形態の工夫と活用の仕方） 第12回 授業づくりの方法と技術⑧（話し合い学習の進め方） 第13回 授業づくりの方法と技術⑨（ノート指導） 第14回 授業づくりの方法と技術⑩（評価の仕方） 第15回 まとめ（授業の振り返り・成果と課題の確認・教職履修カルテの記入） 《授業外に行うべき学習（予習・復習・準備学修等）》 ・予習として、自分が担当する授業の資料づくりをし、説明の仕方を工夫する。 ・復習として、授業での学びをもとに、自分の指導案や教材を作成する。 また、授業や活動からの学びや感想を記録して、提出する。 ・詳細については、各回ごとに提示する。 《標準学修時間の目安》 1回の講義あたり、1時間の予習と1時間の復習が必要となる。						
使用教科書						
参考書 なし						
評価方法 ・授業への準備及び参加態度（得点配分50%） ・レポート、指導案及び発表の内容等（得点配分50%）						
その他 講義の中で、適宜プリントを配布する。						

科目名		教員名	配当年次	期間	形態	単位数
教育相談の研究	09342	小岩 眞智子	2	後期	講義	2
授業目標・到達目標 《授業目標》 本授業は、社会環境や保護者等の意識の変化に伴って生じている子どもの問題行動等に対応し、健やかな育ちを支える学校教育相談の在り方について実践的に学ぶことを目標とする。具体的には、不登校やいじめ及び発達障害等の教育課題についての理解を深めるとともに、心理検査等を通して自己理解を深め、教師に求められる基本姿勢として、カウンセリングマインドに基づく子ども理解の仕方や関わり方、相談の仕方を身に付けることを目指す。 《到達目標》 1. 現代の子どもと取り巻く環境の変化を理解し、教育上の諸問題について説明できる。 2. 教育相談の基礎的な知識や技法を理解し、教師としての基本的な態度を実践できる。 3. 子どもの問題行動について理解し、その対応の仕方について説明できる。 4. 育てるカウンセリングに興味を持ち、進んで実践することができる。 5. 子どもや保護者との面接相談の仕方について理解し、ロールプレイに取り組むことができる。 6. 教育相談等に関する地域専門機関の役割についてまとめ、記述することができる。						
講義計画・準備内容 《講義計画》 第1回 オリエンテーション（本講義の目標と内容の確認・教職履修カルテの活用法） 第2回 学校教育相談の基本姿勢（カウンセリングマインド・基礎理論・相談技法） 第3回 子どもの問題行動の現状（問題行動の種類・問題発生メカニズム） 第4回 発達障害等のある子どもの理解と対応（LD・ADHD・高機能自閉症等の特性・環境調整の必要性） 第5回 心の病気のある子どもの理解と対応（摂食障害・ノイローゼ等の特性・行動観察・心理検査の活用） 第6回 不適応行動を示す子どもの理解と対応（不登校・引きこもり等の特性・早期発見と対応の仕方） 第7回 反社会的な行動をする子どもの理解と対応（いじめ・非行・暴力行為等、早期発見の仕方と防止策） 第8回 虐待を受けている子どもの理解と対応（児童相談所職員の講話） 第9回 育てるカウンセリングの実践①（構成的グループエンカウンター・アサーショントレーニング） 第10回 育てるカウンセリングの実践②（コーチング・リフレーミング） 第11回 子どもに対する面接相談の仕方（ロールプレイ：受容と共感の伝え方） 第12回 保護者に対する援助と基本姿勢（ロールプレイ：信頼関係の築き方） 第13回 保護者に対する面接相談の仕方（ロールプレイ：傾聴スキル・応答スキル） 第14回 地域の教育相談体制と他機関・専門家等との連携の仕方（教育センター職員の講話） 第15回 まとめ（授業の振り返り・授業評価・自己評価・教職履修カルテへの記入等） 《授業外に行うべき学習（予習・復習・準備学修等）》 ・復習として、授業での学びや感想を記録し、提出する。 ・予習として、次回のテーマ等について調べ、まとめる。 ・詳細については、各回ごとに提示する。 《標準学修時間の目安》 1回の講義あたり、1時間の予習と3時間の復習が必要となる。						
使用教科書						
参考書 なし						
評価方法 ・授業における課題理解と参加態度（得点配分30%） ・レポートの内容（得点配分20%） ・期末試験（得点配分50%）						
その他 講義の中で、適宜プリントを配布する。						

科目名		教員名	配当年次	期間	形態	単位数
栄養教育実習	09320	清水陽子・保坂静子	2	前期	実験・実習	2
授業目標・到達目標 《授業目標》 教職に関する科目及び栄養士養成課程での修得内容を基礎とする。 1. 教育活動全体を通して、栄養教諭の職務内容、使命、役割について理解を深める。 2. 食に関する指導と学校給食の一体的な展開について理解し実践力を身につける。 3. 教育実習（一週間）期間の諸課題について具体的に実践的な学習が成立するよう計画的に進める。 《到達目標》 1. 教育活動全体を通して、学校教育に関する理解と認識を深め、栄養教育実習を計画することができる。 2. 栄養教諭の心構えや態度を学習し、栄養教諭に求められる役割を理解し、実践することができる。 3. 生きた教材としての給食と食に関する指導との一体化について理解し、発達段階に合わせた指導ができる。						
講義計画・準備内容 《授業計画》 ・栄養教育実習では、事前指導・栄養教育実習（一週間）・事後指導を実施する。 ・栄養教育実習の事前指導の半分（第1回から第8回）をアクティブラーニング方式で行う。 第1回 栄養教育実習の意義・目的の確認 第2回 栄養教育実習を充実させるために必要なこと 第3回 食に関する指導の進め方（目的・ねらい） 第4回 授業の進め方（特別活動における指導） 第5回 授業の進め方（教科における指導） 第6回 授業の進め方（給食時間における指導） 第7回 授業の進め方（教材の作り方・板書の仕方） 第8回 食に関する指導（発達段階に応じた指導；低学年） 第9回 食に関する指導（発達段階に応じた指導；中学年） 第10回 食に関する指導（発達段階に応じた指導；高学年） 第11回 食に関する指導（発達段階に応じた指導；中学生） 第12回 栄養教育実習の心得とテーマの確認 第13回 栄養教育実習ノートの書き方 第14回 栄養教育実習のまとめの仕方 第15回 栄養教育実習の報告と反省 《授業外に行うべき学習（予習・復習、準備学習等）》 食に関する指導のための指導案の提出（給食時間・特別活動・その他の教科） 《標準学修時間の目安》 1回の報告書（レポート）作成に1～2時間程度の学修が必要となる						
使用教科書 教科書は使用しないが、随時、資料及びプリント等を配布する。						
参考書 なし						
評価方法 栄養教育実習の事前学習、事後学習の結果（10%）と、栄養教育実習校における「実習評価表」（90%）により評価する。						
その他 函館短期大学で作成した「栄養教育実習の手引き」「栄養教育実習ノート」を配布し活用する。 1年次において、卒業必修科目、栄養士必修科目、栄養教諭必修科目の単位を取得していること。 栄養教育実習（2単位）は、事前及び事後指導（1単位）学校での実習（1単位）である。						

科目名		教員名	配当年次	期間	形態	単位数
中学校教育実習	09310	藤井 壽夫	2	その他	実験・実習	5
授業目標・到達目標 《授業目標》 本科目では、中学校において行う校外実習とそのため事前指導により構成されており、教育実習を通して教職の本質を体得することを目的としている。教職科目中、教育実習は最も重要なものであり、実習校への負担も大きいことから、事前学習等、確実に定着させることが求められる。そのため、実習の意義、目的、望ましい教師像、指導案作成、実習録の作成等を実践的に学習を深めていく。 《到達目標》 1. 教育実習の意義と重要性を理解し、説明できる。 2. 実習校に出向いた際の留意事項十分理解し、実践できる。 3. 教育実習において、授業観察、授業研究、学級経営、生徒指導等を実践できる。 4. 教育実習における研究授業を学習指導案に基づき実施し反省をまとめられる。 5. 教育実習日誌を計画的に整理記入し完成させることができる。 6. 実習終了時のマナーについて説明し、実行できる。						
講義計画・準備内容 《講義計画》 第1回 オリエンテーション（教育実習とは、何を学ぶか） 第2回 第Ⅰ期教育実習の意義・目的（観察実習の意義・目的） 第3回 第Ⅰ期教育実習の内容（1）（教育実習のために準備すること） 第4回 第Ⅰ期教育実習の内容（2）（観察・参加を中心とした実習） 第5回 第Ⅰ期教育実習の内容（3）（授業、生徒指導、学級経営観察のポイント） 第6回 第Ⅰ期教育実習の内容（4）（学級経営、校務分掌、学校の組織等） 第7回 第Ⅰ期教育実習の内容（5）（学校経営と教科経営） 第8回 第Ⅰ期教育実習の心得（1）（実習校での基本、マナー） 第9回 第Ⅰ期教育実習の心得（2）（各場面での挨拶のしかた） 第10回 第Ⅰ期教育実習の心得（3）（実習校との連絡の取り方、電話応対） 第11回 第Ⅰ期教育実習の実際（1）（準備の仕方、参観する際の留意点） 第12回 第Ⅰ期教育実習の実際（2）（学活の進行の手順、役割分担の理解と参加のしかた） 第13回 教育実習日誌の書き方（1）（具体的・計画的な記述の仕方） 第14回 教育実習日誌の書き方（2）（反省・評価が生きる記述の仕方） 第15回 教育実習後について（終了時挨拶とお礼状の発送、実習録の提出） <第Ⅰ期教育実習実施> 第16回 第Ⅱ期教育実習の要点（計画～実施～評価） 第17回 第Ⅱ期教育実習の意義・目的（教育実習の意義） 第18回 第Ⅱ期教育実習の内容（1）（教育実習を充実させるために） 第19回 第Ⅱ期教育実習の内容（2）（観察・参加・実習の総合としての実習） 第20回 第Ⅱ期教育実習の内容（3）（授業実習の内容、学習指導、生徒指導） 第21回 第Ⅱ期教育実習の内容（4）（学級経営、校務分掌、学校の組織等） 第22回 第Ⅱ期教育実習の内容（5）（教科指導の目的・ねらい、学習指導案について） 第23回 第Ⅱ期教育実習の心得（1）（学習指導案の作成方法） 第24回 第Ⅱ期教育実習の心得（2）（学習指導案作成の手順と書き方） 第25回 第Ⅱ期教育実習の心得（3）（授業の進め方、指導のポイント） 第26回 研究授業の持ち方（意義と準備の仕方、参観する際の留意点） 第27回 研究会（反省会）の持ち方（進行の手順、役割分担の理解と参加のしかた） 第28回 教育実習日誌の書き方（1）（具体的・計画的な記述の仕方） 第29回 教育実習日誌の書き方（2）（反省・評価が生きる記述の仕方） 第30回 第Ⅱ期教育実習への参加（目的意識、ねらいの再確認、終了とお礼状の発送） <第Ⅱ期教育実習実施> 《授業外に行うべき学習（予習・復習、準備学習等）》 毎回、課題を示すので、次回までに準備、学習してくること。 《標準学修時間の目安》 1回の報告書作成に1～2時間程度の学修が必要である。						
使用教科書 新しい技術・家庭（家庭分野）東京書籍 ISBN978-4-487-12135-1						
参考書 なし						
評価方法 教育実習の事前学習、事後学習の結果と、教育実習校における実習中の態度等を記録した「評価票」を総合して評価する。						
その他 本講義においては、中学校での教育実習が充実したものになるよう、観察を主とした第Ⅰ期教育実習と、研究授業等を主とした本実習である第Ⅱ期教育実習のⅡ期制としている。そのため、事前指導、第Ⅰ期教育実習については、1年後期に前倒して実施することとする。						

科 目 名		教 員 名	配当年次	期 間	形 態	単 位 数
教職実践演習(中学校・家庭)	09410	小 岩 眞智子	2	後期	演習	2
授業目標・到達目標 これまでに学んできた理論と、教育実習等で得られた教科指導や生徒指導の実践との統合を図る。また、使命感や責任感、教育的愛情に裏打ちされた確かな実践的指導力を有する教員としての資質の涵養と、その確認を行う。主な授業の形態は、講義や演習（場面指導、指導案作成、模擬授業）グループ討議等を組み合わせる。 《授業目標》 「中学校における教職理論と家庭科教育実践の統一的理解」のために、1.「使命感や責任感、教育的愛情」、2.「社会性や対人関係」、3.「生徒理解や学級経営」、4.「教科に関する指導力及び専門性」について学び、目指す教師像の形成に役立てる。 《到達目標》 1. 介護等体験や教育実習を通して学んで成果を列挙できる。 2. 教職科目の履修経過を振り返り、相互の科目の関係を説明できる。 3. 「家庭の生活と子どもの成長」における指導の要点を指摘できる。 4. 「食生活」における指導の要点を指摘できる。 5. 「衣生活・住生活と自立」における指導の要点を指摘できる。 6. 「身近な消費生活と環境」における指導の要点を指摘できる。 7. グループ討論により家庭科教論としての自覚と責任を確認できる。						
講義計画・準備内容 《講義計画》 第1回 <イントロダクション>（講義の進め方、評価の方法、グループ分け） 第2回 教育実習終了後の課題確認とその解決①－家庭分野の内容等 第3回 教育実習終了後の課題確認とその解決②－教師の役割・グループ討論 第4回 「家庭の生活と子どもの成長」における課題確認と教師の対応 第5回 「食生活」における課題確認と教師の対応 第6回 「衣生活・住生活と自立」における課題確認と教師の対応 第7回 「身近な消費生活と環境」における課題確認と教師の対応 第8回 教材開発の実践例 第9回 授業設計1（指導案の作成）－グループ討論・ロールプレイング 第10回 授業設計2（指導案の作成）－グループ討論・ロールプレイング 第11回 模擬授業と授業評価①（「家庭の生活と子どもの成長」） 第12回 模擬授業と授業評価②（「食生活」） 第13回 模擬授業と授業評価③（「衣生活・住生活と自立」） 第14回 模擬授業と授業評価④（「身近な消費生活と環境」） 第15回 確認とまとめ ～ 家庭科教論としての自覚と責任 《授業外に行うべき学習（予習・復習、準備学習等）》 毎回、課題を示すので、次回までに準備、学習してくること。 《標準学修時間の目安》 1回の講義あたり、予習・復習を含めて4時間の学修が必要である。						
使用教科書 なし						
参考書 なし						
評価方法 授業への参加態度、発表内容、レポート、指導案、模擬授業、履修カルテ等による総合評価						
その他 各授業でプリントを配布する。 必要に応じて、参考書や指導資料等を指定することもある。						

科目名		教員名	配当年次	期間	形態	単位数
教職実践演習(栄養教諭)	09420	清水陽子・藤井壽夫	2	後期	演習	2
授業目標・到達目標 《授業目標》 テーマ「栄養教諭に関する知識と技能の総合的理解」 1. A「学校給食管理」、B「食に関する指導」、C「社会性と地域連携の必要性」の資質に対応する演習に参加することで栄養教諭としての的確性を目指す。 2. 課題に沿った講義と研究活動を通して、成果は模擬授業によって確認することを目的とする。 《到達目標》 1. 「栄養に関する専門性」と「教職に関する専門性」を身につけ食に関する指導の授業ができる。 2. 栄養教諭に必須の具体的資質A「給食管理」、B「食に関する指導」、C「社会性と地域連携の必要性」について、講義・演習・グループ討議・現地調査を通して考えをまとめ、発表や報告ができる。						
講義計画・準備内容 《講義計画》 第1回 イントロダクション（本授業の目標や計画を聞き、自己の履修状況や栄養教育実習の成果と課題を振り返り、学習の見通しを立てる。グループ分けを行う。） 第2回 教育実習終了後における学校給食管理（学校現場の実際、調理場の機能）について課題確認し、解決の仕方をグループ協議する。 第3回 教育実習終了後における食に関する指導（栄養教諭の役割と職務内容、子どもに対する責任、教育活動を通して行う食に関する指導）について課題確認し解決の仕方をグループ協議する。 A「学校給食管理」：「発達段階に応じた食の変化に関する演習」幼児・児童・生徒の人格形成や発達段階に応じた学校給食の献立について考察する。 第4回 講義・事例研究：現職栄養士・栄養教諭（幼稚園や小学校・中学校）による。 第5回 現場調査：幼児児童生徒の給食風景の見学・発達段階・食生活・献立について調査 第6回 調査報告：調査結果から、報告・グループ討議を行う。 B「食に関する指導」：「発達の特徴を理解し、食に関する指導の課題に関する演習」幼児・児童・生徒に対する食に関する指導（ロールプレイング等）方法を具体的に追求しその課題をまとめる。 第7回 講義・事例研究：現職教諭・現職栄養教諭による 第8回 現場調査：幼稚園・小学校・中学校の食に関する指導の実施状況調査 第9回 調査報告：調査結果から、グループ討議を行う。 C「社会性と地域連携の必要性」：「栄養教諭の社会性や地域連携に関する演習」地域の特徴を生かした学校給食を実施するための地域と家庭との連携に関する調査を行う。 第10回 講義・事例研究：現職校長・教諭・学校関係業者・栄養教諭による 第11回 現場調査：農業組合・漁業組合・学校給食関係業者 第12回 調査報告：調査結果から、グループ協議を行いまとめる。 第13回 模擬授業 指導案の作成 第14回 模擬授業 指導案の作成と修正 第15回 模擬授業 発表と授業評価 《授業外に行うべき学習（予習・復習、準備学習等）》 模擬授業のための食に関する指導案の作成 《標準学修時間の目安》 次回の講義までに予習・復習を含めて4時間の学修が望ましい。						
使用教科書 教科書は使用しないが、随時、資料及びプリント等を配布する。						
参考書 栄養教育実習で作成した各自の実習ノート、栄養教育実習時のレポート課題						
評価方法 調査報告書の提出(40%)、模擬授業に関する資料(指導案等)(50%)、履修カルテ(10%)により評価する。						
その他 グループワークが多くなるので、各自責任を持って取り組むこと						